

令和4年度



学校安全総合支援事業

実践報告集



長野県教育委員会

はじめに

長野県では、過去 10 年ほどの間で多くの自然災害が発生しました。東日本大震災の翌日には長野県北部地震が発生し、平成 26 年の御嶽山噴火では、死者 58 人、行方不明者 5 人という甚大な被害が発生しました。令和元年東日本台風での浸水被害も記憶に新しいところです。さらに令和 2 年 8 月の豪雨災害により土石流が発生し、岡谷市において尊い命が奪われました。過去の災害を知り、過去から学び、備えることだけでなく、過去の災害を風化させることの無いよう、次世代に語り継いでいくことも安全教育の中で大切にしていきたいと考えています。

さて、本事業は、児童生徒が自他の生命を尊重することを基盤として、まずは知識を身に付け、それらを使って適切な意思決定や行動選択をし、安全で安心な社会づくりに進んで参加・貢献できる資質や能力、すなわち「生きる力」を育てることを目的としています。また、「危機管理マニュアル」の作成・検証や地域住民・保護者・関係機関との連携体制の構築など、学校の安全管理の充実・徹底も目指しています。

今後、東日本大震災に匹敵する被害をもたらすと予想されている南海トラフ地震や首都直下型地震、富士山大噴火なども含め、いつ、どのような自然災害が起こってもおかしくない時代に私たちは生きています。自然災害は避けられないものの、少しでも被害を軽減する「減災」が重要とされる時代を迎え、全国の自治体や学校において防災（減災）体制や防災教育に係る取組が推進されています。防災に関しては事前の準備が大切であり、「普段できないことは、いざという時にできない」ということを念頭に置いて最善の備えをすることが大切です。

また、平成 29 年に水防法や土砂災害防止法が改正され、市町村地域防災計画に定められた洪水浸水想定区域内等又は土砂災害計画区域内の要配慮者利用施設（学校や医療施設等）の所有者又は管理者は、避難確保計画の作成と避難訓練の実施等が義務付けられました。形式的な避難訓練の見直しや、突然襲ってくる自然災害に備え、より実践的な避難訓練が求められています。本事業の指定校では、授業以外の休み時間や掃除の時間等に災害発生を想定した避難訓練、予告なしの抜き打ち訓練等のほか、一次避難から二次避難、さらには引き渡し訓練といったより生徒の実態に合わせた訓練が実施されています。また、一人一台端末を使用したフィールドワークや、地域の方々との協働した防災教育を実施する学校も増えてきました。

本報告集は、そうした指定校の優れた実践をモデルとして、広く県内に紹介し、各校における安全教育の取組を推進する上での参考にしていただくとともに、安全教育の一層の充実を図るため、実践事例をまとめたものです。日常の授業や特別活動等を通じて、地域や学校の実情に応じた安全教育を実践し、児童生徒の学校安全に対する意識の高揚を図る取組に活用していただくようお願いします。

令和 5 年 2 月

長野県教育委員会事務局保健厚生課長 永岡 勝

目 次

学校安全総合支援事業実施要項（防災教育）	・・・・・・・・	1
----------------------	----------	---

学校防災アドバイザー派遣・活用の実践報告（25校）

1 安曇野市立豊科南中学校	・・・・・・・・	5
2 安曇野市立穂高東中学校	・・・・・・・・	8
3 安曇野市立三郷中学校	・・・・・・・・	11
4 安曇野市立堀金中学校	・・・・・・・・	15
5 長野市立裾花小学校	・・・・・・・・	19
6 長野市立加茂小学校	・・・・・・・・	23
7 長野市立大豆島小学校	・・・・・・・・	27
8 長野市立長沼小学校	・・・・・・・・	31
9 長野市立松ヶ丘小学校	・・・・・・・・	35
10 長野市立信里小学校	・・・・・・・・	39
11 長野市立清野小学校	・・・・・・・・	43
12 長野市立豊野東小学校	・・・・・・・・	47
13 長野市立豊野西小学校	・・・・・・・・	50
14 長野市立豊野中学校	・・・・・・・・	54
15 飯綱町立飯綱中学校	・・・・・・・・	57
16 白馬村立白馬南小学校	・・・・・・・・	60
17 栄村立栄小学校	・・・・・・・・	64

18	栄村立栄中学校	66
19	長野県木曾養護学校	70
20	長野県飯山養護学校	74
21	長野県諏訪養護学校	78
22	長野県安曇養護学校	82
23	長野県小諸養護学校	86
24	長野県長野養護学校	91
25	長野県長野盲学校	96

令和4年度 学校安全総合支援事業 実施要項

1 趣 旨

児童生徒等の安全を脅かす自然災害の発生等を踏まえ、地域や学校の抱える学校安全上の課題の解決を図るために、児童生徒等に対して、自然災害等の危険に際して自らの命を守り抜くため「主体的に行動する態度」を育成したり、「安全で安心な社会づくりに貢献する意識」を高めたりする安全教育とともに、「危機管理マニュアル」の作成・検証や地域住民・保護者・関係機関との連携体制の構築など学校の安全管理の充実・徹底について、地域から広域的に普及を図ることが重要である。

このため、防災教育を中心とした安全教育の指導法の開発・普及や通学時を含めた児童生徒等の安全確保体制の構築・普及について、学校外の専門家による指導・助言等を行うことにより、学校や地域における安全教育・安全管理の充実を図るものである。

2 事業概要

学校における防災教育を中心とした安全教育・安全管理等の取組を支援するため、下記の事業を実施する。

各事業を実施するにあたっては、県教育委員会に「推進委員会」を置き、県内全域への防災教育の普及充実に取り組む。また、複数の学校を含むモデル地域を設置する。

当該モデル地域の市町村教育委員会では「実践委員会」を置き、当該地域で取り組む防災教育の推進と市町村域内への普及充実に取り組む。

○ 自然災害に関する防災管理・防災教育

① 学校防災アドバイザーの派遣・活用（対象校に2～3回派遣）

ア 希望する小中特別支援学校に、学校防災アドバイザーを派遣し、地震・浸水害・土砂災害等に関する防災管理・防災教育の推進を図る。

(学校防災アドバイザーの支援内容：注1)

- 避難訓練の視察及び指導
- 「学校防災計画」、「危機管理マニュアル」等に関する指導、助言
- 学校内外の安全点検、登下校中・休日等の災害発生時における対応及び連絡体制、児童生徒の待機・引き渡し、安否確認、地域との連携、防災マップ作成見直し等に関する指導、助言
- 水害（河川環境）に係る防災授業の実施、防災教育担当教諭の支援
- * 浸水害・土砂災害を想定した避難訓練の視察及び指導
- * 「避難確保計画」の作成、「危機管理マニュアル」等に関する指導、助言
(※気象災害から身を守るための防災気象情報の活用についての指導、助言)

* 水防法の一部改正により市町村地域防災計画に定められた浸水想定区域又は土砂災害警戒区域内に位置する要配慮者利用施設（学校等）においては、「避難確保計画の作成」と「避難訓練の実施」が義務付けられたことから専門家による指導助言等の支援が必要。

イ 学校防災アドバイザー

信州大学教育学部	特任教授	榊原 保志 氏
信州大学教育学部	教 授	廣内 大助 氏
信州大学教育学部	教 授	島田 英昭 氏
信州大学学術研究産学官連携	助 教	本間 喜子 氏

信州大学教育学部	特任助教	内山 琴絵 氏
立正大学社会福祉学部	准 教授	白神 晃子 氏
特定非営利活動法人 DoChubu	マップサービス	落合 鋭充 氏
気象庁長野地方気象台	次長	宮内 誠司 氏
国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所防災情報課長		吉崎 皇淑 氏
長野県危機管理部危機管理防災課	主事	小原 拓弥 氏
長野県建設部砂防課	担当係長	山田 晃 氏
日本赤十字社長野県支部	課長補佐	小柳 由佳 氏

② 公開授業の実施

防災教育の授業を公開することで、地域内の学校間で連携した取組を促進する。

3 事業実施期間

令和4年6月27日～令和5年2月28日（予定）

4 実施方法

(1) 事業の流れ（希望する市町村は、計画書を作成、提出する）

① 推進委員会、モデル地域及び実践委員会の設置

ア 県教育委員会は、推進委員会を置き、事業実施希望のある市町村教育委員会と相談して複数の学校を含むモデル地域を設定

イ モデル地域内には、地域内で中心的に取り組む拠点校を置き、他校との連携を図る

ウ モデル地域の市町村教育委員会は実践委員会を設置し、モデル地域内の防災教育の充実に取り組む（実践委員会は、当該市町村教委担当者、県教委担当者、モデル地域内の各学校で防災教育を担当する教員（中核教員）、消防署、その他必要に応じて警察、学識経験者、PTA、地元自治会等で構成する。）

エ 市町村は、モデル地域の取組を域内に普及する

オ 実践委員会には学校防災アドバイザーを派遣する

② 学校防災アドバイザーの派遣・活用（対象校に2～3回派遣）

ア 市町村担当者は、モデル地域内の対象小中学校と学校防災アドバイザー派遣日程等の調整を行い、実施日の1週間前までに計画書をEメールで保健厚生課に提出すること。

（公開授業日より2ヶ月前までに要項等を提出。文科省のHPで情報公開の予定。）

イ 上記により、学校防災アドバイザーの派遣を受けた場合は、1週間以内に報告書を保健厚生課に提出すること。

5 完了報告

実施対象校は、事業の実施内容を記録（写真及び文書）に残し、事業終了後1ヶ月以内（最終：令和5年1月10日）に、実践報告書及び事業の成果がわかる資料※を市町村教委をとおして、Eメールで保健厚生課に提出すること。

市町村教委は、実施報告書により実施内容、アンケート調査結果、成果と課題等を記載の上、提出する。

※ 事業の成果がわかる資料・・・指導案、校舎内掲示物、転倒防止や避難、安全に関わる表示、写真、マニュアルや指導方法の改善点、児童生徒向けのチラシや家庭への通知等

注1：「学校防災アドバイザー支援内容一覧」

No.	所属	専門分野	アドバイス内容	その他
1	信州大学 (特任教授・教授・助教・特任助教) 立正大学 (准教授) NPO 法人 DoChubu (マップサービス)	<ul style="list-style-type: none"> ・自然地理学, 変動地形学, 防災教育, 災害科学 ・理科教育, 防災教育, 気象学 ・心理学 (認知心理学, 教育心理学, 障害者心理学) ・デジタルアーカイブ, デザイン 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然災害 (地震・風水害等) に関する基礎知識や対応等についての指導、助言 ・防災管理を中心とした校内の安全対策、災害時対応に関する指導、助言 ・防災教育 (生徒、児童向けの授業及び講演) ・教科教育内で災害、防災減災について取り入れる際の指導、助言 ・障害児者と家族の心理社会的支援、軽度障害児者の援助要請、地域における災害時要援護者の災害準備 ・避難所開設、地域連携等に関する助言指導 ・対策等に資する防災マップ作成及び活用のための活動支援 ・上記を念頭においた教員研修 	<p>原則的には全ての学校に担当を配置し、適切なアドバイスを継続的に実施。行政の担当部署や日赤等とも協力しながら、学校のニーズに応じて大学教員間の調整も含め研修内容などに適した各分野の専門家を調整するなど対応する。</p>
2	長野地方気象台	防災気象情報	大雨、台風、地震、火山噴火時等に発表される防災情報について、またそれを受けてとるべき行動について 指導、助言	
3	河川事務所	河川に関する洪水予報・水防警報、電気通信施設の運用・管理等	避難確保計画や浸水防止計画を作成する際の助言	
4	危機管理防災課	防災全般	防災分野について 防災講演、災害時におけるマイタイムライン作成や避難所運営ゲーム、防災ダック等	
5	砂防課	土砂災害について	土砂災害の事象とは 土砂災害に対する警戒避難について 児童生徒、教職員への指導助言	実施にあたり、砂防ボランティア協会が講師となる「赤牛先生派遣事業」をご活用ください
6	日本赤十字社 長野県支部	<ol style="list-style-type: none"> 1. 災害への備え 2. 被災者支援 3. 人材育成 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 災害への備え 防災啓発プログラム ア まもるいのち ひろげるぼうさい(小・中・高等学校別プログラム) ・災害テーマ別正しい知識と危険から身を守るための行動を身につける ・被災者、被災地について考える ・自助・共助の必要性を考える ほか イ ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん (4歳児からのプログラム) 	<p>実際の災害における赤十字救護活動や赤十字ボランティア活動、「人道」についての講演 など</p>

			<ul style="list-style-type: none"> ・災害テーマ別に遊びや生活に必要な情報を 楽しみながら、避難行動を身につける ウ 屋内での安全対策 エ 避難所体験ゲーム <ul style="list-style-type: none"> ・避難所の受入れから部屋割り、ペット・ト イレ問題など、運営時の対応や平時の避 難所（学校）について考える オ 炊き出し訓練 <ul style="list-style-type: none"> ・特殊な袋を使った食事（主食、副菜、デザ ート等） カ 救急法 <ul style="list-style-type: none"> ・身近なものを使った応急手当 2. 被災者支援 3. 人材育成 <ul style="list-style-type: none"> ・防災リーダーの育成 	
--	--	--	--	--

豊科南中学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について
—地域防災学習の実施・学校防災アドバイザー派遣・引き渡し訓練計画—

安曇野市立豊科南中学校

1 はじめに

安曇野市立豊科南中学校は安曇野市の中央に位置し、西に北アルプスを仰ぎ、学区に拾ヶ堰が流れ、水田に囲まれている自然豊かな学校である。豊科中学校が豊科南中学校と豊科北中学校に分かれ、本校は昭和60年に開校した。生徒数300名、各学年3学級、特別支援学級3学級、こども病院の院内学級1学級を含め全13学級の中規模校である。校舎は南と北に1棟ずつであり、1階と2階にそれぞれの校舎をつなぐ渡り廊下が設置されている。北校舎には校庭側（北側）に非常階段があり、すぐに屋外に出られるような構造になっている。

学区内に山や大きな河川があるものの、職員も生徒も防災（特に水害）に対する意識が低い。防災マップの見直しにより、本校が犀川と万水川の二つの河川の浸水区域に指定されたことを意識させ、自分の身を自分で守る意識を高め、緊急時の避難行動が自発的にできる生徒を育てたい。本年度は、昨年度より計画をしていた引き渡しを含む水害に関わる避難訓練を小学校と連携して実施予定だったが、コロナ禍の影響で実施することができなかった。来年度は、今年度の計画を元にして実施に向けて準備を進めていく。

2 本年度実施した避難訓練

(1) 第1回避難訓練（コロナ禍のため中止）

- ① 当初の実施予定日 : 4月27日（水）
- ② 実施内容：避難経路の確認・非常事態への対応 ※放送による

(2) 第2回避難訓練（コロナ禍のため中止）

- ① 実施日 : 9月2日（金）
- ② 実施内容：水災害防災（水防）引渡訓練・職員研修
 - 万水川の氾濫による生徒の保護者引き渡しを想定した水詐欺防災引渡訓練
 - ・オクレンジャーの配信と引き渡し準備
 - ・体育館への避難（水平避難）
 - ・保護者への引き渡し
 - ・3階への避難（垂直避難）

(3) 第3回避難訓練

- ① 実施日 : 11月4日（金）
- ② 実施内容：避難経路の確認・非常事態への対応
 - ア 訓練の意義や火災発生時について各学級で指導
 - イ 火災報知器の作動
 - ウ 避難経路の安全確認 ・避難指示

- エ 生徒と職員の人員確認
- オ 防護団活動（係活動の確認）
- カ 地区別整列練習・人員確認



3 本校の避難訓練からの課題

防災マップの改正により、本校は犀川と万水川の浸水想定区域の学校となった。安曇野市作成水防タイムラインに沿った行動を考えると、「氾濫注意情報」が出た段階で保護者への引き渡しを行うことになる。本校は今まで地震や火災を想定した避難訓練は行ってきたが、水害想定での避難訓練や引き渡し訓練を行ったことがなく、本年度、実施予定だったが、やむなく中止とした。来年度は、今年度の計画を元に水害想定での引き渡し訓練を行う必要がある。

4 学校防災アドバイザーの関わり

避難訓練参観・事後指導

- ① 実施日 8月9日（火） 10：00～
- ② 指導・助言
 - ア 保護者が引き取りに来たときの駐車場の確保と動線の確認
 - イ 垂直避難・水平避難についての違い
垂直避難の場合、1階が浸水するとトイレが使用できない。
 - ウ 引き渡しを連絡するタイミング
氾濫警戒情報で引き渡しでは間に合わない。
 - エ 引き渡しカードの活用

5 地域防災学習の計画（コロナ禍の為、中止）

(1) 目的

生徒たちが自分たちの地区の防災対策や防災訓練を知ったり様々な奉仕活動を行ったりすることを通して、地域を守り支える大切さを知ったり地域を大切に思ったりする心を養う。

(2) 実施日 令和4年5月31日（火） 午後2：30～4：00

- ① 地域防災学習 2：30～ 15分程度
- ② 奉仕活動 3：00～4：00

(3) 計画内容

- ア 地域の方々と顔を合わせるにより、どんな人がいるのかの確認、実際に物を使用しての体験(地震体験車乗車、消火栓の使用方法等)をする。
- イ 区長さん、防災リーダーさんからお話を伺う。
- ウ 公民館の防災グッズや公園の防災施設を見学する。

6 事業の成果と今後の課題

(1) 成果

- ① 学校の立地場所から想定される水害の危険性を職員が意識することができた。

- ② 防災アドバイザーの助言から、生徒引き渡しの具体的なイメージと配慮すべきことを再確認することができた。
- ③ 地域防災学習から、生徒自身が地域の方々から地域防災の仕組みを教わることができ、自分は地域に何ができるのかを主体的に考えることができた。

(2) 課題

- ① コロナ禍の為、2年連続で引き渡し訓練が実施できなかった。来年度の実施に向け、小学校と連携して計画を立案する。
- ② 校内での引き渡し手順をマニュアル化し、保護者と共有する。
- ③ 地域と連携した防災学習や防災訓練をさらに進め、生徒の地域防災への意識を高める。

(文責 教頭 尾臺 博之)

穂高東中学校における地域と連携した防災学習の取組について

－ 地域防災の主体としての自分のあり方を考える －

安曇野市立穂高東中学校

1 はじめに

令和4年度安曇野市立穂高東中学校は、19学級（うち特別支援学級5学級）、全校生徒数460名、職員数48名で構成されている。平成13(2001)年に旧穂高中学校が東西2校へと分かれた後も、市内では規模が大きな学校である。

本校所在地西側には、北アルプスが連なっている。学区東側では活断層の存在が指摘されており、安曇野市地域防災の「ゆれやすさマップ」では震度6弱が想定されている。また、北アルプスを源流とするいくつもの河川が学区内を流れている。学区内は、浸水想定区域や土砂災害警戒区域には入っていないが、川の周辺域や四方に張り巡らされた堰や用水路からの浸水の可能性がないとは言えない。

本校では、6年前から「地域と連携した防災学習」を実施してきた。在宅時における災害等、緊急時の避難経路や誘導方法に関する知識を知り、適切な判断と行動により、安全に避難ができるようにするとともに、中学生も地域の一員として、災害時にできることは、進んで協力する心構えをもてるようにするためである。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大対策により、令和2、3年度と実施できなかった。この2年間で地域の区長が替わったり、校内でも1度も本活動を経験せずに卒業してしまう生徒が出てきたりすること、そして教職員も異動により経験者が減ってしまうといった懸念がある。こうした状況を打破するために、十分に感染対策を講じた上で、本年度は実施にすることにした。

なお、本校の防災学習は、学校防災支援アドバイザーとして、信州大学教育学部教授の廣内大助先生をお迎えし、助言をいただきながら進めてきた。「地域と連携した防災学習」については、本年度から信州大学学術研究・産学官連携推進機構の本間喜子助教のご指導、長野県教育委員会保健厚生課、安曇野市危機管理課等の協力を得て実施している。

2 「地域と連携した防災学習」の実際

(1) 目的

- ① 中学生が地域防災に対する当事者意識をもてるようにする。
- ② 在宅時における災害等、緊急時の避難経路や誘導方法に関する知識を知り、適切な判断と行動により、安全に避難ができるようにする。
- ③ 地域の一員として、災害時にできることは進んで協力する心構えをもてるようにする。

(2) 実施までの経過

- ① 学校長による穂高地域区長会での趣旨説明と協力依頼

4月実施の区長会で、活動の意義と内容について次の内容で説明し、協力を依頼した。

- (ア) 地域の皆様との体験的な学びを通し、中学生が地域防災に対する当事者意識をもてるようにするとともに、地域の一員として、災害時にできることは、進んで協力しようという心構えをもつことができるようにしたい。
- (イ) 在宅時における災害等、緊急時の避難経路や誘導方法に関する知識を知り、適切な判断と行動により、安全に避難ができるようにしたい。
- (ウ) 成長過程の途上にある中学生が、地域に住む「良い大人」と出会うことを通して、その考え方や生き方に触れる機会としたい。

② 校外生徒会と区長会による事前打合せ

①の後、防災安全係から区長宛に「地域と連携した防災訓練」実施案作成を依頼した。夏季休業前に、区長と地区生徒会の各地区長、担当職員が一堂に会して、実施案を検討した。



打合せでは、学校の中だけでは分からない、各地区の実情、地域で求められている学校や若者の役割について、たくさんのご意見を寄せていただいた。各地区の生徒代表者も、活動内容について中学生ならではの感性でアイデアを出していた。

③ 安曇野市危機管理課、穂高消防署との連携

2の(1)は、行政でも同様の課題を抱えている。地域防災の将来の担い手育成や、本学習を持続可能な活動としていくには組織間の連携は欠かせない。危機管理課と消防署には、各区長から寄せられる相談や依頼の対応、当日は現地支援をお願いした。また、実施後のふり返りでは、次年度に向けた改善策について指導していただくようお願いした。

(3) 活動の実際

「中学生が活躍する地域っていいですね」当日にご指導いただいた本間助教のつぶやきである。非常用担架の作成や使用、消火器や消火栓のあつかい方、非常用テントの設営、災害時の行動手順の確認、防災倉庫の見学や点検など、区ごとに区長と地区生徒会長で計画した活動内容は多彩であった。

防災減災アドバイザー 本間喜子先生のご指導

防災学習は楽しく、避難訓練や実際の場面では真剣に。これが大切である。若者、特に中高生は地域と家庭をつなぐキーパーソン。地域に住む人たちと中学生が一緒に何かをすることは価値がある。地域防災以外にも役に立つ。「その時、自分だったらどうするか」それを考えるためには、様々な経験が必要。東中は、学校以外で学ぶ機会がある。このことは、他地域の見本となる。広げていきたい。

生徒の様子や感想は次のとおりである。



- ・東日本大震災の時の「釜石の奇跡」は、日頃の避難訓練と中学生が率先して動いたからこそ、周辺の人たちほぼ全員が無事だったと聞いた。自分も率先して動く、可能な範囲で手伝う・・・、そんな中学生でいたい。
- ・大きな地震は50～100年に1回はくると言っていた。ということは、自分が生きている間には1回はくる。普段から備えや対策をしておくことが必要だ。大人になった日に地域防災を担う一人になることを意識して、今、大人がしていることを見て学んでいきたい。
- ・自分の身は自分で守るけれど、困っている人がいたら声をかけたり荷物を持ったりしてあげたい。避難所では、周りの行動を見て自分から動ける人になりたい。
- ・「特別なことはしなくてもいい。けれど、今日の体験や感想を家に帰ってから家族に伝えたり、学校で友だちと話したりすることがとても大切。」というお話が印象に残った。自分自身は、いつくるかわからない災害に備えて、消火器の使い方など忘れないようにしていきたい。
- ・私の家では、災害に備えたものがまとめられていないので、家族でどこに置いておくのかを決めておきたいと思った。また、家族ではぐれないように、どこに避難するかも決めておきたい。
- ・消火栓が家の近くにあることは知っていたけれど、中がどうなっているか、どう使うか、災害が起きたときにどんな行動をとるべきかなど、不安な部分について知れたのが良かった。

本校学校目標の一つに「人から学ぶ」がある。生徒は学校関係者以外と授業内容を考え、地域住民が先生となり、地域に出て活動していく。生徒には、地域で生活している大人のかっこいい生き方に触れたり、こんな所にも良い大人がいることに気付いたりして欲しい。この「地域と連携した防災学習」がその象徴的な取組である。若い頃から地域と結びつくこうした経験が、いずれ地域の担い手として主体的に関わっていく個を育て、有事の際に考えて動く力が発揮されることを期待したい。（文責：教頭 保科 潔）

安曇野市立三郷中学校における防災管理、防災教育に向けた取組について

－ 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 －

安曇野市立三郷中学校

1 はじめに

本校は、安曇野市の南部、松本市と隣接する場所に位置する、全校生徒 470 名の中学校である。西には、北アルプスの山々がそびえ、南には梓川、東には犀川などの大きな河川に近い土地である。学区は、梓川及び黒沢川の扇状地上の緩やかな傾斜地に広がっている。本校は、これらの河川により形成された扇状地堆積物の上に立地している。

このような土地に立地する本校の近辺には糸魚川－静岡構造線が存在し、今後 30 年以内に震度 6 弱以上の地震が発生する可能性が高いと言われている。このため地震発生時には、安全かつ迅速な対応が求められる。

そこで本校は、令和元年度から「学校安全総合支援事業」に加わり、学校アドバイザーとして信州大学教育学部教授 廣内 大助先生を講師にお迎えし、助言を頂きながら、緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練を実施するなどの取組を行ってきて 4 年目を迎えている。

2 安曇野市三郷中学校の防災体制について（概要）

(1) 本部

本部設置（原則として校庭） 本部用品の持出し
火災発生時の通報、通告、指令、渉外 避難状況の観察

(2) 救護

日常の薬品類、担架等の所在把握、持出し 治療活動（応急処置）

(3) 消火係

日常の消火栓の場所の確認、点検・整備、取り扱い方法の確認
指令により初期消火

(4) 消火器係

日常の消火器の場所の確認 指令により初期消火

(5) 警備係

指令により、校舎周辺及び搬出物の確認監視

(6) 誘導係

消防車・救急車の安全かつ適当な場所への誘導



(7) 点検扉係

残留生徒の確認 防火扉の閉扉

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 学校防災アドバイザー—廣内大助先生による学校訪問時のご指導 令和4年9月8日(木)実施

① 3年計画作成について

- ・当初作成してあった5ヶ年計画よりも3年周期の方が、生徒がひと通りの経験ができるということで、3年計画作成をしてみようという助言をいただいた。
- ・3年間で異なる状況を想定した訓練を実施できるように配慮する。
- ・毎年、同じ訓練を繰り返すのではなく、ひと工夫してみしてほしい。

② 第2回避難訓練について

- ・地震の際に停電することが多いため、放送が使用できない想定で訓練してはどうか。
- ・生徒が校舎に残っていないかの確認の際、①必ず「誰かいますか？」と声を出して確認する、②トイレは(男女問わず)個室もすべて目視で確認する、③教室は確認したら黒板に「○」を書いておく、ことが望ましい。

(2) 廣内大助先生のご指導を受けて

① 三郷中学校防災訓練3年計画

以下のように3年間のサイクルを作成した。ただし、引き渡し訓練は2年に1度の訓練とする。

防災訓練3年計画				
				安曇野市立三郷中学校
	4月	5月	9月初旬	10月末
1年目	避難訓練(火災)(1h) 授業中(告知あり) 出火場所:調理室 登校時指導		シェイクアウト訓練(0.5h)	避難訓練(地震・火災)(1h) 授業中(告知なし) 放送機器故障 出火場所:第1理科室
R4,7,10,13				
2年目	避難訓練(火災)(1h) 授業中(告知あり) 防火扉閉め避難 出火場所:第1美術室	避難訓練(隔年R5,7,9) シェイクアウト訓練 引き渡し訓練 小中合同	シェイクアウト訓練(0.5h)	避難訓練(地震・火災)(1h) 休み時間(告知なし) 怪我・行方不明あり 出火場所:技術室
R5,8,11,14				
3年目	避難訓練(火災)(1h) 授業中(告知あり) 出火場所:被服室 登校時指導		シェイクアウト訓練(0.5h) 避難所生活学習	避難訓練(水害)(1h) 校外避難場所へ避難
R6,9,12,15				

② 地震発生とそれに伴う停電および火災発生(生徒への告知なし)の避難訓練の実施

ア 実施日時 令和4年10月24日(月)第2校時

イ 訓練内容

- ・生徒に訓練実施日時について事前告知しない。
- ・地震発生と、地震に伴う火災発生における対応。
- ・地震に伴い停電となり、放送が使用できない状況での避難。
- ・生徒の安全かつ迅速な避難と職員の避難誘導。

- ・校舎の巡視点検における確認事項徹底。
- ・避難完了時の人員掌握の的確化。

ウ 訓練の経過

段階	時間	職員の活動	説明
速報～地震発生	9:47	○緊急地震速報を流す（教務主任） ○全員、机の下に入る。ガラスの近くから離れるなど安全対策をとる。 ○職員は付近の状況を確認し、避難経路を確保する。	<ul style="list-style-type: none"> ・机の下に入り次の指示を待つ。 ・音が鳴った瞬間にすばやく入る（事前指導） ・全員静かにし放送を待つ。 ・放送を最後まで静かに聞く。
	9:49	○職員室にいた職員は分担して校舎を確認し報告する。	
	9:50	○警報ベルにより火災発生を知らせる。	
火災発生通告	9:53	○（地震による停電を想定）メガホンにより指示（3名）	・静かに指示を聞かせる。
避難通告	9:54	○避難経路に従って避難。 *雨天の場合は、講堂へ避難。 ※状況によっては教科担任の判断で先に避難することも必要	○教科担任の指示（大きな声で、明確に！）、落ち着いて安全に避難できるようにする。 ・窓を閉め、カーテンを開ける。 ・口をハンカチなどでおおわせる。
校外機関への連絡通報訓練	9:55	○通報訓練	
一次段階巡視点検	9:55	○授業のない職員は職員室集合し、生徒がトイレや教室に残っていないか確認しながら避難。	○確認方法 ・必ず目視 ・「誰かいますか？」などと声を出して確認
避難	9:54	○避難場所へ本部設置	・トイレは個室もすべて目視（男女問わず） ・教室は確認したら黒板に○を書く（直径30cm程度）
人員報告及び避難確認報告	9:58	○本部は、各学級・学年職員及び巡視の報告を受ける（教頭）	
避難完了	10:02	○避難完了報告	

エ 廣内大助先生のご指導より

- ・今回の想定においては、とてもよく行動できていた。特に、避難指示の肉声がとても大きくてすばらしかった。
- ・校舎を巡視した職員が黒板に○をつけることができていなかった。
- ・特別教室での対応方法をはり紙で示したらどうか。例えば、理科室の物（落下すると危険な物）、音楽室での対応（机がないので、真ん中に集まる、倒れそうなものから離れるなど）、家庭科室でアイロンを使用していたらどうするか。これらを1回の訓練で1カ所ずつ検討し、対応していったらどうか。
- ・車イスの人の避難については、おんぶして避難することがもっとも有効。車イスを運ぶ生徒を

決めておくとよい。

- ・登下校中に大地震があった場合は、危険個所の把握、安全マップの活用、自分で考える力、倒れる物落ちてくる物は何か、といった点について、生徒と一緒に考えていくとよい。
- ・来年度の引き渡し訓練に向けて、安否確認はオクレンジャーで行い、オクレンジャーで確認できない場合は電話を使うことになる。
- ・「三郷中学校防災訓練3年計画」については、「水害」の訓練は1h必要。垂直避難は最終手段であるため、その前により安全な場所に避難すべき。ハザードマップを見て避難場所を学校で決め、そちらへの避難の訓練をするとよい。2年目だと忙しいため、3年目の訓練と入れ替えて実施してはどうか。

4 事業の成果及び今後の課題

- (1) 事業4年目となり、廣内先生から継続的にいただけてきたことで毎年同じ訓練の繰り返しではなく、実際に発生する状況を想定しての訓練を実施することができてきている。「防災訓練3年計画」の作成にあたって、具体的な例を示していただき、学校の実情に則して計画し、さらに助言をいただいたことでより実用的な訓練を計画できてきている。



- (2) 地震によって放送設備が使用できない状況を想定しての訓練は、本校にとって初めての試みだった。複雑な構造の校舎であるため、放送を使わずに全校に正確かつ迅速に指示することの難しさを改めて確認することができた。
- (3) 災害時の対応の仕方について、教職員だけではどのような方法が最適なのか分からないというのが実情であり、廣内先生のような防災アドバイザーに相談できることは、非常に有効である。今年度の本校では、「車椅子の生徒をどのように避難させるのか」「登下校中に大地震があったら生徒はどのように対応したらよいか」などの疑問が、職員や生徒から出てきた。これに廣内先生からアドバイスをいただき、非常にありがたかった。
- (4) 来年度は、「3年計画」にあるように、本校では初めて三郷小学校と連携して引き渡し訓練を実施したい。

(文責 教諭 三村徹)

令和4年度 学校安全総合支援事業の取組について

－ 小学校と連携した避難訓練・引き渡し訓練の実施について －

安曇野市立堀金中学校

1 はじめに (立地条件・児童・生徒数)

堀金中学校(生徒276名)、堀金小学校(児童420名)の所在地は、ともに安曇野市堀金烏川で、1kmほど離れた場所に立地している。両校に子どもが在籍している家庭も多い。

2 安曇野市立堀金中学校の防災教育について

(1)方針

火災、地震などの災害に関わる安全指導を行い、生徒自身の災害時における行動全般の理解と、安全に対する意識の向上を図る。また、災害時等に適切に対応できるように地域や小学校と連携した訓練を行う。

(2)運営 学校防災、安全指導

①避難訓練

4月21日(木) 避難訓練① … 避難経路や防護団活動等の確認

6月27日(月) 避難訓練② … ショート訓練(地震)

8月26日(金) 避難訓練③ … 小中合同引き渡し訓練

11月8日(火) 避難訓練④ … 地域と連携した防災訓練

②施設の点検(安全点検) … 毎月第1月曜日を防災の日に設定し確実にを行う。

(3)登校生徒数一元管理について

毎日、登校生徒数を一元管理する用紙を職員室前に掲示している。これは、有事の際、この用紙を持って避難することにより、登校生徒数を正確に把握するためである。

養護教諭が、健康観察簿を元に一元管理の用紙を作成し、2時間目開始前までに職員室前に掲示する。

3 小学校と連携した避難訓練・引き渡し訓練について

(1)目的

- ・一次避難場所(校庭、雨天時は体育館)から保護者に引き渡すことを決定し、教室に戻って帰り支度をした生徒を、保護者の方への引き渡しを速やかに且つ確実にできるようにする。
- ・オクレンジャー等を使って保護者に連絡し、各学年指定された駐車場に駐車し、待

機場所（体育館または各教室）で生徒の引き渡しを行うことを確認する。

(2) 日時・日程

令和4年8月26日（金） 14:20～16:10

(3) 内容

- ① 日頃の防災意識と行動等の学習【事前に学級担任が指導】
- ② 地震を想定した避難訓練（集合・点呼）
- ③ 災害時の保護者への引き渡し訓練

行動の概要

時間	活 動 内 容
14:22	<ul style="list-style-type: none"> ・緊急地震速報機作動（防災係） ・一斉放送：地震発生（教頭先生）・待機指示 ・職員による校内の安全確認 北校舎2名、中校舎2名、南校舎2名 ・避難の可否判断、一次避難場所の選定 ※一次避難場所：校庭、雨天時は体育館 ・本部設置者：旗を持って校庭に移動。 ・登校生徒数の把握用紙、緊急連絡カードの持ち出し
14:25	<ul style="list-style-type: none"> ・一斉放送：避難指示（教頭先生）
14:26	<ul style="list-style-type: none"> ・避難 学級担任による人数と欠席者確認。 学級担任→学年主任→教頭へ報告 教頭より校長へ、生徒全員の避難完了の報告
14:24	<ul style="list-style-type: none"> 職員人数確認
14:35	<ul style="list-style-type: none"> ・防護団活動（職員） 係活動の確認 市教委への報告（教頭）
14:38	<ul style="list-style-type: none"> ・避難訓練完了
14:38	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめの会 全体講評：本間 喜子 先生
14:43	<ul style="list-style-type: none"> ○引き渡し訓練開始 ・生徒：教室へ戻り、待機 指導・保護者対応：学級担任 ・副担任：駐車場・昇降口へ移動→交通整理・保護者対応
14:45	<ul style="list-style-type: none"> ・教務主任：オクレンジャーにて保護者へ連絡 「規模地震発生による生徒引き渡し実施」
15:00	<ul style="list-style-type: none"> ◇引き渡し開始 ・担任：教室入口付近で待機、引き取り人の対応 ・引き渡しが完了した学級は学年に報告

	全学級の引き渡しを終了した学年は教頭へ報告 16：00頃までに引き取りに来ない保護者へ連絡
16：00	・引き渡し終了確認
16：15	・防災教育係指導：本間先生より

4 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 学校防災アドバイザー

本間 喜子 先生（信州大学）

(2) 指導の概要

- ・ 事前：メールにて実施計画の送付
- ・ 当日：避難訓練の視察
避難訓練の講評
引き渡し訓練の視察
係職員への指導



(3) 指導内容

A 避難訓練について

- ・ 避難開始は一斉に開始せずに、安全確認ができた場所から避難を開始するとよい。避難までの待機時間が短縮でき、混雑も避けられる。
- ・ 訓練と実際に災害が発生した場合には対応が異なる。大規模地震が発生した場合、校舎に戻れるかどうかの判断は、教育委員会が安全確認を行って判断する。場合によっては校舎に入れない事も考えられる。
- ・ 引き渡しまで屋外で待機する可能性が非常に高いので、対策を詳細に検討して備えておかねばならない。
- ・ 発生が夏季（高温）の場合、必要な水等を確保して、待機中の熱中症に備えておくことが必要になる。そのため、備蓄庫が不可欠であり、必要な物品を十分に検討し、揃えておくことが必要である。
- ・ 長時間の待機に備えた対応として、持病やアレルギー等に備えた携帯品等の用意も必要となる。

B 引き渡し訓練

- ・ 大規模な地震が発生した場合には通行できない道が発生し、引き受け者の中学校への到着が遅くなる可能性が高い。特に、発生時に保護者が遠方にいる場合は、学校に近い場所にいる祖父母や親戚等に引き受けを依頼する可能性がある。このような場合、引き受けに来た方が生徒の学年、組を知らないとスムーズに引き渡しを行えなくなる。このような場合を想定して、各家庭で引き渡しをお願いする可能性がある方に、生徒の学年、組を知らせておいていただくことか、依頼する際に伝えていただくことが必要になる。
- ・ 待機している間に不安な様子の生徒はいないかに気を配り、そのような生徒への対応を事前に考えておいてほしい。

- ・ 駐車場には職員が配置されていたが、安全に行動できていたか確認しておいてほしい。
- ・ 一斉に下校させない理由（＝登校している生徒全員を無事に帰宅させるため）を生徒及び保護者に伝えておく必要がある。
- ・ 当日引き受け者が来ることができない旨を事前に把握していた生徒については16:00まで待機させた後に徒歩で下校させたが、災害発生時にはどう対応するのか決めておくことも必要である。



5 事業の成果及び今後の課題

- ・ 避難及び引き渡し訓練自体は大きな混乱もなく行うことができた。
- ・ 引き渡し訓練は初めて行ったが、引き渡しの連絡が送られる前に迎えの車で駐車場が埋まっていた。引き渡し訓練の目的や意義が保護者に充分伝えられていなかったと感じる。
- ・ 駐車場での職員の対応について、事前に担当職員が分担場所で具体的な打ち合わせを行う必要があった。保護者にも、駐車場への出入り口や道路の進み方等、事前に詳細な説明をしておく必要があった。
- ・ 本間先生には、訓練と実際に災害が発生した際の対応とでは大きく異なることを指摘していただいた。特に屋外で長時間待機せざるを得ない場合の対応は詳細に検討、準備を進めることが急務である。

6 まとめ

- ・ 引き渡し訓練については、初めての実践だったこともあり、非常に多くの、重大な課題が見つかった。この情報を小学校と共有した上で、合同で次年度以降の訓練実施計画を作成していかなければならない。

（文責 教諭・防災教育係主任 嶋田 尚）

裾花小学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について
地域との連携・避難所開設訓練から

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立裾花小学校

1 はじめに

本校は、学校の西側を裾花川、南側を犀川と裾花川との合流点に面し、水害発生時の行動や避難について、地域や学校も関心を深めてきている。

戦後まもなくの昭和 24 年 9 月には、豪雨により裾花川の堤防が長い距離に渡って決壊し、周辺一帯に大きな被害をもたらした。

裾花小学校の開校は、それより 6 年後のことになるが、現在も校庭西側（裾花川側）にあり、学校のシンボルツリーとなっているポプラの木は、当時の人々が水害から地域を守るための願いが込められていると伝えられている。

現在は、上流の裾花ダムの完成により、大きな被害こそ出ていないが、近年の異常気象や水害の記憶の風化とともに、これから防災意識をどう育てていくかが急務の課題となってきた。

今年度は、5 学年が、総合的な学習の時間を使って防災を学んだり、地域との防災訓練を体験したりすることで、子どもたちが主体的に防災に関わろうとする芽を育てる体験的な学習を進めてきた。

2 長野市立裾花小学校の防災体制について（課題）

(1) 裾花小学校は、土砂災害の避難場所に指定されている。避難所開設マニュアルもある。しかし、緊急時には職員としての動きや、地域の方の誘導方法など、わからないことが多く危機管理上不安を感じる状況であった。

(2) 地域の方からも、「避難所になっているが、本当に開設されるのか」「学校と一緒に訓練を行った方がよいのではないか」という声が上がっていた。このように地域の方にも不安を抱かせる状況であった。

3 今年度の主な取組について

(1) マイタイムラインを作成しよう（5 学年防災教育）

①ねらい

ア 気象学習の発展と関わりから、最近の豪雨がもたらす危険について理解を深める。

イ マイタイムライン（避難計画）の作成を通して、避難に必要な知識、心構えを身につける。

②活動の内容

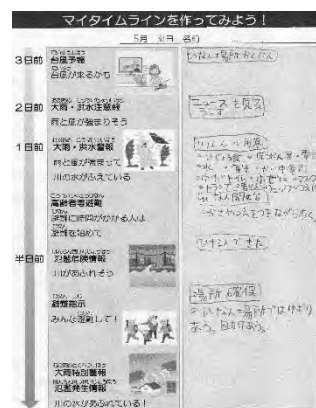
ア 期日：5 月 30 日 2・3 校時

- イ 参加者：5学年 97人 担任3名
- ウ 講師：テレビ信州 気象予報士・防災士 鈴木智絵さん
- エ 科学的な実験・体験を通した学び

- ・ペットボトルに雲を作る実験
- ・雲のでき方、雨の降り方から自分の住んでいる場所の危険を察知する。
- ・危険な場所を予め知っておく。考えておく。（もし、ここだったらという自分事として）
- ・マイタイムライン（避難計画）の作成を体験した。
- ・各家庭に帰って、保護者と話し合おう。

オ 子どもの感想から

- ・家に帰ったら、台風のこと豪雨の怖さのことを家族に話して、家族と一緒に避難の仕方を相談したい。
- ・明日かあさってか、いつ起こるかわからない洪水や災害について、ちゃんと考えておかないといけないと思った。



③今後の課題と成果

自分たちが、地域・学校周辺の地理的な特性や、災害についての歴史についてよく知り、一人ではなく、仲間とともに学びあうことを通して、自分事としての「防災」につなげていくよい機会となった。タイムラインの制作をとおして、自分の命は自分で守っていくということ、子どもも避難の主体であること、避難に、積極的にかかわっていけることを子ども自身が感じる事ができた。

また、学校で子どもたちが作成したタイムラインを家庭に持ち帰った、保護者の方の感想に、「台風19号以来、頭の隅に『もしも』ということはあったが、子どもが作ったタイムラインを見せてもらい、具体的な行動計画を何も考えていなかったことを痛感した。」という感想をいただいた。

(2) 地域住民との避難所開設訓練

①ねらい

- ア 大規模災害発生時における避難所開設について、教職員が訓練を通して体得するとともに、防災への危機意識を高める機会とする。
- イ 地域の方と連携した訓練を行うことで、地域とともに防災や減災について考える機会とする。



②活動の内容

- ア 期日：令和4年9月1日（木）9:00～10:00
（＊児童の防災訓練は、10:00～11:15）
- イ 参加者
 - ・教職員：校長・教頭・学校危機管理担当（湯本）5年3組担任（湯本）
 - ・地域の方：22人
 - ・児童：5年3組 31人
 - ・長野市危機管理課職員：1人

・学校防災アドバイザー：

信州大学 学術研究・産学官連携推進機構 助 教 本間 喜子

信州大学 教育学部 社会科学教育講座 特任助教 内山 琴絵

ウ 想定及び訓練内容

9：00 長野市震度7相当の地震が発生⇒市本部より開設要請

9：05 開設準備チェックリストにより確認の上、開設準備を行う。

【一次避難】

9：10 開設・市本部への報告（今回は行わない）・避難者の受け入れ

*避難者名簿の記入

*避難所内（一時避難：体育館）の割り当て、誘導

*最低限のルールの確認

9：15 体育館への避難完了

【二次避難】

9：20 校舎の安全が確認され、避難所の開設準備が整ったので、校舎を開放する。

*避難所の利用範囲、注意事項の張り紙

*北校舎3階多目的室へ避難誘導

*北校舎2階ほっとルーム：更衣室等

*北校舎3階プレールーム2：避難所運営スペース

*北校舎2階プレールーム1：救護活用スペース

*北校舎1階～3階トイレ

*北校舎のみ開放。1、2、6年教室は開放しない。

*2階：2音前のシャッターを下ろす。

9：30 多目的室への避難完了

【防災学習】

9：30～10：00

地域の方と5年3組児童による防災学習

*危機管理防災課の出前講座

・避難所で使用する物品紹介

・災害食の試食

・段ボールベッド体験 等



【まとめの会】

10：00～10：10

・児童感想発表

・お礼の言葉

・本間先生、内山先生からの講評



③成果と課題

ア 長野市危機管理課の方のお話から

・地域の方と学校の連携の取組は例がない。地域

の中の避難場所が学校なので、こういう取組は大事である。北校舎の3階に避難できるなら、地域の方も大変ありがたい。

- ・避難所にある備品は、学校職員も子どもたちも何があるか知っておいてほしい。
- イ 信州大学の防災アドバイザーさんから
- ・立ち入り禁止区域が明示されていてよい。張り紙やコーンなどで明らかにしたい。事前にも授業スペースは入れないということを公報しておきたい。
- ウ 地域の区長さんからの話から
- ・地区の避難訓練では、校門の前まで来て「ここが避難所です」と案内するだけだった。このように実際に避難訓練が行えて、ありがたいし、安心する。
- エ 子どもたちの感想から
- ・実際に学校が避難所になる実感が持てた。避難にあたって自分たちも何かできるのではないかという意識が持てた。これからも学んでいきたい。

4 事業と成果および今後の課題

本校は、裾花川に近いので水害時の避難場所としては指定されていない。しかし、今回の地域連携避難訓練を通して、子どもからも声が聞かれた。「もし、学校に自分たちがいて、洪水が起きたら3階だったら全校が助かるかな。」「確かに、ハザードマップには、5mの水位だとあったから、何とかなるかもしれない。」と学んだ情報をつなぎ合わせ、小学生ながらも最良の避難方法を考えようとしていた。

学ぶことで、様々な情報を整理して、自分なりに考えていくことを続けようとする子どもの姿に、大人も気づかされることが多い学びの場となった。

また、地域の皆さんを案内する役をこともたちが担ったことで、普段保護され守られる立場の子どもたちが、自分のできることを通して、避難所開設に積極的に関わろうという気持ちを持てたことも収穫の一つであった。

5 まとめ

地域の方と子どもたちとで避難訓練を行うことで、地域の方の安心感とともに、学校も安心感を持つことができた。

子どもたちと一緒に学んだことから、学校職員も準備や、安全確保について気づかされる点や改善点すべき点が明らかになったので、さらに、避難訓練の中にその視点を取り入れ、防災意識を高めていきたい。

命を守るために「もし、～だったら」「どのような備えが避難者に安心をもたらすか」という視点を大事にして、自分の住む街、働く職場のある地域で何ができるか、学びを積み重ね、学校全体の避難訓練や防災意識の向上に役立てていきたい。

(文責 防災教育担当 湯本 英晴)

防災教育にかかわる学校安全総合支援事業の取組について

—災害デジタルアーカイブと防災学習支援用ソフトウェアを利用した取組—

長野市立加茂小学校

1 はじめに

本校は、県都長野市の西部に位置し、善光寺の近くにある。学区は、長野市を代表する裾花川の近くに、幼稚園から大学まで、多くの学校がある長野市の文教地区となっている。また、茂菅や小田切のような山間地もあり、変化に富んだ広い学区内から、220名の児童が通学している。

2 本校の防災教育

長野市の土砂災害ハザードマップを見ると、本小学校区の多くが土砂災害警戒区域または地滑り危険箇所に入っている。有事の際には、身の安全に気を付けなければならない地域で生活している。そこで、本校では、土砂災害ハザードマップにそれぞれの児童の家の位置を記した所在地マップを作成している。（下図は児童の家を除いたもの）

また、平成28年度から毎年、4年生が信州大学と特定非営利活動法人 Dochubuが開発したソフトウェアを使って防災マップを作っている。このソフトウェアは、タブレット端末とWeb-GISを連動させることで、防災情報の収集を効率化し、児童でも簡単に地図上に情報を書き込み、情報の共有化ができるものである。



3 活動状況【参加者：4年生児童38人、教職員2人】

(1) 学習の始まり

防災の学習で、日本にはどのような自然災害があるのか考え、これまでに大きな地震や水害などに見舞われてきたことを学んだ。

また、長野県内にも大きな地震が発生していることを知り、今後も大きな災害が起こる可能性があることも学んだ。そして、もしも災害が起きたらどうなるのか考えていく中で、「命や自分たちの生活を守るためにどのように行動したらよいのか、災害からくらしを守るために誰がどのような取組をしているのか調べていこう」という課題が決まった。

学習が進む中で、地域の安全・危険な場所に関心をもった。そして、「地震が起きたと

きに周囲の状況がどのようになるかを考え、危険な場所を回避するために、自分の住んでいる地域を実際に見て回りたい」という思いが高まった。

そこで、フィールドワークを行い、各々が調べてきた施設や設備の安全性・危険性について考えたり確かめたりすることを通して、一人一人が防災や安全への意識を高め、主体的に防災や安全の学習について取り組んでいった。

(2) 学習内容

- ①自分たちが住んでいる長野県と教科書に出てくる静岡県の地形を比べ、どのような自然災害があるか考え、課題を設定した。
- ②災害デジタルアーカイブを活用して過去に日本で起きた大きな地震や長野市で起きた大きな地震（神城断層地震）・水害（平成元年台風19号災害）について知った。

【子どもたちの気づき】

- ・「地震の被害がすごかったけど、亡くなった人がいないなんてすごい。どうして？」
 - ・「川の水があふれて、いつもは道路や畑のところの水の中になっていて怖い。」
- ③地震や水害が起きると自分たちのくらしはどうか考えた。
 - ④自分の家では、地震や水害に備えてどのような取組をしているのか、各自タブレットで写真を撮り、発表した。
 - ⑤学校では、災害に備えてどのような取組をしているのか考えた。防災倉庫の存在や避難場所の看板に気づいた子どもたちは、誰が設置しているのか疑問をもち、実際に倉庫に行き、確かめることにした。



【子どもたちの気づき】

- ・「長野市と住民自治協議会の防災倉庫があった。2つもあってすごい。」
 - ・「予想していたものよりもたくさんの種類があったし、数もたくさんあった。」
- ⑥長野市では、災害から市民を守るためにどのような取組（ハザードマップ・避難所の設定）をしているのか知った。
 - ⑦ハザードマップに載っていない身近な危険や安全対策について調べる活動を行った。自分の家から避難所へ行く場合に気を付けることや安全のためのものを探す目的で通学路を中心に歩き、災害が起きたときに危険があると感じた場所や安全のための工夫と感じた場所の情報をタブレット端末に記録した。地域の方（区長）、廣内先生・大学生（信州大学）に協力していただき、地区ごとに班をつくり、調査活動を行った。「Field ON!」（マップアプリ）を使い、班の仲間で話し合いながら、危険だと思う場所や安全設備だと思う場所を記録していった。



フィールドワークの様子

【子どもたちの気づき】

- ・「空き家の建物の壁にヒビが入っていて、大きな地震が来たらくずれのかもしれない。」
- ・「石が積んであるところは、くずれてきたら危ない。」
- ・「街灯は上に電気があって、落ちてくるかもしれない。上も気を付けなくてはいけない。」
- ・「電柱がたくさんあるけれど、倒れてくるかもしれないので、近くを歩かないように気を付けないといけない。」
- ・「この交差点は、普段も車がぶつかる事故があるので、避難の時には、すごく危険な場所だと思う。」
- ・「崖崩になりそうなどころがあった。」「崖崩にならないように補強してあった。」
- ・「川の水があふれないように広くしてある。」
- ・「加茂神社の横にも防災倉庫があった。」
- ・「神社の柵や鳥居は、倒れないように工夫してあった。」



自分たちが住んでいる見慣れた町・道路だが、災害が起きた時に避難するということを前提に改めて見なおしてみると、今まで気付かなかった発見がたくさんあったようだ。

⑧各班の調査データが統合された防災マップを見ながら、安全・危険な施設や設備について考え、確認をした。また、各グループで特に知らせたい施設や設備を選び、タブレット（ミライシード）にまとめ、発表しあった。

写真をはって、説明をつけましょう

コンクリートに裂け目ができて崩れそうとても危ない。

安全・危険な場所について確かめ合う
 (左) 防災マップアプリ
 (右) ミライシード

4 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 本年度の方針についての打合せ：8～10月

防災アドバイザーの信州大学教育学部廣内大助教授と本年度の防災教育の授業内容について直接打合せを行い、具体的な方向が決まったところで、Dochubu や第1地区住民自治協議会の方に連絡をとっていただいた。

(2) ソフトウェアのインストール：10月（廣内教授による依頼）

【参加者：児童38人、教職員2人】

4学年全児童のタブレットにアプリをインストールしていただいた。

(3) 災害デジタルアーカイブの提供：10月

【参加者：児童38人、教職員2人、大学生1人】

廣内教授より、紹介があった災害デジタルアーカイブを活用し、身近にあった災害について、被害状況や救助・復旧・復興のための活動について学んだ。アーカイブの操作は信州大学学生に支援していただいた。

(4) アプリの位置情報設定と動作確認：11月

【参加者：児童38人、教職員2人、大学生3人】

信州大学教育学部学生と担任で、位置情報設定を行い、学生3名と共に、使い方の確認や動作確認を行った。

(5) アプリを使つての現地調査：11月

【参加者：児童38人、教職員2人、地域の方6人、大学生1人】

廣内教授ほか同研究室学生、地域の方に参加していただき、グループごとにフィールドワークを行った。

5 事業の成果

- 災害時を想定し、実際の避難ルートになりそうな場所について検証したことは、大きな災害が起きたときに、自分はどうのように避難すると安全なのかということをし現実的に考えることができたことにつながった。自分の命を自分で守るために、とても大切な学びができたと思う。
- 地域の方にも参加していただき現地調査を行うことができた。地域の方に「この場所は、土砂崩れ防止の工事をしたばかりだから安全だよ。」や「向こうの崖は、大きな地震の時に崩れたんだよ。」などと、地域のことを詳しく教えていただき、地域の方々とつながりをもつことができたことがよかった。
- 「Field ON!」(防災マップアプリ)を使うことで、子どもたちが実際に町を歩いて記録したことを簡単にまとめることができ、結果がすぐに見えることで、子どもたちの学習意欲にもつながった。そして、各地域で記録した子どもたちの情報を手軽に共有することで、友だちが調べたことの確認をスムーズに行うことができた。

6 まとめ

子どもたちは、初めに災害の怖さを学んだ。しかし、その災害に対して、多くの公助があることを知り、自分や周りの方の命を守るために自分は何ができるのかも考え、防災意識を高める学習となった。

(文責 防災教育担当 横田真由美)

大豆島小学校における防災管理意識の向上、
防災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立大豆島小学校

1 はじめに

大豆島小学校は、開校から130年をこえる歴史ある学校である。児童数は662名、各学年3～4クラスずつの大規模である。長野駅周辺の中心地から比較的距離が近く住宅地が広がる一角に学校がある。学区には、エムウェーブや環境エネルギーセンターなどの施設があり、スケート教室やごみ収集に関わる社会見学では徒歩での移動が可能である。田んぼやリンゴ畑も広がり、夏には田んぼからたくさんのカエルの声が響き渡っている。

大豆島地区は、菊栽培が盛んで「巴の錦」の発祥地とされており、6年生は地域ボランティアの方々からご指導をいただき、毎年菊の栽培に取り組んでいる。地域には大豆島小学校を卒業した方々も多く、地域の方々から積極的に支援いただける環境にある。例年、地域の事業所に協力いただき、PTA主催で「夢ナビ」という職業体験学習を行っていた。

本校の学区は犀川と千曲川が合流する地点の北岸に位置し、多くの地域で市洪水ハザードマップの3mを超える浸水エリアとして想定されており、洪水に対する防災教育が喫緊の課題となっている。

2 大豆島小学校の防災体制について

(1) 概要

「校内生活並び校外生活において、児童が自分の生命を守るために適切な行動がとれるようにする」ことをねらいとして防災体制を整えている。地震や火災を想定した避難訓練を年3回実施し、年度初めに避難経路の確認、休み時間中の避難など計画的に行っている。

(2) 昨年度までの防災・防犯にかかわる主な計画

①避難訓練

- ・第1回避難訓練（4月）避難経路確認
- ・不審者対応訓練（6月）校内に不審者侵入時の避難等確認・警察官からの指導
- ・引き渡し訓練〔1学年〕（5月）保護者への引き渡し方法の確認
- ・第2回避難訓練（9月）防災の日に合わせた防災意識向上
- ・第3回避難訓練（11月）休み時間に起こる地震に備えた避難訓練

②安全点検

- ・月1回、管理責任者が管理場所の危険箇所や避難経路の状態を確認。

③危機管理マニュアルの見直し（修正）

- ・防災係が中心となり、マニュアルの内容について確認し、必要に応じて修正。

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 避難訓練のあり方について

これまで前年度踏襲の形式的な避難訓練においては、避難経路を確認する、放送の指示に従って行動するという避難の基本的な行動様式を身につけるといった意味では一定の効果が見られている。しかしながら、避難訓練の実施内容が形骸化し、子どもたちからは当事者意識が薄れているように感じられ、東日本大震災のように想定外の災害に対応するための準備として不十分ではないかと意見する職員も出てきた。



子どもたちが当事者意識となって自分のこととして考え行動できるようになるための避難訓練のあり方についてアドバイザーからアドバイスいただくこととした。

(2) 洪水に対する防災教育について

本校学区は2つの大きな川が合流する箇所北岸に位置し、市洪水ハザードマップでは浸水被害について警告されている。大きな被害を被った3年前の台風19号の通過の際、大豆島地区も水害の危険にさらされていた。このような状況で、子どもたちが自らの命を守るための行動と家族や地域の人々の命を守るための新たな視点での防災教育についてアドバイスいただくこととした。



(3) 危機管理マニュアルの見直し

子どもたちの安全を確保するためには危機管理マニュアルを作成が必須であり、危機管理における各教職員の役割等を明確にするとともに子どもたちの安全を確保する体制を確立するために必要なことについて、全教職員が共通に理解することが求められる。危機管理マニュアルについては、例年防災を担当する職員を中心に見直し修正することとなっているが実際に災害を経験したことのある職員はほとんどなく、実質的な修正が加えられないことが実際であった。数多くの被災地の様子や被災現場を知る専門家に助言いただきながらマニュアルを見直すこととした。

4 今年度の取組

【学校防災アドバイザーによる職員へのアドバイス】

- (1) 講師 信州大学教育学部 教授 廣内 大助 学校防災アドバイザー
- (2) 実施日 令和4年10月5日（水）

(3) 内 容 ①避難訓練のあり方 ②洪水に対する防災教育 ③危機管理マニュアル

(4) 指 導

① 避難訓練のあり方について

実際の学校生活を基にした避難訓練の実施

- ・通常教室、休み時間の他に清掃中や特別教室への移動時など様々な場面を想定した避難訓練を行う。
- ・子どもたちに適切な退避行動を自分で考え、自分の身の安全を図るように促したい。
- ・退避避難方法の校内掲示が有効。
- ・いざというときどうするか、子どもたちの発達段階を考慮しながら、各自が考え意見を出し合い、それぞれ出された意見を踏まえて考えを深めていくよう支援していく。

② 洪水に対する防災教育について

- ・洪水の情報がある場合には、基本的に下校の措置をとる。
- ・引き渡し訓練等準備が必要。
- ・大豆島小学校は浸水警戒地域のため避難所としては不適切。突然の浸水等緊急の際は、大豆島小学校校舎を避難場所と考えることもあるかもしれないが、基本的に校舎の垂直避難という考え方ではなく、場所を移動し水平移動を考えるべき。水平移動を想定した避難について考えることも必要。



③ 危機管理マニュアルの見直し（修正）について

- ・豊田市の小学校で作成したマニュアルを参考に助言。
 - (a) 避難等の判断の基準となる気象・水象情報や河川事務所を決める。
 - (b) 判断の基準となる警報・注意報や水位を明確にする。
 - (c) a、bをもとにマニュアルを作成する。

5 事業の成果及び今後の課題

(1) 11月避難訓練（休み時間に実施）

休み時間に地震が起きた想定で避難訓練を実施。地震が起きた後、避難の指示を出す計画だったが、アドバイザーの意見を活かし地震の後火災が起きたことを想定に変更。

（子どもの感想）

- ・地震の音が終わって校庭に行こうと思ったら、ベルが鳴って驚いた。友だちと「どうしよう」ってなった。
- ・休み時間（の避難訓練）はどうしていいかわからない。友だちの後ろについていったけど、自分でも考えられるようにしたい。



(成果)

⇒子どもたちの多くは、想定していなかったことに対して戸惑いが見られた。
しかし、子どもたちなりにどうすべきかを考える姿が見られた。(=当事者意識をもって行動できた)

(課題)

→例年、休み時間の実施としている。避難訓練の実施時間について、アドバイスを活かし清掃時間など様々な場面で行えるよう計画したい。

→子どもたちは職員よりも早く集合場所に到着したため、校庭での集合(整列)に戸惑う姿が見られた。校内の退避避難の掲示の他に校庭など集合場所の周知も行いたい。

(2) 洪水に対する防災教育

(成果)

⇒廣内教授から話を聞き、洪水に備える準備ができた。防災係や教務主任などを中心として危機管理マニュアルの改訂を行いたい。

(3) その他

本事業の参加にあたり、本校の防災教育のあり方を丁寧に見直す機会となった。アドバイザーの廣内教授からは本校の今後の方向について明解に示唆いただいた。避難訓練、危機管理マニュアルの改訂などまだ課題があるが、アドバイスをいただきながら子どもたちの安全を確実に守れるよう努めていきたい。本校の防災教育の充実のためご指導いただいた学校防災アドバイザー、市教育委員会指導主事の皆様に感謝申し上げます。

(文責 教頭 伊藤幸信)

長沼小学校における防災・減災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立長沼小学校

1 はじめに

長沼小学校は、長野市の北東にあり千曲川沿いに位置する、全校児童 87 名の小規模校である。

2019 年（令和元年）の台風 19 号による千曲川の氾濫によって被災した。2020 年は、学校の立て直しと児童の心のケアに努めた 1 年間であったが、復旧がほぼ済んだ 2021 年（令和 3 年度）からは防災・減災学習を充実させていこうと考え、昨年度に引き続き今年度も本事業の活用を申請した。

2 長沼小学校の以前の防災体制について（概要）

もともと長沼地区は地震の災害や水害の歴史があったため、小学校での避難訓練の他に 4 年生以上が地域の防災訓練に参加していた。長沼体育館へ避難し、煙体験や放水訓練の見学、消火器・バケツリレー体験、非常食体験等を毎年行っていた。

長沼地区は昔から水害との闘いの歴史を繰り返していた。地域の学習で水害について調べたり、戊の満水の水位を表した標柱を見学したりしていた。また、堤防強化の目的で桜堤を造る事業があったため、平成 26 年度卒業の児童が桜堤という歌劇を作り発表した経過もある。劇中歌「桜づつみ」は、水害と闘ってきた歴史を知り、私たちのくらしを桜堤が守ってくれる希望の歌として平成 31 年（令和元年）まで歌い継いでいた。

このような歴史を学んできていたので、大災害に遭っても児童は全員無事であったが、学校の防災体制や今までの学習では不十分であることが明らかとなった。

令和 3 年度は、児童の心に配慮しながら防災・減災学習に取り掛かり始めた。手探りで学習や取組を始めたが、アドバイザー事業を活用しながら次のように進めてきた。

○1・2・3 年生は、日本赤十字社の防災・減災プログラムを受講し、「自然の中で起こりうる災害について」中でも「大地震の時の身の守り方」について必要な知識を学んだ。

○4・5・6 年生は、総合的学習の時間や社会科、理科に含まれる災害や自然災害にまつわる学習の発展として学習を進めてきた。信州大学の廣内教授と DoChubu の落合さんらが開発した“Field ON!”というソフトを使って地域の危険箇所を洗い出してまとめる学習や災害から人々を守る施設が地域にたくさんあることの学習をすることができた。

○高学年は、発展学習として自然災害の種類や、避難する時に気を



付けること、「自助・共助・公助」などの学習もした。

○10月13日の「長沼防災の日」には、地域の代表の方を招いて自分たちの学んだことを発表して全校の学びを共有した。

○その後、6年生はマイタイムラインを作る学習をした。また、SEEDS Asia という NPO のお誘いを受けて、日本各地やアジアの国の被災経験のある学校とオンラインでつながって情報交換等をした。



また、被災後、児童在校時に水害の危険がある時には、保護者への引き渡しと垂直避難をするマニュアルに作り直したが、専門機関より長沼小学校の場合これでは不十分であるとの指摘を受け、長沼小学校タイムラインの作成に着手した。防災アドバイザー事業を活用し、危機管理防災課の指導を受けながら、流域タイムラインや長沼地区のコミュニティタイムラインと連動した長沼小タイムラインを作成した。



3 学校防災アドバイザーの関わり

昨年度、信州大学の廣内教授に、長沼小学校に来校していただき、防災・減災学習の考え方を指導していただいたり、他校での実践例を教わったりした。考え方や取組のきっかけを教えていただいていたので、あまり肩肘張らずに防災・減災教育に向かうことができた。

学んだポイントは、

- 防災・減災教育といっても大上段に構えるのではなく、取り組みやすいことから始めること。
- ベストでなくてベターでいいので、楽しく繰り返せることが大事。
- 防災学習には、正解がない。
- 「災害とは何か」から学習をスタートするものだが、「Field ON!」を使えば、自分たちの地域は何が危険なのか、どこが危ないのかを把握するところから始められる。危ない場所があるなら、逃げ道は？逃げ場所は？何のためにやる？→大切なものを守るため。そのための道筋を自分たちで考えていく。ディスカッションをすることがとても大事であること。

【日本赤十字社防災・減災プログラム】

1・2・3年生は、今年も日本赤十字社の防災・減災プログラムを受講した。1年生は、初めてなので、昨年と同じように、「自然の中で起こりうる災害について」と「大地震の時の身の守り方について」必要な知識を学んだ。2年生・3年生は具体的に災害に備えて避難するにはどうするかを学んだ。「持ち物は？」「いつ準備するか。」「身近にある災害」について学んだ。キットを使って、避難所に持っていく物について考えた。何がどうして必要か。何を大切に考えるか。実際の避難生活を知っているからこそ出てきた考えもあった。また、いざという時に持っていく物を考えたり、探したり、準備したりしている暇はないので、日頃から考えて用意しておくことが大切であることも学んだ。



【信州大学 廣内大助教授・内山琴絵特任助教】

10月13日の長沼防災の日に、昨年危機管理防災課の指導を受けながら作成した「長沼小学校タイムライン」に従って、市教委への連絡訓練、北部レクリエーションパークへの連絡訓練、保護者へのメール配信訓練、北部レクリエーションパークへの全校二次避難訓練、保護者への引き渡し訓練を行った。タイムラインに従うとすれば、全校避難ではなく、その前に保護者一次引き渡しがあるが、今年は初めてということもあり、全校で避難し、本来二次引き渡しを行うはずである北部レクリエーションパークで、全家庭の引き渡し訓練を行った。

実際に歩いてみると、距離が長いことや、車とのすれ違いで隊が止まってしまうこと、浅川を越える時の柵が1年生には安全性が低い事、実際の避難の時に雨風が強かったら・・・水かさが増して小さな水路が見えずに足をとられてしまったら・・・などたくさんの課題が見えた。反面、実際に歩くことで、避難する大変さがわかったり、避難の順路を考える学習になったり、6年生が1年生を助けながら歩くことで、共助の意識を持つことができたりしたことなど成果も多かった。

当日は、信州大学 廣内大助教授・内山琴絵特任助教の両先生、長野県教育委員会事務局保健厚生課の藤村ゆかり指導主事、長野市教育委員会事務局学校教育課の防災担当市川美紀子指導主事にも同行していただいた。

廣内先生からは、これだけ大規模な二次避難訓練をしている学校はほとんどないので、この経験をしたことは大変重要であること、6年生が1年生の面倒を見ながら避難していたが、不安を取り除くためにも話をするなど明るく非難するのも実は大事であること、どうしても人間は判断が鈍るので、避難開始になるきっかけ（トリガー）をもう少し明確に設定しておくことなど指導をいただいた。これからも継続してご指導をいただきたい。



【ドゥチュウブ 落合さん】

昨年、複数学年が「Field ON!」を使用すると、データが混ざってしまって使いにくかったため、正しく使えるためのマニュアルを再度作っていただいた。また、今年度フィールドオンを使って学習を試みようとする学年が5つあったので、マップIDを5セット作っていただいた。6年生は、前述の北部レクリエーションパークへの全校二次避難訓練で、実際の避難路が安全かそうでないかをフィールドオンを使って検証するのに役立てた。



また、4年生は地域を歩きながら、危険な場所を探す学習をした。今後1・2年生は学校内や学校近くで危ない場所を探す学習で利用する予定である。

4 その他 防災・減災学習に関する活動

○NPO「国境なき技師団」の仲立ちにより、早稲田大学防災教育支援会（WASEND）の学生さんとの交流が実現した。ワセンドさんからは、クイズを交えた防災・減災学習のプログラムを5・6年生に施していただき、台風19号災害の絵本を作りたいと考えているワセンドさんへは、5年生が当時の実体験を話したり質問に答えたりした。



○6年生は、総合的学習の時間を使って、長沼の防災減災を自分事として考える授業を行った。マイタイムラインを考える時間、水平避難を考える時間、防災ステーションについて考える時間、等自ら問いをもち皆で追究する授業を行った。

○6年生が昨年に引き続き、SEEDS Asia 主催のオンラインイベント「マイホームタウン（1月17日）」に参加する予定である。地域の紹介をしたり、自分たちの防災減災学習について情報を伝え合ったりする。



5 まとめ

19号災害で大変な経験をしたが、前に向かって歩み始めることができている。アドバイザー事業や外部の力を頼りにし、自分たちの地域や自分たちの安全を守る学習の基盤でき始めた。これから、チャレンジや経験を増やして、カリキュラムを皆で作っていききたい。そして、地域を理解し、いざというときに行動できる力をつけていきたい。また、今後地域と共にこの学習や取組を進めていきたい。

（文責 教頭 丑澤 智成）

学校安全総合支援事業の取組について

—学校防災アドバイザーによる、避難見直し—

長野市立松ヶ丘小学校

1 はじめに

本校は長野市安茂里地区の西側で、すぐ裏に富士ノ塔山がそびえ、眼下に犀川を見渡す小高い丘の上に立っている。東西に沢が走っており、かつて鉄砲水が体育館に流れ込んで被害を受けたこともある。長野市ハザードマップでは、洪水の指定緊急避難場所に指定されているが、土砂災害の指定緊急避難場所には指定されていない。このような状況であるので、洪水、土砂災害などの危険が迫った時にどう判断したらよいか、より綿密な事前準備が必要とされる。

2 松ヶ丘小学校の防災計画

学校防災計画を作成し、その計画に沿って訓練を行っている。

(1) 指導の方針

- ① 自ら考え判断し、安全に行動できる子どもの育成。
- ② 自分の命を自分で守ることができる子どもの育成。

(2) 指導の重点

★地震及び火災時に安全に避難ができるように避難訓練や緊急時引き取り訓練を通して、安全な避難方法を身につける。

- ① 非常ベルが鳴ったら黙ってその場に座り、その後の緊急放送に耳を傾ける。
- ② 緊急放送を黙って正しく聞き取る。
- ③ ファンヒーターなど火の元の消火をする。
- ④ 指示に従い、口をハンカチなどで覆い黙って速やかに校庭に避難する。
- ⑤ 荷物を持たずに歩いて安全に避難する。
- ⑥ 休み時間では必要に応じて高学年児童は、低学年児童といっしょに避難する。
- ⑦ 引き取りに来たお家の方を確認し、安全に下校する。

★地震発生時に自分の命を守る方法ができるように避難訓練を通して、適切な護身方法を身につける。

- ① 窓や入り口の戸を開ける。
- ② 教室では机の下にもぐる。
- ③ 頭を帽子や座布団などで覆う。

- ④ ファンヒーターなど火の元の消火をする。
- ⑤ 屋外では屋根の下、建物、石垣やブロック塀のそばを離れる。
- ⑥ 荷物を持たずに歩いて安全に避難する。
- ⑦ 休み時間では必要に応じて高学年児童は、低学年児童といっしょに避難する。

(3) 管 理

活動内容と計画

- ① 緊急時引き渡し訓練【参加者：児童 190 人、教職員 15 人、保護者 140 人】
期日 6 月 15 日（水）
- ② 避難訓練の実施（地震及び火災時の避難訓練を 3 回実施）
 - 第 1 回 5 月 10 日（火）※火災想定：基本的な避難経路の確認
【参加者：児童 190 人、教職員 15 人、消防署より 3 人】
 - 第 2 回 9 月 1 日（木）※地震想定：防火扉体験、消火訓練
【参加者：児童 190 人、教職員 15 人、消防署より 3 人】
 - 第 3 回 11 月 1 日（火）※火災想定：休み時間の避難方法確認
(告知)

(4) 非常持ち出し物品の点検・購入

(5) 安全点検の実施（年間計画に位置づけ）

- ① 点検期日 毎月 1 日
- ② 管理組織表に基づき安全点検を実施。
- ③ 安全点検表を後日配布。

(6) 防護組織の編成

(7) 土砂災害に対する避難のための情報収集

関係機関（県・市など）と連携して避難のための情報を収集していく。



3 防災アドバイザーと共に考えたこと

上記の防災計画を元に訓練を例年通り訓練を行ってきっていたが、防災アドバイザーの先生から「この学校で1番災害を考えなくてはいけないのは、土砂災害ではないか」というご指摘をいただいた。そこで校舎や裏山の地形を一緒に見て回っていただき、以下のようなアドバイスをいただいた。



- 山の斜面は、分厚いコンクリートで固められているが、パイプから水が出ていないと、水をため込んで崩れてしまうので、注意して見る必要がある。
- 山側には旧校舎が建っており、それがいざという時には土砂を食い止める働きにもなる。
- これだけの斜面に建っているので、大雨の時には沢から水が溢れて危険である。東日本大震災の時に家庭に帰ってしまったせいで命を落とし、今だ裁判が続いているような問題もあるので、場合によっては下校させず待機させたほうが良いケースもある。
- 保護者が車で迎えに来た場合、かえって災害に巻き込まれて危ないということも考えられる。
- 土砂災害が発生した時は、下の安茂里体育館が避難場所になっているが、そこまであるいていけるのか。いざという時には、校舎の垂直避難を考えておいたほうが良い。

- もし、垂直避難を考えた場合、救援が来るまで何日かたえなければいけない状況もある。その場合の防寒や食料が十分蓄えられているか。いないとしたら、市をお願いしていく必要がある。
- 団地に住んでいる子は、洪水の被害も考えられるので、難しい地域ではある。

4 事業の成果及び今後の課題

避難訓練や引き渡し訓練は例年通り行うことができ、災害や地震の訓練はしっかりできるようになっている。しかし、土砂災害を想定した訓練は正直できていない。おそらく、保護者も、地域の方も、その意識は薄いのではないか。今回そういった方面からアドバイスをいただいたので、今後学校だけでなく保護者や地域の方を巻き込んで、土砂災害が起こった時にどう対処していくか考える機会をとっていきたい。児童も、自分の住んでいる地域や学校周辺はどんな地形の特徴があり、どんな危険が潜んでいるか、学習していく必要がある。

(文責 教頭 堀田 茂樹)

防災教育を中心とした学校安全総合支援事業の取組について

— 地域と共に総合防災訓練 —

長野市立信里小学校

1 はじめに

信里小学校は、長野市の南に位置する茶臼山の山腹に位置し、児童数 33 名の山間小規模校である。東には眼下に長野市街地が広がり、北にはアルプスの峰々が一望できる自然豊かな環境にある。農業が盛んで、りんごや野菜の栽培の他に、400 を超える溜池を水源に稲作も広く行われている。茶臼山はかつて大規模な地滑りが発生したことで知られ、現在でも地滑り防止のための維持管理が続けられ、地滑りの跡地は恐竜公園や茶臼山動物園として利活用されている。地域の災害特性としては、土砂災害が挙げられるが、耕作放棄地の増加に伴って使われなくなった溜池も潜在的な危険がある。大雨の時には側溝から水が溢れ出たり、強風や落雷の時に身を隠す場所が少なかったり、傾斜地特有の気象災害への備えも必要である。

2 防災教育の取組

本校は、本支援事業の指定を受け 9 年目となる。学校防災アドバイザーの先生方にご指導をいただき、「自ら考え行動できる子どもの育成と地域と連携した防災活動」をめざして、信里地域委員会（住民自治協組織）と連携し、「信里地区総合防災教室」を実践してきた。そして、今年度は下記のような実践を行った。

3 信里地区総合防災教室の実践

(1) 活動の流れ

◆信里地区総合防災教室 9月10日（土）授業参観日として開催

- 1校時 防災アドバイザーから地震について学ぶ(校長室から各教室へZoom配信)
- 2校時 避難訓練・消火訓練
- 3校時 全校で防災学習「防災マップ作りに向けて～地域の危険箇所・安全施設～」
- 下校時 引き渡し訓練

【参加者 全校児童 33 名、保護者 16 名、地区役員 17 名（各地区長、地域委員会事務局）学校評議員 4 名 計 70 名】



(2) 防災教室の様子

① 地震の歴史と地震への備えについて（講演）

【支援者 廣内大助 学校防災アドバイザー（信州大学）
本間喜子 学校防災アドバイザー（信州大学）】

戊の満水、善光寺地震の様子、犀川をせき止めた岩倉山の崩壊など過去の被害を絵図や写真と共に講演を聞いて学習した。また長野市に地震が起きたときの被害想定にふれ、その被害の大きさに驚く姿があった。そういった地震に備えて、自分の命は自分で守ること、自分で考え行動できることが大切であると学んだ。地震の際は、「机の下に隠れる」「頭を守る」「机の脚を持つ」行動で身を守ることを確認し、この後の避難訓練に生かすことができた。

<児童の感想>

- ◆むかしじしんがおきたことをしらなくて、すごくこわいなおもいました。(1年)
- ◆危険なところや、どこに逃げるか、どこにひなんするかを教えてもらってよかった。
家に帰ってから、おばあちゃんちの部屋の落ちてきそうな物を片づけました。(2年)
- ◆地震で、たなとか古い神社がたおれるんだということを知りました。(3年)
- ◆地震はいつ起きてもおかしくないということがよくわかりました。(3年)
- ◆地震のお話を聞いて、家族と地震や洪水とかのために、考えることにした。(4年)
- ◆いつ地震が来てもいいように備えておこうと思った。地震が来ても焦らないで避難したい。(4年)
- ◆長野県はあまり地震がないと思っていたら、昔にも大きな地震が起きていたので、しっかり準備しておきたいです。(5年)
- ◆地震は身近にあって、6弱という地震も30年後に起こるかもしれないので、真剣に取り組まなくてはいけないと思った。常にどうすればいいかを考えて行動しなきゃいけないなと思った。(6年)

② 避難訓練・消火訓練

【参加者：児童30人、教職員13人、保護者22人、地域住民5人】

【支援者：篠ノ井消防署5人 篠ノ井第五分団8人】

参観日に教室に集まった保護者や地域住民 約40名が、児童と共に緊急地震速報受信システムの音声を聞き、安全な避難訓練を体験した。前日の雨により、避難場所を校庭から体育館に変更し、校内を通過して避難した。消火器による消火訓練はできなかったが、消防士から消火器の説明を聞き、実際に消火器を持つ体験をした。また地域の消防団による放水訓練を見学した。



<子どもの感想>

- ◆しょうぼうしさんがいろんなことをいっぱい教えてくれてうれしかったです。(1年)
- ◆かじがあったら、あんぜんなところをみつけてにげたいです。(1年)
- ◆机の下にかくれるときに、机の脚を押さえているといいんだなと思いました。(2年)
- ◆消火訓練では準備も速くてすごかった。(3年)
- ◆消防団の人が大変にならないように、火事をなくしたいと思う。(4年)
- ◆もし階段にいるときに地震が起きたらどうすればいいのか気になった。(6年)

③ 地域学習「防災マップづくりに向けて～地域の危険箇所と安全施設を知る～」

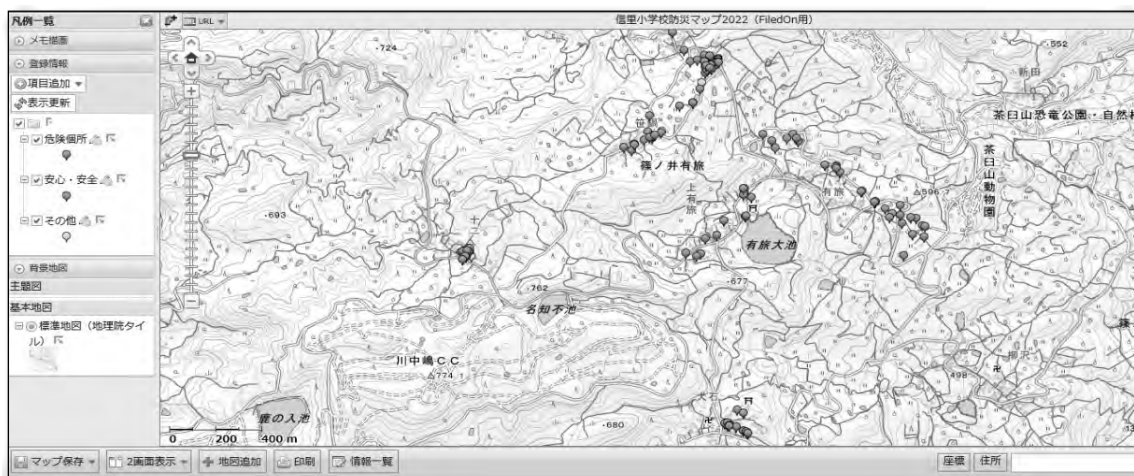
【参加者：児童30人、教職員13人】【支援者：各地区の区長15名、保護者16名】

地区児童会ごと4つの教室に分かれ、児童が個々に家の周りですべてきた危険箇所等の写真を見せながら、その場所やあぶない理由などを発表する。その発表を聞いて、気づいたことや聞きたいことなどを出し合う。区長や保護者も話し合いに参加し、昔の被害等知っていることを話していただいた。まとめでは、各教室をZoomでつなぎ、学習して分かったことや感想などを発表し、お互いに共有した後、防災アドバイザーの先生のお話を聞いた。



＜児童の感想＞

- ◆自分の知らない場所を知ったので、今度一度見て回りたい。(2年)
- ◆安全な場所は撮ってなかったけど、避難場所は学校なので、どうやって行くのかというも家族で話したいです。(2年)
- ◆ふだんからあぶない場所を気にしていなかったのですが、防災マップをやったよかったです。(2年)
- ◆Aさんの写真で、石のへいが地震の時にくずれたらあぶないなと思いました。(2年)
- ◆ささなべ、十二、青池には、灯籠や池がとても多いし、たおれやすい石や古い木がたくさんあったので気をつけたいです。(3年)
- ◆また危険な場所や安全な場所を探したい。見つけたら、地域の人にも伝えたい。地域にはお年寄りが多いので、気をつけてほしいと思った。(4年)
- ◆ふだん遊んでいる場所やいつも歩いているところも危険な物とかがあった。(4年)
- ◆わたしの地区は山の木がいっぱいあるから、地震が起きたら、木が倒れて道路の方に行っちゃうからあぶないと思った。(4年)
- ◆みんなの発表を聞いて、自分があんまり気づかなかったところもみんなのおかげで知ることができた。(5年)
- ◆わたしが知らないあぶない場所を知れた。また、どうして、いつ危険なのかも分かった。もしそういう場面になったら、その場所は避けて避難したい。(5年)
- ◆自分たちが住む区でそれぞれ話し合っ、これからどのようなことに気をつけるか確認できてよかった。これからどこが危険になるのかも話し合っていきたい。(6年)
- ◆地域のことをさらに知ることができたからよかった。(6年)



④ 防災アドバイザー 廣内先生本間先生の指導より

- ・いろいろな場所が出てきたが、いつもの場所も何があぶないか？という見方が変わった。
- ・時々、「あぶない」という視点で見るとよい。
- ・「こんなときどうする？」と、いろいろなパターンで考えてみるとよい。
- ・子どもはいい視点で危険な場所を見ていた。保護者、地域の方と一体となる機会をもつことができた。今後地域の危険を見直すなど様々な活動につながっていくのではないか。
- ・みんなが撮ってきた危ない場所の情報を共有したことで、近くに行かない等行動に結びつけていたのがよかった。
- ・地域の皆さんの昔あったこと等が参考になった。安全なうちに写真を撮っておくといい。
- ・自分の命は自分で守ろうという意識が高まり、全校で安全の勉強ができた。

4 防災アドバイザーとの関わり

(1) 7月19日(火) 15:00~17:00 信州大学教育学部 廣内大助先生 本間喜子先生

地域と共催の総合防災訓練の事前打ち合わせを区長会長1名、消防団員1名、学校2名 計6名(アドバイザー含)とともに行う。



(2) 8月24日(水)
9:30~11:40 低学年と高学年に分けてご指導
信州大学教育学部
本間喜子先生
特定非営利活動法人
ドゥチュウブ 落合鋭充氏

- ・Field ON! (撮影した写真を地図に反映するためのアプリ) の使い方の説明と練習。
- ・防災マップ作りに向け、児童が家の近くの危険箇所等を撮影する際に、どんなものを見て撮ってくるか(何が危険か、どこが安全か)の説明。

5 まとめ

(1) 地域との共催で防災意識を高める

防災マップ作りに向けて、子どもたちは保護者とともに家の近くの危険箇所や安全な場所をタブレットで撮影してきた。いつもは何気なく通っている場所が、危険があるかもしれない、という視点に立って見ることができた。またその写真を発表し合ったことで、地域をより知ることにつながり、防災に対する意識が高まった。区長や保護者も参加し、助言や質問をするなど共に学び合う機会となった。区長からもこの取り組みを地域の安全につなげていきたいという要望が出されたことから、信里の防災マップとして整え、地域や家庭に発信していきたいと考えている。

(2) 災害に備える

自分の身を守るためにはどうすればよいか、防災アドバイザーの先生のお話から、もしもの時にとるべき行動を親子で確認することができた。その後の緊急地震速報装置を使った避難訓練では、その内容を生かし、真剣に訓練に臨む児童の姿が見られた。さらに災害の起こる場所や時間帯等によって行動のしかたも変わることから、様々なパターンを想定した訓練をしたり共通理解を図ったりしていく必要がある。

(文責 教頭 鷹野絵理)

清野小学校における、学校安全総合支援事業の取組について
 親子防災教室：「非常時に持ち出すものを確認しよう」
 5年生：「避難時の支援行動について」

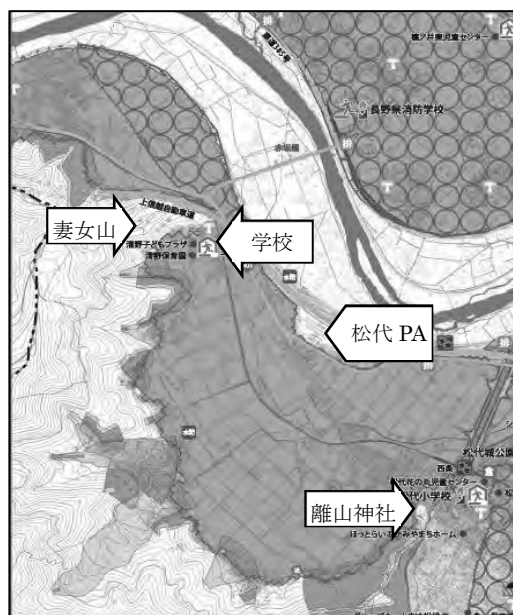
長野市立清野小学校

1 はじめに

本校は長野市南部の松代町内にあり、千曲川の右岸に位置する。校庭の東側には清野保育園があり、合同で避難訓練を行っている。学区内は、学校西側で千曲川堤防沿いに位置する1区（松代町岩野地区）、学校の南東で南側に山が連なる2区、学校東側で大部分は平地部の3区（ともに松代町清野地区）の3地区に分かれている。児童数は31名で、徒歩で集団登下校をしている（下校については、子どもプラザ利用の児童を除く）。

学校及び学区のほぼ全体は、令和元年改訂の長野市洪水ハザードマップで5～10mの浸水予測が出されている。また、地域の南側には山が連なっているため、土砂災害警戒地域になっているところもある。この地域は水害常襲地域でもあり、過去には江戸時代の『戊の満水』（1742年）や昭和57年の台風18号災害で浸水被害を受けている。なお、戊の満水の際には、学区東端のやや小高くなった部分の上にある離山神社の境内に多くの人が避難したとの記録がある。

令和元年の台風19号災害においては、学区内で大きな被害はなかったが、千曲川堤防の上端ぎりぎりまで水が迫り、多くの子どもたちが家族と共に親戚宅や指定避難場所へ避難する等、有事の際には身の安全について考えなければならない地域である。



2 本校の防災学習

令和元年度、4年生が総合的な学習の時間を利用して、洪水が起きたときの行動を考えるための学習を行った。この学習は、自分たちの住む地域がハザードマップで赤く塗られ、浸水想定区域となっていることを知った子どもたちが、周囲よりも高く安全な場所はどこなのか考えるところから始まった。信州大学教育学部教授の廣内大助先生をはじめとした関係者の方々にご協力をいただき、タブレット端末とそこにインストールされた防災教育用アプリ『フィールドオン』を利用し、危険だと思われるところや安全だと思われるところの写真を撮ってアプリ上のマップに反映させるフィールドワークに取り組んだ。これ以後、本校では実践的な防災学習を行ってきた。

	全校親子防災教室	3年生	5年生
令和2年度	「親子で通学路の危険箇所点検をしよう」	「洪水が起きたときの行動を考えよう」	「防災マップ作り」

令和 3年度	「我が家のタイムラインを作成しよう」	「清野地区の洪水発生時における安全な場所調べ」	「清野の土砂災害について調べよう」
令和 4年度	「非常時に持ち出すものを確認しよう」	「地域の防災設備について」	「避難時の支援行動について」

3 本年度の取組について

(1) 親子防災教室 「非常時に持ち出すものを確認しよう」 9月13日（火）

①ねらい

いつ起こるかわからない自然災害の怖さを知り、非常時に持ち出すものは何ほどのくらい必要かを考え、万が一の場合にはどのような行動をとればいいのかを知ることができる。

②参加者

全校児童 31 名、保護者 28 名、学校職員 9 名、学校評議員 1 名、市教委 2 名、信州大学教育学部特任助教授 内山琴絵先生

③活動の概要

- ・ 参観日に設定し、親子で共に考えることができるように登校班ごとに集まった。
- ・ 学習の前半では、各家庭で持ち寄った非常持ち出し袋の中身を確認しながら、実際の避難時に必要なものを話し合った。
- ・ 避難場所で使える道具の紹介として「新聞紙スリッパ」「カップ」「コップ」などの作り方を5年生から説明し、参加者全員で作成した。
- ・ 避難所グッズの体験コーナーを設営し「簡易トイレ」「段ボールベッド」「間仕切り」などの使用感を体験してもらった。
- ・ 防災教室終了後の週末を利用して各家庭で防災について話し合ってもらい、感想等を含め後日ワークシートを提出していただいた。



④活動後の声

- ・ 電池が入っていなかったり、切れていたり、消費期限が過ぎていたり、年に1回は見直さなければならないことや、他家族の準備している品が確認できて参考になった。緊急で使用する物品を、いかに快適に使用するには何が必要なのかも考えさせられた時間だった。避難所で生活するとなると、プライバシーを守る物がないので、テントみたいなものもあれば便利だと思った。(保護者)
- ・ 非常持ち出し袋の確認をして、すぐに持ち出せるように、飲み物や食べ物、救急セットなど生活に必要なものだけでなく、ホイッスルなど自分の居場所や危険を知らせる道具を入れておくとよいと思った。家族で避難することも考えて必要なものは複数準備することも大切だと思った。(児童)

⑤講評

- ・ 令和元年台風19号の水害の経験をもとに防災グッズをそろえた家庭がいて、「養生テープが使える」など、実際に活用した情報を共有していたことがよかった。「知っている」と「経験している」ことは違う。段ボールベッドに寝てみたり、簡易

トイレに入ってみたりしたことは重要である。(信州大学教育学部特任助教授 内山琴絵先生)

(2) 避難時の支援行動について

「水害発生時に地域の方々のために状況に合わせて、自分たちはどんな行動ができるかを考えよう」

11月30日(火)・12月1日(水)・
12月6日(火)



①ねらい

水害発生時、高齢者や体が不自由な方のためにどんな支援ができるのか、実際に高齢者の方と一緒に地区を歩く(フィールドワーク)中で支援の有効性や課題を発見する。

②参加者

5年児童8名、民生児童委員3名、信州大学学生2名

③活動の概要

- ・廣内先生(信州大学教育学部教授)の研究室の協力により、タブレット端末とそこにインストールされた防災教育用アプリ『フィールドオン』を利用する。
- ・各地区の民生児童委員さんから2019年「台風19号災害」での地域の避難行動や現在の地域の様子を聞き、清野地区の防災課題を考える。
- ・長野市防災ハザードマップをもとに清野地区の一時避難場所を想定、高齢者とともに避難する中で、考えられる支援行動を実際に行い、有効性や課題を考える。
- ・支援行動の様子をタブレットで撮影し、フィールドオン上のマップに必要な支援についてコメントと共にのせる。

④児童の様子

- ・実際に地域の方から話を聞くことにより、災害について詳しく知ることができ、自分たちが経験していないことを知る大切さを感じていた。
- ・コロナ禍により地域全体の結びつきが希薄になる中で、児童自身も自分の家の周りの方について知らないことがある。地域の様子を知ることが地域全体の防災につながることに気づいていた。
- ・地域の方と一緒に避難場所まで歩くことは、自分たちでは気づかなかったことや、必要な支援を考えることにつながっていた。

【児童の感想より】

- ・台風19号災害時の避難状況や現在の地域の様子を聞くことで、実際に避難するときに、どんな行動をとればいいのか、どんな支援が必要なのかを考えることができてよかったです。災害が起きたときのために、普段から避難方法や避難ルートなど訓練しておくことが必要だと思いました。
- ・フィールドワークで気付いたことがたくさんありました。例えば多くの避難場所とされる所には、たくさん階段がありました。高齢の方や障害を持っている方は、階段では登れないと思います。私たちができ



ることは、「坂がきつい場合には後ろから押してあげる。」「後ろで倒れてきてもいいように支える」「グレーチングのある場所を避ける。」ということがありました。

- ・1区の妻女山は、避難するには、地区からの距離がとても遠いです。高齢者や車椅子の方などは簡単には行きません。でも、他の地区の様に階段ではなく、なだらかな道なので後ろから支える支援をすれば高い所にある避難場所まで行くことができます。
- ・2区の林正寺は、行くまでの道がとても急です。両側に用水路もあり、行くまでの道がとても危険でした。高齢者の方とフィールドワークをすることで、自分たちの視点では、普段気づかないことがわかってよかったです。
- ・3区の離山神社をはじめ、避難できる所には急な階段がたくさんあります。足が不自由な方や車椅子の方などは、登れないことがわかりました。私たちは、普通に登れるけれど登ることが困難な方がいることを知りました。

【児童のまとめより】

- ・災害時には、今の状況を正確に判断するために、テレビやラジオ、防災無線などで、避難が必要なかを判断し、すぐに行動することが大切です。災害が起きた時には、避難が困難な方がいます。その人が何を求めているのかを考え、その人に合った支援をしていくこと1人ではなく地域全体で命を守っていくことが大切だと考えます。
- ・災害が起きた時に1番大切なのは、自分の命を最優先することです。そのうえで、自分たちが考えた支援をすることで、自分の近所に住んでいる人の命を、地域全体の人の命を救えるように行動をしていくことが必要だと思いました。

4 終わりに

令和元年度から始まっている本校のフィールドワークを中心とした防災学習は、これまでに「地区の危険個所」「水害について」「土砂災害について」と地区が抱えている課題について学習を積み重ねてきた。このことにより、清野小学校の子どもたちの防災に対する意識は高くなってきている。さらに、本年度の取組によって、子どもたちの意識を広げることができたと感じている。今後の取組としては、「避難する人の立場」や「安全性を高めるための避難場所設置」等について、児童の意識を大切に活動していきたい。

(文責 防災・安全教育担当 長浦宏樹)

学校防災アドバイザー活用事業による防災教育の改善

— 「わが家の防災タイムライン」作成と3校合同引き渡し訓練 —

長野市立豊野東小学校

1 はじめに

本校は長野市北部に位置する全校児童139名の小規模校である。近隣には千曲川、鳥居川、浅川が流れており、令和元年10月の台風19号による千曲川の氾濫の際は、学区内で床上・床下浸水の被害を受けた家庭があった。本校体育館は避難所となり、多くの被災者が2ヶ月ほど避難生活を送ることになった。

このような本校の立地からも防災教育の充実が必須であると考え、「学校防災アドバイザー活用事業」を中核とした教育課程の改善を図っている。今年度は地区住民自治協議会との連携を継続するとともに、豊野地区3校（豊野中学校、豊野西小学校、本校）の連携も重視して防災教育に取り組んできた。

2 昨年度までの取組概要

学校防災アドバイザー（信州大学 本間喜子先生）のご指導を受け、子どもたちや職員の方の防災の知識・理解・技能の向上を図ってきた。具体的には職員研修の実施と、高学年児童一人ひとりの防災タイムライン作成に取り組んだ。また、豊野地区3校や地域との連携についても、学校防災アドバイザーの助言のもとに地区住民自治協議会を交えて検討し、共通教材の活用や教務主任会で引き渡し訓練の立案を担当することが決められた。

3 今年度の防災教育推進

防災・減災の意識を高め、必要な対応、行動を理解することをねらって防災教育を推進した。具体的には以下の3点について、学校防災アドバイザーの支援を得ながら進めた。

- ・ハザードマップを見て児童が自宅周辺の実情を知る
- ・災害時の行動指針について学び、災害に備える意識と具体的な方法を理解する。（タイムラインや具体的な対策の見直し、更新）
- ・豊野地区3校の合同引き渡し訓練を計画、実施する。

取組内容

(1) 1学期 地区との取組【参加人数：教職員6人、児童139人、地区より4人】

① 地区のハザードマップを使った学習

7月5日～7月14日の期間に、全学年が生活科、総合的な学習の時間において防災教育の授業を行った。豊野地区の地区住民自治協議会から講師をお迎えし、ハザード

マップで豊野地区全体と自宅周辺の様子を確認し、もしもの時に備える意識を高めた。

② 防災倉庫の見学

5年生は、区長会の皆さんと共に、学校敷地内に設置された防災倉庫に収納されているものを見学した。非常食や発電機、浄水器などを確認し、避難所での生活を具体的にイメージすることができた。



1年生教室にて

(2) 2学期の取組

① 3校合同引き渡し訓練

【参加人数：教職員 18 人、児童 139 人、保護者 99 人（本校のみ）】

9月2日、豊野3校（豊野中学校、豊野西小学校、本校）合同で引き渡し訓練を実施した。児童を保護者に引き渡すまでの安全確保と指導を確認するため、登校した状態から保護者に引き渡すまで、兄弟関係で複数校へ迎えに行く場合を含めた一連の動きを検証した。



教室にて引き渡し

事前に保護者へメール配信にて引き渡し時刻を周知し、14:20に訓練を開始。16:02に全家庭への引き渡しが終了した。

② 防災タイムラインの作成・更新

【参加人数：教職員 3 人、児童 72 人】

10月13日、11月9日に学校防災アドバイザーによる高学年への授業を実施。4年生は自分の防災タイムラインを新規作成し、5、6年生は昨年度作成したタイムラインを更新した。



タイムラインを考える

③ 職員研修 【参加人数：教職員 17 人】

11月9日、本校職員を対象に学校防災アドバイザーによる講演をいただいた。過去の災害の様子や安全対策、避難行動、タイムラインの必要性や情報収集の方法などについて資料をもとにお話いただいた。

4 学校防災アドバイザーの関わり

8月25日、学校防災アドバイザーである信州大学の本間喜子先生にご来校いただき、防災教育の推進について打ち合わせを行い、以下の3点を依頼した。

- ・ 3校合同引き渡し訓練への参加と事後指導
- ・ 児童のタイムライン作成に関わって、作成での留意点や更新時のポイントの指導
- ・ 職員研修の講師依頼

9月2日には、3校合同引き渡し訓練に合わせて来校いただき、訓練開始前から終了後まで参観いただいた後、以下のような事後指導をいただいた。

- ・全体としてはスムーズに引き渡しできていた。
- ・校舎内も迷うことなく教室で引き渡しできていた。緊急時に引き渡しカードに記載のない人が来た場合、教室配置がわからない場合もあるので、昇降口の消毒のあたりにマップを置いておく、案内の先生を配置しておくもよい。
- ・引き渡しが長時間になると子どもが落ち着かなくなるが、教室内にいることが大事。
- ・5、6年生の受付に手続きの仕方が書いてあり、これはわかりやすいので続けたい。
- ・大倉チェーン脱着場も混乱なくスムーズに駐車できていたが国道を信号機のないところで横断する家庭があり、災害時には見通しも悪くなるので危険。
- ・要配慮家庭には事前に一番近い駐車スペースに停めるよう伝えてもよい。
- ・人数が少なくなってきたら、不安になるので図書館に集めて安心させるのもよい。
- ・災害時の引き渡しメールの配信は早すぎることはなく、決まり次第、配信して知らせる。

10月13日には4、5年生の、11月9日には6年生の教室にて授業に参加いただき、災害時の行動やタイムライン作成のポイントについてお話いただいた。また、11月9日には職員研修の講師としてもご指導いただき、職員の防災意識向上につながった。

5 事業の成果および今後の課題

(1) 成果

学校防災アドバイザー本間喜子先生のご指導を受けながら、子どもたちおよび職員に防災についての知識・理解を深めることができた。子どもたちが自分で防災タイムラインを作成することは、実践力の育成につながっていくと考える。

豊野地区3校間や地域との連携について、各校学校防災アドバイザーのご指導のもとに合同で訓練が実施できたのは大きな成果である。

(2) 課題

豊野3校における共通カリキュラム(小学校～中学校9年間の計画)の作成を視野に入れ、引き続き学校防災アドバイザーにご指導をいただきたい。

6 まとめ

令和元年の台風19号による災害を教訓とし、自校の防災体制や教育内容を再構築しようとして、本支援事業で信州大学の本間喜子先生からご指導をいただいていた。今年度は本事業によるご指導を中核にして、豊野地区3校による合同訓練の実施ができたことは大きな一歩であった。児童の命や生活を守るという最も大切な点について、専門家のご指導や地域との連携の必要性を強く感じる。本支援事業に感謝するとともに、今後も引き続き本校の防災体制を改善していきたい。

(文責 教頭 徳武 哲)

学校安全総合支援事業の取組について

～安全防災教育に向けた取組と豊野三校における連携の充実について～

長野市立豊野西小学校

1 はじめに

本校は今年度児童数が328名、各学年約2クラスずつの規模である。学校の周りにはりんご畑やぶどう畑が広がり、季節ごとに姿を変えていく果物の様子を間近で見ることができる。特に北側は丘陵地となっており、その斜面に広がるりんご畑や竹林・ぶどう棚の間は、低学年の散歩コースになっていて、豊かな自然に囲まれている。

長野盆地西縁断層の働きによって形成された緩やかな豊野の大地。校舎のベランダからは千曲川氾濫原の中に北陸新幹線が行き交う様子が見られる。その隣には浅川が流れ、千曲川は立ヶ花狭窄部に向かって流れ込んでいる。美しく豊かな自然の中に、長い間水害と戦い続けながらも逞しく生活し続けてきた先人たちの苦難が見えてくる。

災害から3年が経ち、避難所を経験した職員も少なくなってきたが、子どもたちや保護者・地域の皆さんが経験した心の痛みを忘れないよう、その時の対応を伝承し更に実践的な防災・備えをしていく必要がある。

2 長野市立豊野西小学校の防災体制について（概要）

(1) 今年度の防災にかかわる主な計画と実践

①避難訓練〔時期：主な内容：参加者〕

- 第1回： 4月20日（水） 児童301名 職員28名 参加
新教室からの避難経路の確認、職員係活動、集団下校並び替え
- 第2回： 6月21日（火） 児童309名 職員28名 講師1名 参加
不審者対等訓練
中央警察署生活安全課 スクールサポーター 滝澤喜美子さん
- 第3回： 9月2日（金） 児童204名 職員27名 指導者1名
休み時間、児童に日時を知らせない設定で行う。
信州大学 内山 琴絵先生
- 第4回： 11月10日（木） 児童194名 職員28名 指導者1名
(11月2日（水） シェイクアウト訓練)
地震の際の停電により、緊急放送ができない場合の避難訓練
信州大学 内山 琴絵先生

②安全点検（月初めに実施）

③危機管理マニュアルの修正

④家庭、地域、関係機関等と連携した防災教育の推進

- ・外部機関と連携した防災教育に関する授業を教育課程に位置付けて実施
- ・地域と連携した引き渡し訓練を行ったり、懇談会の折りに引き渡し訓練の必要性、保護者の動き等の確認の場を設けたりするなどして、学校の防災の方針を保護者や地

域住民との間で共有を図る。

- ・住民自治協議会と連携した防災授業。

⑤三校合同引き渡し訓練

9月2日（金） 児童 204名 職員 27名 保護者 249名 指導者 1名
信州大学 内山 琴絵先生

⑥職員研修

10月18日（火） 職員研修 職員 20名 指導者 2名
信州大学 廣内 大助先生

- ・教職員の学校安全に関する研修を実施。

安全防災管理面については、現在継続して行っている本事業の取組により避難訓練等の防災体制の見直しを図ってきている。

校内の避難訓練だけでなく、豊野三校の連携についても「三校合同引き渡し訓練」の実施により本年度踏み込んで実践することができた。同じ「豊野」で育ち生活をする児童生徒として、安全防災教育の一貫した指導をしていくことの大切さを三校ですりあわせながら大切に進めてきた。

防災教育としての知識と共に、「スムーズに児童生徒を保護者に引き渡すことができるような組織作り」を具体的に考えて保護者に伝え、実践していった。

3 学校防災アドバイザーの関わり

本校は信州大学廣内大助先生、内山琴絵先生にご指導をいただいている。先生方のご助言をいただきながら、今年度、本事業に参加させていただくに当たり次のような計画を立てた。

【安全防災教育に関して】

- ・授業実践の積み重ね
- ・カリキュラム作り
- ・職員研修

【豊野三校の連携に関して】

- ・統一したカリキュラム作り
- ・豊野三校で合同引き渡し訓練の実践



豊野住民自治協議会後藤さんより防災教育の授業。
タブレットを使いハザードマップの確認。

実際に、次のような取組を行った。

(1) 全校での安全防災教育・避難訓練での実践

①信州大学 廣内大助先生・内山琴絵先生からのご助言

- ・「わが屋の防災タイムライン」（東京法令出版）を利用した授業実践の推進。
- ・家庭と連携を取りながらの実践。
- ・「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん」を用いた授業実践の推進。

②豊野地区住民自治協議会事務局の方のサポート

- ・豊野町のハザードマップを利用した授業実践。（4・5・6年全クラス）

③信州大学 廣内大助先生による職員研修 10月18日 職員 15名参加

- ・「学校は災害にどう備えるのか」

東日本大震災、長野県は災害が少ないのか
 どう備えるか？防災管理の取組
 防災教育（いざという時、自ら行動できる生徒へ）
 2016年熊本地震から学ぶこと
 （学校教職員と避難所の関わり）



学校評議員・CS運営委員の皆さんと災害時の対応について懇談



職員研修 廣内大助先生より
 「学校は災害にどう備えるのか」

④豊野三校共通の安全防災教育カリキュラムの作成

(2) 豊野三校合同引き渡し訓練の実践

①三校教務主任会を中心とした計画

②それに基づき本校の計画の立案

- ・教務会・職員会での提案
- ・係による役割分担（準備・当日）
- ・家庭・地域への周知・連絡
- ・回覧・路上での掲示物
- ・近隣への挨拶

（校庭一方通行による渋滞予想）

③廣内先生・内山先生の事前のアドバイスにより

今年度配慮をした点

- ・職員が児童の指導に関わるための工夫
- ・分かりやすい校内掲示（パイプ椅子と矢印）。
- ・校庭に駐車をする際の基本ルールの周知徹底。



受付から各教室への動線。校内でも感染対策を取り、基本的に一方通行で移動。



パイプ椅子に矢印を示した校内表示

(3) 三校合同引き渡し訓練の反省から

①職員の振り返りから

- ・校内の経路表示は保護者から分かりやすいと大変好評だった。しかし、帰りの表示が無かったために再び受付の方に戻ってしまう方がいた。帰り道の表示も必要であることが分かった。
- ・いざという時に PTA メール一本で連絡が取れるのかが心配である。

②内山先生の事後指導から

- ・時間が経つごとに、回数を増すごとに、校舎の外で駐車案内をする職員の数は減らしていくと良い。将来的には保護者が自主的に駐車できると良い。
- ・ただし、駐車場で歩行者との接触事故の恐れがある。雨で視野が悪く、傘もさしているため、互いに見通しが悪い状態である点に気を付ける必要がある。

- ・豊野中学校では「学校タイムライン」を作成し、それに基づいて引き取りの判断を行っていた。今後本校でもタイムラインを作成し、保護者にも「こうなったら引き取りになる」という基準を周知しておけると良い。これは三校でそろえていきたい。
- ・保護者が車で迎えに来る際、いかにスムーズに動線を工夫するか考えて実施したが、それについても滞ることなく円滑に児童引き渡しが行えたとアドバイスをいただいた。

4 事業の成果及び今後の課題

【成果】

- ・防災アドバイザーの指導により更に専門的な観点から学校防災教育の在り方について本校の安全防災教育を見直すことができた。今後もより実践的で多様な想定に基づいた訓練を行っていくことで、子どもたちが“自分の命を守るにはどうしたらよいのか”を考え主体的な避難者として成長できるよう実践を積み重ねていきたい。
- ・豊野三校が連携して安全防災教育に取り組めるようになってきた。特に小学校においては「わが家の防災タイムライン」を高学年で活用し学習を進めることができた。
- ・これらの取組を通して、豊野に住む子どもたちが、水害があったから「こそ」安全防災について人一倍自分ごととして学ぶことができています。今後も子どもたちの気づきや学びの素晴らしさを位置付け広めながら取り組んでいきたい。
- ・子どもたちが一人一台のタブレットを使って、自宅や学校・通学路の危険性についてハザードマップと照合しながら確認することができた。自分ごととして捉えるには大変有効であった。今後も地域の安全マップ作り等の実践にも生かしていきたい。

【課題・今後に向けて】

- ・三校合同のカリキュラム及び本校のタイムラインを完成させ、保護者や地域と共通認識を図りながら水害・土砂災害等への備えをしていく。
- ・タブレット端末を活かした防災教育用アプリ「フィールドオン」を利用した学習活動を取り入れ、自分たちが実際に見つけた危険箇所等の写真や情報を地図上にデータとして落とし込み、クラスの防災マップを協力して作成し、家族や地域の皆様に発表するなどの取組を行っていきたい。
- ・実践によって明らかになった課題について改善しながら取り組んでいく。
- ・カリキュラムを整備し、東小と西小の子どもたちが同じ基盤に立ち、中学校での防災教育に臨めるようにしていく。

5 まとめ

防災アドバイザーの廣内先生・内山先生によるご支援ご指導は、専門的な見地から私たちでは気づかない視点を与えていただき、大変ありがたかった。豊野の子どもたちが「自分の命は自分で守る」という意識をさらに持ち、自分ごととして災害・水害について考えることができるよう、実践を積み重ねていきたい。

コロナ禍で地域と繋がるのが難しい昨今だが、防災への意識を高めるためにも今後ますます豊野三校での安全防災教育の推進を図っていきたい。

(文責 教頭 酒井 啓喜)

豊野中学校における防災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立豊野中学校

1 はじめに

本校は、昭和 32 年に開校し、今年度で 66 年を迎える歴史ある学校である。旧豊野町から、平成 17 年の市町村合併を経て、長野市立豊野中学校となった。また、平成 23 年には新校舎を建てたが、令和元年の台風 19 号の浸水被害を受け、校舎および体育館の 1 階部分をすべて改築した。

また、豊野中学校区は以前より、三校校長会が定期的に行われ小学校 2 校と連携し様々な事業を行ってきている。事業は三校教頭会が事務局となり、年間 2 回の合同職員会議のほか、教務主任会、児童生徒会、学力向上委員会を定期的に開催している。今年度行った合同引き渡し訓練については教務主任会が中心となって打ち合わせを行ってきた。

2 長野市立豊野中学校の防災教育について

(1) 令和 2 年度：前年度の台風 19 号による被災の状況から、豊野中にとって実際に起こりうる災害に対する避難訓練を実施していく事とした。

- ① 想 定：集中豪雨・土砂災害などに起因する洪水、1 階部分の浸水の予測。
- ② 訓練内容：保護者に引き渡すまでの生徒の安全確保の方法の確認。
1 階部分が浸水した場合の垂直避難。避難物資の運搬や、待機場所となる各教室からの避難状況の報告。保護者への引渡しの実施。
- ③ 実施時期：災害が起きた 10 月 13 日
- ④ 事前学習：訓練に伴い防災旬間を位置付け、各学級における防災タイムラインの作成や豊野地区の水害の歴史に関する講演会などを開き、学習を深めた。
- ⑤ 反省と課題：迎えに来た保護者に生徒を引き渡す段階で、連絡系統がスムーズに機能しなかった。車の渋滞を引き起こし多くの保護者にご迷惑をおかけする結果となった。

(2) 令和 3 年度：より現実的な避難に焦点を当て、想定や避難訓練の内容を検討した。

- ① 想 定：午後から雨量が増し、浅川や千曲川が危険水位に達する可能性が高いことが考えられるため、授業を午前中で切り上げ、下校時刻を早める。
- ② 訓練内容：保護者への引き渡し訓練。
- ③ 事前の準備：想定を事前に保護者に伝え、迎えに来るか来ないかを家庭ごとに決めてもらう。
引き渡しの際に使用する「引き渡しカード」を準備。迎えに来る可能性のある人を、3 人まで記入してもらい回収しておく。

- ④ 防災学習：本年度新たに購入した「防災学習ノート」を利用した防災教育も実施した。
- ⑤ 反省と課題：車による迎えは、50 家庭ほどが希望したため、保護者のための駐車場を確保して対応した。当日は、大きな混乱もなく、スムーズな受け渡しを実現した。
今までは豊野地区の小学校とは別々に行っていた引き渡し訓練を、豊野地区三校で連携し実施する。
避難を開始する判断の基準となる数値の具体化。

(3) 令和4年度：より現実的な想定として、豊野地区三校が全家庭への引き渡しを実施。

- ① 想定：台風の影響で千曲川の洪水の可能性が高まり、長野市から警戒レベル3が発令。気象庁の降水予想から、このあと警戒レベル4に達する可能性が高いとみられること、浅川や千曲川が危険水位に達する可能性が高いことが考えられるため、護者への引き渡しを行う。
- ② 訓練内容：体育館への一時避難、保護者への引き渡し訓練。
- ③ 三校での連携：想定や保護者への連絡内容の統一。
保護者への発信までの連絡など。
- ④ 当日の様子、反省と課題

参加人数：生徒 216 名、引き渡しに来校した保護者 188 名（引き渡し率 87%）
教職員 19 名、防災アドバイザー 1 名

開始時は受付に保護者が多数来校したため混雑した。ここでだいぶ並んだことが影響し、小学校での引き渡しが予定よりだいぶ遅れたという家庭もあった。

生徒は落ち着いていて避難し、引き渡しまで待つことができていた。保護者の協力、地区の協力が得られてありがたいと感じた。

職員からは計画細案を読みながらでないといけないことも多いため、現在の計画から、大切なところだけ残すようにして簡略化し、万が一のときでも動ける避難マニュアルを作成してほしいという意見もあった。



- ⑤ 防災学習
テキスト：『命を守る防災学習ノート』
割り当て時間：学活・2時間

各学年の単元配当案：〈1年〉01 災害の種類と特徴、02 人間生活と災害の関係、
03 台風・大雨に伴う災害への備え、04 大地震に備えよう
〈2年〉08 ハザードマップを確認しよう、07 わが家の安全確保
06 情報を使って災害を防ごう、わが家のタイムライン)

〈3年〉05 災害が都市を襲ったら、09 徒歩帰宅訓練、
10 マイ・ハザードマップを作ろう

3 学校防災アドバイザーの関わり

防災アドバイザー： 信州大学教育学部学校教育教員養成課程社会科教育コース
廣内(ひろうち) 大助(だいすけ) 先生

(1) 引き渡し訓練打ち合わせ

- ① 実施日：8月22日(月)9:40~10:40
- ② 内 容：9月2日に実施予定の避難訓練・引き渡し訓練について、訓練の内容や保護者への引き渡し方などについてアドバイスをいただく。
今年度作成したタイムラインを見ていただき改善点についてアドバイスいただく。

(2) 避難訓練当日

- ① 実施日：9月2日(金)14:00~17:00
- ② 内 容：避難訓練・引き渡し訓練参観、ご指導
- ③ 指導助言
ア 最初の30分とそれ以降 全体を見ながら本部からの指示で先生方の配置を変えていくといった柔軟な係活動を行っていく。
イ 毎年の訓練の積み重ねによって、よりよい方向に修正して行って欲しい。
ウ 三校でタイムラインを共有し、避難のきっかけとなる「トリガー」を3校で決めておく。

4 事業の成果及び今後の課題

(1) 事業の成果

廣内先生からは、専門家のご意見をうかがうことで、私たちの防災教育を見直す機会をいただいた。豊野地区の三校の小中学校で、連携した保護者引き渡し訓練を実施したが、豊野地区全体の防災教育という観点で廣内先生、内山先生にアドバイスをいただき連携が充実したと考えている。

(2) 今後の方向

- ① 豊野中作成の「タイムライン」を共有。
- ② 三校でタイムラインを共有し、避難のきっかけとなる「トリガー」を決めておきたい。
- ③ 小学校と中学校の両方へ迎えに行く家庭もあるため、それぞれの学校で引き渡しまで待つ時間がなるべく少なくなるようにしていきたい。

(文責 教頭 岡澤 寿穂)

学校防災アドバイザー派遣・活用事業の取組について

町内保小中連携しての引き渡し訓練

飯綱町立飯綱中学校

1 はじめに

飯縄山の麓、長野市の北東に位置する本校は50余年前に牟礼村三水村の二つの村の組合立の学校としてスタートし、平成の町村合併による飯綱町の成立により、一町一校の中学校として存続している。生徒たちはふるさと飯綱の豊かな自然・文化・伝統を自分から意識することはないが、多くのところで感じている。「飯綱山こそ われらが希望」と結ぶ校歌の一節はそれらを感じる心のありようを表すと同時に、学校教育目標である「自主」・「友愛」・「剛健」の基底をなしており、日々の学校生活を支えている。

- 自主 主体的、創造的に生活し、学ぶ楽しさを味わうことができる生徒
- 友愛 みんなの幸福を願い、豊かな情操をもつ生徒
- 剛健 明るくたくましい心身を備え、気力体力が充実した生徒

2 飯綱町保小中合同児童生徒引き渡し訓練実施計画

引き渡し訓練は令和2年度より始まり、今年度で3回目の訓練である。今年度は町内にある、飯綱中学校、保育園3園(さみずっ子保育園、りんごっ子保育園、南部保育園)と小学校2校(牟礼小学校、三水小学校)と保・小・中が連携しての引き渡し訓練を実施した。

《目的》

地震、洪水、凶悪犯の出没などの有事の際に児童・生徒を安全に保護者の方に引き渡すために、町内6小中学校保育園が連携して訓練を行う。

《実施概要》

- | | | |
|---------|--|---|
| (1)日時 | 9月 1日 (木) | 15:20~16:00 |
| (2)想定 | 地震 | |
| (3)事前指導 | 地震、火事、凶悪犯や熊の出没などの有事の際に、児童・生徒を安全に保護者に引き渡すための大切な訓練であることを事前に周知する。 | |
| (4)推進日程 | 8月19日 | ○職員会等で検討 |
| | 8月22日 | ○家庭周知文書配布(飯綱中バージョン)
○「生徒引き渡し確認書」(家庭保存・学校保存)の配布 |
| | 8月26日 | ○「生徒引き渡し確認書」(学校保存)の回収 |
| | 8月30日,31日 | 飯綱町防災行政無線放送で告知(飯綱中バージョン) |

(5)当日の動き

①情報配信システムスマート配信による情報配信（14：20）

②生徒は帰り支度をして，教室で待機する。

③引き渡し開始（15：20～を目安に）

※保育園，小中学校で兄弟姉妹関係がある場合は，中学校→小学校→保育園の順で引き取りをお願いする。

《引き渡しの方法》

「生徒引き渡し確認書（家庭保存）」の受け取りと照合

①引取者に，生徒氏名，生徒との続柄，ご本人氏名を名乗ってもらい，確認書と照合。

例）「（飯綱太郎）の（母）の（飯綱月子）です」

※「生徒引き渡し確認書」を持参していない場合の，引き渡し相手の確認方法

- ・運転免許証等の身分を証明するものとの照合
- ・申し出のあった氏名，住所，電話番号，続柄等が，引き渡し確認書（学校保存）と一致しているか

②該当生徒による照合(例)

担任：「こちらの方はどなたですか」生徒：「私のお母さんです」

③照合ができれば，名簿へのチェックをし，サインをしてもらい，引き渡す。

④「引き渡し確認書（家庭保存）」を返却する。

※兄弟関係がある場合には，次のクラスに回ってもらう。

⑤引き渡し完了報告

保小中相互で完了の旨を報告・確認する。

保護者へ生徒引き渡しの様子



引き渡し訓練中の駐車場の様子

3 生徒の振り返りより

- ・小学校の時にやったことがあったので、静かに移動したり先生の指示を落ち着いて聞いたりすることができた。移動の時に、もう少し素早く行動できたらよかった。
- ・自分ではもし本当に起きたらどうなのかをイメージして真剣に引き渡し訓練ができた。小学校の時は体育館に集まったの訓練だったけれど、中学校では教室での訓練だった。
- ・実際に起きたらお父さんお母さんは来れるのかなと思った。実際に起きたことを想定しながらやるのは難しかったけれど、先生の指示にしたがって行動することができた。

4 事業の成果及び今後の課題

学校防災アドバイザー信州大学教育学部教授廣内大助先生より引き渡し訓練の様子を見ていただき、ご指導をいただいた。

- ・15:20から引き渡し時間になっていたが、引き渡しの準備ができていたら時間より前でも引き渡しを進めていく。(中→小→保の順で引き渡しを行うためできるだけ早く引き渡しを進めたい。)
- ・家庭保存用の引き渡し確認書は無くてもよいか。引き渡しも学校保存用の引き渡し確認書に名前が書いていない保護者のみ身分確認する程度にしてスムーズに引き渡しを行いたい。
- ・校内の案内については壁に矢印などの掲示を行うのではなく引き渡し場所の変更などができるようパイプ椅子などに学年別の色の矢印掲示することで動線が変更できる形にしたい。

計画通りに進めることや、丁寧に引き渡し確認を行うことも大切であるが、今回いただいたアドバイスから次年度はより現実的な形に変更し臨機応援に対応することも考えていきたい。



(文責 安全指導係 三村亮平)

防災教育を中心とした学校安全総合支援事業の取組について

- ー 様々な状況へ対応するための避難訓練の計画・実施および
神城断層地震から学ぶ防災教育について ー

白馬村立白馬南小学校

1 はじめに

白馬村は長野県の北部に位置する人口約 9,000 名の村である。本校は、児童数 100 名、職員数 17 名の山間小規模校である。保護者の多くは本村の基幹産業であるスキー場や宿泊施設で働いている。また、本村は、神城断層の上に立地しており、平成 26 年 11 月 22 日には、県北部を震源にした最大震度 6 弱を観測した地震（神城断層地震）の被害を受けている。豪雪地帯であるために家屋が比較的頑丈な造りであったにもかかわらず、特に堀之内・三日市場地区の被害は甚大で、全壊または半壊した家屋が多く見られた。幸いにして、命を落とした方はおらず、「白馬の奇跡」と言われている。現在在籍中の児童にとって就学前や生まれる以前の出来事であり、震災時の事を記憶している児童は少なくなっている。



2 白馬村立白馬南小学校の防災体制について（概要）

本校は、年間 3 回の避難訓練及び、聞き取り訓練、引き渡し訓練をそれぞれ 1 回ずつ実施している。また、災害時には学校安全管理マニュアルに従って、教職員が防災組織を使った対応ができるように体制を整えている。さらに、安全の日を月 1 回設けて、校内の各自の管理場所を点検している。

(1) 年間の避難訓練計画

- ・ 聞き取り訓練 4 月 7 日
【目的】 災害・火災時における緊急放送の情報を児童が正確に聞き取るための訓練
- ・ 第 1 回避難訓練 4 月 8 日
【目的】 学校管理下における児童の安全確保及び、教室からの避難方法・避難経路の確認
- ・ 児童引き渡し訓練 5 月 2 日
【目的】 自然災害や人的災害発生時における児童の安全確保及び、保護者への確実な引き渡しのための保護者、職員の訓練
- ・ 第 2 回避難訓練 9 月 1 日（事前予告なし）

【目的】地震発生に伴う児童及び職員の安全確保及び、教室からの避難方法・避難経路の確認

二次避難として、学校から指定避難場所への避難方法・避難経路の確認

・第3回避難訓練 12月15日（11月22日が神城断層地震発生日）

【目的】地震発生に伴う火災発生時の児童及び、職員の安全確保と冬季の避難経路の確認

(2)避難訓練の工夫

①二次避難を想定した避難訓練

本校は、土砂災害警戒区域に立地しており、降雨や地震など、複数の要素が重なった場合に校舎への被害が出るのが危惧される。実際に災害が発生した場合に、校内で避難したのちに二次避難をしなければならない状況も考えられるため、昨年度作成した避難確保計画に基づき、貞鱗寺・飯田公民館への



避難を想定した訓練を計画している。今年度2回目の訓練では、飯田公民館へ二次避難を行った。土砂降りの中の避難だったが、より緊迫感が高まり、職員や児童たちも実感をもって訓練にあたることができた。また、飯田区のご協力も事前に仰ぎ、当日は「白馬南小学校 避難場所」の掲示をし、施設の開錠もしていただいた。有事の際の地域との連携についても確認することができた。

②避難経路の設定

本村は、冬になると積雪や屋根から大量の落雪があるため夏季と同様の避難経路を使えなくなる。そこで、第3回目の避難訓練は学校周辺が雪で塞がっている状態で火災が発生したという設定で訓練を実施した。出火場所を避け、より迅速に校舎外へ出て避難しなければならない場合に、北校舎の5、6年生は学校敷地の外周を廻って待機場所へ避難することになる。落ち着いて放送を聴くこと、冷静かつ瞬時に判断することが必要であり、職員や生徒にとって、緊張感が必然的に生じる訓練となっている。



③避難訓練の年間計画

今年度は3回の避難訓練及び、聞き取り訓練、引き渡し訓練をそれぞれ1回ずつ計

画し実施しているが、1回目の避難訓練は4月当初に計画し、1年生も避難経路の確認が早い時期にできるように配慮している。また、それに先立ち、前日には放送のみの聞き取り訓練を行い、事前にイメージを作りやすい場面を設定することで、配慮を要する児童も落ち着いた行動をとることができる一助になっているのではないかと考えられる。引き渡し訓練についても、新学期の生活に慣れ始めた5月上旬に設定し、緊急時に安全で迅速な引き渡しができるように計画している。2回目の避難訓練は地震と土砂災害や浸水被害を、3回目の避難訓練については地震と火災を想定し、それぞれ二次避難への対応、冬季の避難経路確認を目的として、時季にあわせて行うことで児童や職員が実感を持って訓練にあたることができた。

3 学校防災アドバイザーの関わり

今年度、防災アドバイザーとして信州大学の廣内大助教授、内山琴絵特任助教授にご指導をいただいた。年度当初のご訪問時に今年度の学校の防災計画や防災学習についてご指導いただいている。

5、6年生の児童は神城断層地震発生時には3歳前後であり、当時の記憶についても曖昧であったり、全く覚えていなかったりする児童が多い。児童たちは信州大学作成の震災アーカイブを活用し、地震発生時の村内の被害の写真や映像などから調べ学習を行った。

神城断層地震8周年の11月22日には、5、6年生が廣内教授の講義の受けた後、村内の震災の爪痕が残る場所へ赴きフィールドワークを行った。塩島地区では、保全され現在も調査が行われている地震によって隆起した地形の様子を見学、大出公園付近では、湧水帯も見学し、湧水と断層、地形との関係などについて児童たちは学んだ。また、三日市場地区の地震伝承館では、地震の被害の様子について、被害を受けた建物を実際に見ながら説明を聞き、内部に展示された資料を見ながら熱心にメモを取る児童たちの様子が見られた。最後に訪れたトレンチ調査の現場では、過去の地震の影響や断層の様子を間近で見学することができた。



帰校後、児童たちは印象に残った場所を取り上げ、報告書として学習をまとめた。また、5年生はグループごとに見学を通して学んだことをまとめて校内等にて掲示発表した。



4 まとめ（事後の成果及び今後の課題）

今年度は避難訓練に関しては、実施時期や計画について検討し、より実質的なものとなるよう実施した。また、役場や地区へも事前連絡し、連携できそうな部分については協力を仰いだ。近年の自然災害において「想定外の事態」に見舞われ、甚大な被害が出でしまうケースもあるが、平時より想像力を働かせ、最低限、実際に被害が予想される部分については対応を準備しておく必要がある。地域の組織や自治体との協働についても今後更に連絡を取り合いながら備えていかなければならない。

信州大学廣内大助教授より、二次避難の経路について、途中に土砂災害警戒区域があったり、浸水被害の可能性がある区域があったりするため、その時の状況に応じて避難経路を考える必要がある点や、数年単位で避難訓練の計画を立案していくとよい点、垂直避難の有効性などについてもご助言をいただいた。今後の防災計画に反映させ、生かしていきたいと考える。

防災学習については、今後、8年前の地震について実際に体験していない児童が大勢を占めてくるが、今回のような学習を継続して行い、地域で起きた震災について理解を深め、自分たちの学びをより多くの人に発信できるようになることが重要と考える。今年度実施していただいた廣内教授による防災教室のように、専門的な知見を持つ方々から児童の学びを深める機会を提供していただいたことは大変ありがたいことであり感謝している。児童がご教授くださった先生方や村の方々の想いを受け止め、今後にかかしていってくれることを願う。

（文責 教頭 長谷川松実）

栄小学校における防災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

栄村立栄小学校

1 はじめに

栄村立栄小学校は、千曲川と山に囲まれた自然環境の中に立地している長野県最北端にある小学校である。冬に学校は雪に囲まれ、3mを超える雪が降り、校庭の雲梯やブランコが雪で埋もれてしまうほどである。

今年度は、45名の児童が、「ふるさとを愛し、心豊かに、かしこく、たくましい子」を学校目標にして、学校生活を送っている。

本校は、12年前の東日本大震災の翌日に起きた、長野県北部地震を経験した学校であり、日頃から防災意識を高め、自分の身は自分で守ろうとする力を育てていきたい。

2 栄村立栄小学校の防災体制について（概要）

(1) 第1回避難訓練 4月11日（月）2校時に実施

- ① ねらい 年度当初にあたり、災害（火災）発生時における基本的な避難の仕方や態度を身につける。
- ② 指導内容 ア. 雪のある時・ない時の避難経路の確認
イ. 緊急放送が聞こえた場合の対応
ウ. 火事や煙の恐ろしさについて
エ. 避難の仕方の確認
オ. 「お（おさない）は（はしらない）し（しゃべらない）も（もどらない）」の確認

(2) 第2回避難訓練 8月31日（水）休み時間に実施

- ① ねらい 休み時間、地震が起きた際に、身を守る方法や避難のしかたを知る。
- ② 指導内容 ア. 合い言葉の確認・放送の聞き方・避難の仕方
イ. 緊急地震速報による避難
ウ. 避難場所の確認

(3) シェイクアウト訓練 9月7日（水）休み時間に実施

- ① ねらい 緊急地震速報が流れた際、その場にあった自分の身を守る行動ができるようにする。
- ② 指導内容 ア. 緊急地震速報の音が流れた瞬間に、自分の身を守る行動の確認
イ. 教室以外の場所における安全な場所の確認
ウ. 基本は「低く、頭を守り、動かない」
エ. 避難時には防災頭巾を着用する

(4) 第3回避難訓練 1月11日（水）2時間目に実施

- ① ねらい 積雪時における避難方法や避難場所を知る。

- ② 指導内容 ア. 雪があるときの避難経路・避難場所の確認
イ. 合い言葉の確認・放送の聞き方・避難の仕方

(5) 長野県北部地震の話 3月10日(金)朝の時間に実施予定

- ① ねらい 地域の長野県北部地震体験者から震災の話聞く。
- ② 指導内容 ア. 震災当時の状況
イ. その後の村づくりについての話

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 本校の課題として、過去の震災の記憶が曖昧になり、危機意識が薄れている。「まさか来るとは…」ではなく、「やはり来たか…」の意識で災害への備えの心構えをどう育てていくかということが考えられる。地震時の避難訓練の工夫についてアドバイスをいただきたいと考えた。

(2) 避難訓練後のアドバイス

① 9月7日(水)シェイクアウト訓練

ア. 緊急地震速報を聞いたなら、条件反射的に素早く行動できるように訓練できるとよい。(その場にしゃがむ、机の下にもぐる等)

イ. 高学年の児童が並ばせていたことがよかった。次の行動が分かっている指示ができたと思う。

ウ. 防災頭巾を被ればよいが、なかれば赤白帽子など手近にあるもので頭を守れるとよい。

エ. オープンスペースから教室へ戻った子どもがいたが戻らない。その場でベストな行動ができるように、一人にいるときはどうするのか、指導できるとよい。

オ. 体育館と2階廊下のつなぎ目と、その1階部分は危険なので、そこを避ける。

② 1月11日(水)第3回避難訓練

ア. 教室から長靴等で避難したが、職員は特に声を掛けることをせず誘導に徹していた。

イ. 本当の災害時、上履き避難だと滑ってしまい、スロープが危険なのでスロープにむしろを敷くなどの対策をする。

ウ. 今回避難した場所には消防車が来る。本当に最終避難場所はその場所か検討する必要がある。

エ. 松葉杖の子どもがいたが、職員がやるのには限界があるので、子ども同士で声をかけて一緒に行くなどできるとよい。

4 事業の成果及び今後の課題

今回、学校防災アドバイザーよりアドバイスをいただき、これまでの訓練の方法や内容について、検討していく必要があると感じた。子どもたち及び職員の命をしっかりと守れるように、来年度の避難訓練に向けて、しっかりと検討し修正し実施していきたい。

5 まとめ

学校防災アドバイザーに来ていただき大変意義があった。これからも外部の方に来ていただいて助言をいただきながら、学校の安全防災について考えていきたい。

(文責 講師 北條明浩)

学校安全総合支援事業の取組について

— 1村1校の強みを生かした防災教育—

栄村立栄中学校

1 はじめに

栄村は長野県の最北端に位置し、新潟県津南町が隣接している。村の人口は1,720人（令和4年11月現在）およそ、その5割が65才以上の高齢者、村の高齢化率53.2%。村には保育園、小学校、中学校がそれぞれ1つずつある。

栄中学校は1学年4名、2学年7名、3学年3名計14名の小規模校であり、生徒の6割がスクールバスで登下校している。11年前の長野県北部地震発生時は幼少期であり、地震当時の記憶はあまりないようだ。

栄中学校の校舎は、11年前の長野県北部地震で被害を受けたため修繕されていて耐震基準をクリアしている。また、校舎が高台にあるため、水害・地震の避難場所になっている。

2 栄村立栄中学校の防災体制について（概要）

(1) 本校では、以下の通り年に3回の避難訓練が計画されている。

時期	設定	主な目的
4月	火災	各教室からの避難経路と避難の仕方を確認する。
9月	地震	避難経路の再確認と、引渡訓練。
1月	火災	積雪時の避難経路と避難の仕方を確認する。

(2) 地区の避難所としての機能を果たすため、年に一度、役場担当者が本校3階にある防災倉庫の点検を行っている。

(3) 生徒の6割がスクールバスでの登下校である。運転手は、小学校と中学校の職員と村のタクシー会社職員が行っている。小学校、中学校の職員は村出身者で、村の地形のこと、道路状況のこと、児童・生徒の家庭環境まで熟知しているため、乗り越し等のトラブルはこれまでなかった。そのためか、スクールバス運行マニュアルは整備されていない。

3 学校防災アドバイザーの関わり

夏休みを利用して、学校防災アドバイザーの榊原保志先生に来校いただき、本校の防災教育の取組について大きく分けて以下の5点についてご指導いただいた。

- ①避難訓練の在り方について
- ②スクールバス運行マニュアルについて
- ③生徒・家庭・地域への防災教育について
- ④避難所開設について
- ⑤校内の危険箇所について

詳しい内容は以下の通りである。

①避難訓練の在り方について

避難訓練の計画は前述の通りである。各避難訓練の計画を見ていただいたところ、以下の2つについてご指摘いただいた。

ア 2次避難場所の設定がない

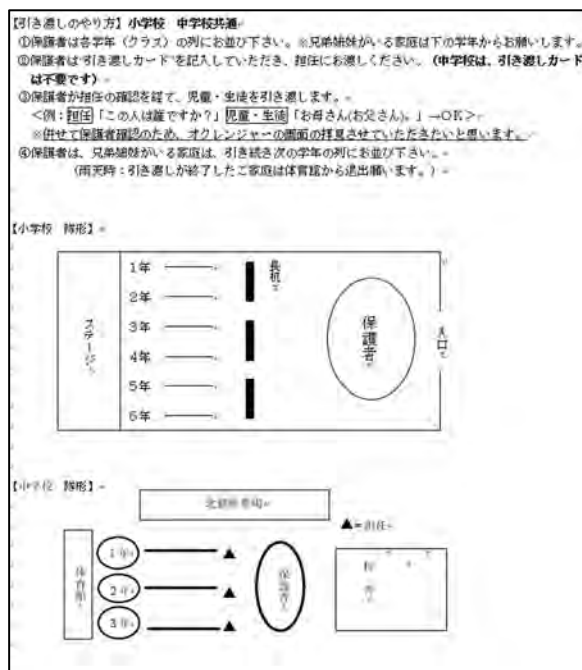
イ 保護者に引き渡すタイミングが明確に決められていない

これまで避難訓練は目的意識を職員や生徒と共有し実施してきたが、指摘の通り、二次避難場所や、保護者への引き渡すタイミングは明確ではなかった。これを受け、二次避難場所を中学校から一番近いこと、駐車場や風雨をしのげる場所が確保されるということから「栄村道の駅」とした。

また、保護者へ引き渡すタイミングを原則、「震度5以上の地震」とし、9月の計画に反映させた。

さらに、榊原先生から、栄村は1村1保育園1小学校1中学校なので、より有事に活かすために同一のタイミングで引渡訓練を行うことを推奨された。早速、教育委員会、北信保育園、栄小学校と連絡を取り、令和5年度から同一のタイミングで保護者への引渡訓練を行うこととした。

(右の一部抜粋資料参照)



②スクールバス運行マニュアルについて

榑原先生からは、東日本大震災を事例に、スクールバス運行マニュアルの重要性を指導していただいた。特にスクールバスの運行時に災害が発生した場合の対応について明確な対応についてマニュアルに明記することの大事さを指導していただいた。そこで、スクールバス運行マニュアル、緊急時のフローチャート（運転手向け）、スクールバスの決まり（児童生徒向け）、スクールバス乗降等手順表（学校職員向け）を作成し、教育委員会、小学校と共有した。（右資料は、児童生徒用の「スクールバスの約束」）

スクールバスの約束

安全な運転のための約束です。



- ①バス到着5分前までに、バス停にいきましょう。
- ②バスに乗ったら、新型コロナウイルス感染症予防のため、窓を開けましょう。（窓から顔や手は出しません。）
- ③バスの中ではマスクを着けましょう。おしゃべりしません。
- ④シートベルトをしましょう。
- ⑤バスが動いているときは、席から立ちません。
- ⑥車内の物を大切にし、車内を汚さないようにしましょう。
- ⑦運転手さんの言うことを聞きましょう。
- ⑧バスを降りてすぐ、バスの前や後ろを通りません。バスがいなくなってから移動しましょう。
- ⑨万が一、バスに取り残されたらクラクションを鳴らし続けましょう。

③生徒・家庭・地域への防災教育について

地域の防災力を高めるには、「学校教育において生徒に防災・減災教育を行うことである」と教えていただいた。そこで、村全戸カラー配付している学校だよりを、村の防災力を高めるツールとして活用しようと考えた。

9月の学校だよりを「防災教育特集」として、

ア 家庭での日中、夜それぞれの避難訓練のすすめ

イ 災害発生時のスクールバス運行について

ウ 引渡訓練の目的について

エ 長野県北部震災から復興までの道のり

について掲載した。

長野県北部地震から復興までの道のりは、現栄村公民館長に3回にわたってお話をしていただいた。公民館長は当時、役場にお勤めで自助だけでなく共助、公助の視点からも復興に尽力した。

この学習の様子は信濃毎日新聞社、妻有新聞社で紹介された。（右写真）



④避難所開設について

栄中学校は、地域の水害、土砂災害、地震の避難所に指定されている。11年前の長野県北部地震の時も避難所として開放した経過がある。今後も避難所として開放することを想定し、校内をどのように使用すれば通常の学校教育に影響なく、避難所としても機能するかレイアウトを考えた。

また、避難所のルールも作成し、誰もが安心して避難生活を送ることが出来るよう、ハード面を整えた。(右はレイアウトの1部抜粋資料)



⑤校内の危険箇所について

定期的な安全点検、さらに毎日の巡回で校内に危険箇所はないつもりでいたが、減災教育の視点で榊原先生に見ていただいたところ、いくつかご指摘いただいた。

地震の際、移動して教室の出入り口を塞いでしまう可能性がある物、飛散フィルムの貼っていない教室の窓、落下防止策のない図書室の本などがそれである。予算の関係上、今年度中に全て対応することは出来ないが、生徒が多く時間を過ごす教室には、飛散フィルムを貼ることになった。地震の際、出入り口を塞ぐ可能性のある物は撤去、または固定した。

また、校内で火災が比較的発生しやすい理科室、調理室、給食調理室の対策についても再確認した。

⑥防災教育授業について

今年度は社会科2年生の単元の一環で防災教育の授業を行った。

4 事業の成果及び今後の課題

学校防災アドバイザー榊原保志先生から防災教育・減災教育における学校教育のあり方についてご指導いただいたことは、自分自身の中で形骸化されていた安全教育のあり方を見直す大変良い機会となった。

特に引渡訓練の内容を見直したことで、スクールバス運行マニュアルを作成したこと、学校だより「家庭での避難訓練」を掲載し、村民の防災・減災意識の向上を図ったことは、これからの教育活動の大きな糧となった。

今後も栄村の地形的な特徴や保育園、小学校との連携、地域や各家庭と連携し、防災・減災教育を進めていきたい。

(文責 教頭 千野 美奈)

防災教育を中心とした学校安全総合支援事業の取組について

— 5年間の取組を次につなぐ —

長野県木曾養護学校

1 はじめに

木曾養護学校は、全校児童生徒 30 名程の小規模校であるが、在籍する子どもたちは、北は塩尻市、南は南木曾町と広域から通学している。学校沿革史には、「子どもたちを生活する地域で育てたい」という木曾の人々の長年の願いと運動の結果、木曾養護学校の開校に至った旨が記され、「木曾養護学校協力会（地域有志の会）」は、開校以来毎年環境整備などに協力して下さっており、地区の皆さんの温かさと学校への思いを日々強く感じている。

本校では本事業に過去 5 年取り組み、昨年度「児童生徒を中心に据えた防災安全教育による 5 年間のまとめ」を行った（昨年度報告書参照）。本年度は、これまでの 5 年間の取組を踏まえ更なる取組のあり方を決めだすことにも取り組むことにした。

2 本年度の取組

(1) 小学部の取組

昨年度の反省で、中学部、高等部では、「中学部の地域探索」「高等部の防災ポーチづくり」など生徒が主体的に防災安全学習に取り組む活動を位置付けられたが、小学部の児童にとっての防災安全学習が主体的の段階までは高められていないということがあった。そこで今年度は、県の出前講座「ぼうさいダック」の派遣を依頼（過去 2 年間はコロナ禍のため中止）し、小学部の子どもたちが興味をもって自ら学ぶことができる防災の授業をおこなうことを考えた。

「ぼうさいダック」が登場すると、子どもたちは大喜びをし、「防災ダック」の動きをまね始めた。大雨の時の「うさぎのポーズ」地震の時の「ダックのポーズ」。部の友達の様子も見ながら、自らポーズを取る子どもたち。大雨、地震といった場面に自ら行動する学習に取り組んだ。実施後の反省で、

活動（展開）

○導入のお話

・地域の実情にあったカードを 4、5 枚選び、「なぜこのような対応行動が必要なのか」という解説をする。

○音楽を使って正しいポーズが取れるようにする。

・ゲーム：ピアノなどでテンポのよい音楽を流し、その場で足踏みします。適当なタイミングでホイッスルを吹きながらランダムに危険のカードを 1 枚示し、一斉に声を出して対応ポーズをとる。音楽を徐々に早くしたり、子どもたちの周りをスキップするなど変化をもたせると、さらに盛り上がる。

○振り返りのお話



ぼうさいダック

これまで地震の際は「ダンゴムシのポーズ」として学習していたポーズであったので、新たな用語を使う際は子どもたちが混乱しないよう、これまでの学習とのすり合わせも必要であることが明らかになった。

(2) 中学部の取組

昨年度、「自分たちの防災マップを作ろう」という小単元で生徒が自分たちの学習成果を「防災すごろく」（防災マップ）にまとめた中学部では、災害から私たちの生活を守る人に視点を向けた。昨年、大雨により土砂崩れが発生し電車が運休したことを経験した子どもたちは、JRの人たちはどうやって線路を守っているのか知りたいと考えた。そこで、JR 東海木曽福島保線区の方を学校に招き、昨年大雨災害後の復旧作業に昼夜取り組み、早期の運転再開につなげたことを聞いたり、保線に使う機材を実際に見せていただいたりした。運転再開のために作業員が目視でレールや周辺を点検するために使うトロッコのような乗り物に乗ったり、ドローンを使って高い場所から地上の様子を確認する実演を見たりする中で、子どもたちは、自分たちの知らないところで大好きな電車の運行を守る人がいることを知る機会となった。



保線用機材を体験する

(3) 高等部の取組

本年度は、県の出前講座を活用し、県内で発生した最近の災害を振り返り、命を守る行動（避難）について復習をした。高等部では、これまで「防災ポーチづくり」を通して非常時に備える学習をしていたので、避難の際に持ち出す物に自らの学習を重ねて講座に参加していた。

(4) これまでの5年間の取組を次につなぐ（学校防災アドバイザーの関わり）

本校では、次年度の学校の取組を決めだす上で全職員がテーマごとに参加するプロジェクト（木曾養プロジェクト）を組織している。令和5年度を考えるにあたり「防災教育プロジェクト」を立ち上げ、課題・問題点を明らかにし、改善に向けた取組につなげることにした。課題とされた点は以下の通りである。

課題・問題点	理由・具体例
学校安全総合支援事業における5年間の工夫や実践の全体像が分かりにくい。	今までの実践（防災ポーチや防災ダック、煙体験等）が十分に継続されてきていない状況や、当時を知らない職員が増え、活動の存在自体が曖昧な状況がある。
内容の系統性や段階が分からないため、気づいた範囲での活動計画になりやすい。	学級チーフが今までの経験やできそうなことから内容を考えることが多く、取り上げる防災教育の内容に偏りがあったり、警察署見学や消防署見学を各部で行っているが、学年段階から内容が適切であったか課題が残ることが挙げられた。

学校安全計画の内容と5年間の成果との間にずれがある。

学校安全計画に学校安全総合支援事業（防災ポーチや防災グッズ、煙体験等）の取組が反映されてこなかった部分がある。

課題の整理に基づき、これまでの子どもたちと取り組んできた学習内容をプロジェクトでは以下のように整理してみた。資料を基に防災アドバイザー 白神晃子先生（立正大学）小原拓弥先生（県防災危機管理課）から助言をいただいた。

	地域を知る	情報伝達	備蓄・備え	食	避難・避難所生活
平常時	<ul style="list-style-type: none"> 学校周辺の防災マップづくり 防災すごろく ハザードマップ 学校周辺の危険箇所 通学路（冬季）の危険箇所 	<ul style="list-style-type: none"> メール受信状況確認 防災盤（事務室・舎）の使い方講習 	<ul style="list-style-type: none"> 防災ポーチづくり 防災リュックの中身 備蓄品 教室環境点検 安全点検 消防署見学 消火器の場所 非常食・備蓄品の保管場所 	<ul style="list-style-type: none"> 食育講座（災害と食） 	<ul style="list-style-type: none"> 避難経路の確認 集合場所の確認 通報訓練
発生時・直後	<ul style="list-style-type: none"> 蛇めけの碑見学 	<ul style="list-style-type: none"> 避難確認名簿の形式 	<ul style="list-style-type: none"> 消火器体験 避難名簿や引き渡し名簿、拡声器等の持ちだし品の明確化 		<ul style="list-style-type: none"> 入浴時 夜間 自由時間 マスク（夜・停電時） 朝活動 部の活動 おはしもち 地震 火災 煙体験
被災後	<ul style="list-style-type: none"> JR線路の災害対応 	<ul style="list-style-type: none"> 引き渡し（返信確認） 引き渡し（電話連絡） 	<ul style="list-style-type: none"> ペットボトルランタン レジ袋で簡易ランタン 	<ul style="list-style-type: none"> 非常食を食べる 	<ul style="list-style-type: none"> 防災グッズの使い方（グラブネット購入&使用） 体育館で避難所体験 家庭への引渡し

白神先生・小原先生の助言より

- ・災害時と直後、前後に分けて考えるとよい。
- ・子どもたちの段階を3年ごとの4つの段階で考えると指導がしやすいのではないか（小学部低学年・小学部高学年・中学部・高等部と寄宿舎）。
- ・1つの学習内容を上記4つの段階で3年サイクルを考えると、継続した指導や内容の深まりにつながる。
- ・「子どもたちのどんな姿をねらいたいか」を出発点にして、段階を考えるとよい。
- ・単発のイベント的な指導にせず、各段階で繰り返し指導していくことが大切。

白神先生・小原先生の助言を参考に、プロジェクトでは「避難後の生活」をテーマに、来年度の学習に向けてステップづくりを試みた。各部で想定される心配点やつけたい力について話題にした。検討の中では、以下のような意見が出された。

- ① 避難先（居住地や避難所）で想定される心配
 - ・暑さや寒さ
 - ・トイレ
 - ・慣れない食べ物
 - ・知らない人と生活を共にすること
 - ・医ケア
 - ・安心して休息や睡眠をとること
 - ・いつもと違う場所での生活
 - ・静かに過ごすこと
 - ・自分のことを伝えられるか
 - ・普段との違いによるパニック
- ② どんな力がついていれば安心して過ごせるか
 - ・日課変更を理解し、対応する力
 - ・避難所のイメージを持っていること
 - ・安心して過ごすために必要な物を知り用意する力（グッズ・音の遮断等）
 - ・どんな食事でも食べられる力
 - ・知らない人の中で過ごす力

これらの想定される心配点やつけたい力にかかわり、どのような体験や学習をしておくとよいかを検討し以下のようにまとめた。

令和4年度木曾養プロジェクト「防災教育」 ～各部・舎でこれから取り組めそうな内容～

	地域を知る	情報伝達	備蓄・備え	食	避難・避難所生活
平常時	<ul style="list-style-type: none"> ・防災マップすごろく ・生活地域の危険箇所は？ ・マイハザードマップ作りと家族での共有 ・防災さんぽ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヘルプカードの使い方 ・自分にできる周田への助けの求め方を知る ・信州防災手帳を読む ・信州防災アプリ登録 ・長野県防災ツイッター登録 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災ポーチや安心グッズ ・棚や物の固定 ・防災ポーチづくりをクラフト班に発注 ・家の自室を安全に管理 ・備蓄品や避難所開設時に必要な物品を誰でも出せるように整理共有 ・教職員の防災リュック 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災リュックに各家庭から個に応じた非常食を備蓄（缶詰やレトルトなどで1食分） ・学期末の持ち帰り点検と中身の入れ替え 	<ul style="list-style-type: none"> ・壊れる、落ちる物がある場所の確認 ・生活地域の避難所確認
発生時・直後		<ul style="list-style-type: none"> ・困っていることを周田に伝える ・周田に助けを求める 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災リュックを背負って避難(地震・豪雨時) 		<ul style="list-style-type: none"> ・スクールバス運行中の地震発生時の対応 ・単独通学中の地震、熊や猿、不審者への対応 ・災害ごとの身の守り方 ・避難路が通れない等、状況に応じた行動 ・AEDの使い方 ・地震車体験 ・校長教頭不在時の対応
被災後		<ul style="list-style-type: none"> ・家族との安否確認練習 ・災害伝言ダイヤル ・電話やネットが使えない時の情報収集方法 ・周田への助けや配慮等の要望を周田に伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災リュックの中身を使う 	<ul style="list-style-type: none"> ・リュックの非常食を食べる(学期に1回) ・非常食をパックのまま食べる ・非常食用おやつを食べる ・避難所で出そうな食事を体験(おにぎりやパン) ・災害食クッキング ・焚火で調理 	<ul style="list-style-type: none"> ・木曾青峰高校(二次避難場所)まで行く ・避難所へ移動するまでのルート/動きの確認 ・伊谷地区避難時の受け入れ対応訓練 ・福祉避難所開設時の動きの確認 ・停電/暗い中での生活体験 ・簡易トイレ体験 ・寒さ暑さへの対策 ・段ボール仕切り内での生活体験 ・共同浴場に入る ・家族以外との食事や宿泊 ・避難所の日課を知る

4 本年度の成果及び今後の課題

次年度の学校の在り方を検討するプロジェクトに防災安全教育を位置づけ、子どもたちとこれまで取り組んできた学習内容を整理することで、偏りや重複があることが明らかになった。繰り返しの指導が子どもたちの学年段階に応じて積み重なり発展するように学校全体の防災教育計画の見直しを継続していくことが課題である。

(文責 教頭 酒井 良恵)

飯山養護学校における防災安全教育の充実に向けた取組について

～学校防災アドバイザー派遣・活用事業の具体②～

長野県飯山養護学校

1 はじめに

飯山養護学校は、平成3年に開校した特別支援学校で、今年度32周年を迎えた。本年度は児童生徒数70名、職員79名である。長野県最北端の田園と緑の里山に囲まれた自然環境の中に立地している。冬期は、積雪が1mを超えることもあり避難経路の確保のための雪かきが職員の毎日の日課にもなっている。



2022.1.14撮影の本校

また、当地は、千曲川と樽川に隣接しており、ハザードマップでは浸水深5m以上の想定区域で、開校前の昭和57年、58年の2年続きで千曲川の氾濫被害にあった場所でもある。さらに、令和元年の台風19号でも避難指示が出された地域でもある。

このことから、子どもたち及び職員は、万に備え、日頃から防災意識を高め、自分の身は自分で守ろうとする力を育てていきたい。

2 飯山養護学校の防災教育について

「学校安全総合支援事業」最終年の5年目を迎えた本年度。学校防災アドバイザーの白神先生から2度の直接来校指導・助言と1度のオンライン指導をいただきながら、防災体制を整え、防災研修や防災教育旬間(1月に計画)を設け、防災教育を推進している。

今年度は、避難訓練に加え、水害時保護者引き渡し訓練(3年目)、地震体験車を利用した地震体験等を行った。また、職員防災研修2回(①授業日(昼間)における「R4自然災害に対する避難・対策マニュアル」に沿った職員水害時緊急避難模擬訓練 ②私の防災ポーチを中身の工夫点等について、ワークショップ形式で紹介し見あったり、防災ポーチを生かした防災教育の授業を展開していく上のアイデアを出し合ったりすること)を実施した。

(1) 今年度の避難訓練(学校)

回	期日	災害想定	避難想定
1	4/19	火災時	避難経路の確認及び2次避難への避難 自営消防団係活動の確認
2	9/28	緊急地震速報システム利用	予告なし(清掃中に実施) 不明児童生徒の搜索(職員)
3	1/13	冬季の火災時	積雪の為校庭に避難できない場合の避難

(2) 今年度の避難訓練(寄宿舍)

回	期日	災害想定	避難想定
1	4/18	火災時	避難経路の確認
2	6/27	夜間火災時	野坂田地区との合同訓練
3	9月	緊急地震速報システム利用	予告なし 地震時の避難の仕方の確認
4	1/16	冬季の火災時	積雪時の避難

(3) 水害時保護者引き渡し訓練 7月1日(金)

☆ねらい

- ・災害時の緊急時に備え、避難マニュアルに沿って、保護者への連絡訓練・引き渡し訓練を準備も含めて実施し、児童生徒を保護者に確実に引き渡すための方法や手順を確認する。
- ・水害危険地域に立地している本校において、新しい職員はもちろん今までおられた職員も、洪水等水害の対策避難訓練の一環である引き渡し訓練を行うことで手順等確かめ、いざという時に備える。

(4) 第1回職員防災研修 7月1日(金)

- ・授業日(昼間)における「R4自然災害に対する避難・対策マニュアル」に沿った職員水害時緊急避難模擬訓練を各部ごとに行った。

☆ねらい

- ・家庭へ緊急の引き渡しが完了される前に、避難指示が決定し場所を移動することになった場合を想定し、万一に備えるため、必要なことを考える。
- ・職員の動きの確認
- ・注意点、改善点の見出し

☆想定

- ・午前中に記録的短時間集中豪雨が発生し、千曲川警戒水位が上昇。正午、保護者にオクレンジャーで緊急お迎えの下校を依頼した。13:30 警戒レベルが4に上昇。飯山市より避難指示が発令し、「城南中学校」への避難が決定する。

(5) 地震体験車による地震体験 9月30日(金) 各部ごとに実施

☆ねらい

- ・地震体験車で強い地震を体験することで、いつ発生するか分からない地震に対しての心の準備や対処法について学ぶ。

(6) 第2回職員防災研修 11月10日(木)

詳細別記

(7) 防災教育旬間(計画中) 1月10日~1月19日

☆ねらい

- ・第3回避難訓練を実施予定の時期に合わせて、万一の時の時の為は何をどう準備し、非常時にはどう動くのかを考え、11月10日に研修した防災ポーチを生かした防災教育の授業アイデアを出し合ったことをもとに各クラスで授業実践をしていき、発達段階に応じた防災意識や防災に対する準備等をしていく。

3 学校防災アドバイザーとの関わり

(1) 防災アドバイザー 白神晃子先生の飯山養護学校来校訪問によるご指導について

① 期日 令和4年8月19日(金) 午前10時より午後1時40分まで

② 参加者 白神先生、本校安全防災係

③ 日程

10時~10時10分	係自己紹介及び本日の予定を確認する。
10時10分~11時	引き渡し訓練、2次模擬避難訓練研修の様子の共有・ご指導
11時~11時40分	避難対策マニュアルの見直し等
11時45分~12時15分	校内危険個所を昨年の結果を踏まえ、再確認巡視
13時~13時30分	今後の予定(職員研修)について

《白神先生からのご指導》

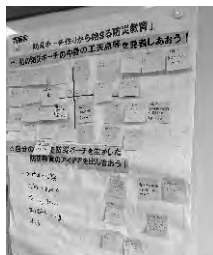
- ・引き渡し訓練の期日は、反省で出されたように、出来れば梅雨入り前がより望ましい。
- ・避難マニュアルに沿って実際に模擬訓練で2次移動訓練に取り組んだことは、課題を見出す上でも良かった。→課題から避難対策マニュアルをもう一度見直し、修正していくと良い。
- ・引き渡し中に、避難場所に移動になった場合、移動中の保護者を本校で待つのではなく、命を守るため避難場所（城南中）に移動しそこに迎えに来てもらうのが望ましいと思う。
- ・昨年の校内危険個所の改善が図られていてよい。引き続き、「棚の上には物を置かない。」事を時々確認し、「窓ガラスには飛散防止シート」「家電等は移動しないように固定」をしていく。
- ・非常用飲料水が用意できて良かった。非常食は、個々に合わせて用意していくのが良い。例えば、保護者とともに非常持ち出し袋に入れるものとして非常食の中身を考えるのも防災教育であり、楽しくできそう。
- ・避難場所である城南中とも連絡を取り、万一利用することを想定し利用方法や課題などを明らかにしておきたい。

(2) 防災アドバイザー 白神先生とオンラインによる11月10日実施の防災研修について事前打ち合わせ

- ① 期日 10月26日（水）
- ② 参加者 白神先生 本校安全防災係

(3) 第2回職員安全防災研修 「防災ポーチ作りから始まる防災教育」

- ① 期日 11月10日（木）16時～17時
- ② ねらい
 - ・防災教育の視点から、私の防災ポーチの中身について、ワークショップ形式で、個人の好みや工夫で用意したものを紹介し見あったり、防災ポーチを生かした防災教育の授業を展開していく上のアイデアを出し合ったりすることを通して、防災アドバイザーの先生のご指導・助言や、他校での実践事例の紹介等を頂きながら、実践に役立つ防災教育のヒントを学ぶ。
- ③ 場所(コロナ感染レベル上昇によりズーム利用で、分散開催)・小学部一食堂、
・中学部一ワークルーム ・高等部及びなのはな ・寄宿舍職員一体育館
- ④ 日程
 - ・はじめのことば
 - ・講師紹介
 - ・私の防災ポーチの中身についてグループで工夫点等を発表しあう。(15分)
 - ・講師からのアドバイスと他校での実践事例の紹介(10分)
 - ・自分のクラスで防災ポーチを生かした防災教育を展開していくためのアイデアを出し合う。(20分) 白神先生各会場をまわり、指導助言。
 - ・講師のご指導(10分)
 - ・お礼の言葉(3分)
 - ・終わりの言葉



ワークショップ形式で付箋でまとめ



グループで話し合いアイデアを出し合う!

《職員のご感想》

- ・事前に白神先生作成の「作ろう！防災ポーチ」のビデオを見ながら、防災ポーチを作ったり、紹介したりしあったので、分かりやすく良かった。また、先生方のアイデアを聞くことができ、新しい発見や楽しみながら、万一のことをイメージし、どう対応したらよいか考えるきっかけになった。
- ・防災教育について、どうやって取り組めばよいか迷っていたが、先生方と話し合う中で楽しみながら取り組めそう。
- ・防災ポーチという具体的な物をきっかけに、改めて災害の時どうするか考えるきっかけになった。

4 事業の成果（○）及び今後の課題・来年度の取組（△）

- 昨年度本校で設置された避難時の「安心スペース」について、4月の避難訓練前の事前指導と、9月の避難訓練時に実際に体験することで、「安心スペース」の場所と利用の仕方を再確認することができた。
- 9月の避難訓練時に緊急地震速報システムを利用したので、普段聞くことがない緊急地震速報を聞くことで、よりリアルな避難訓練になった。
- 「防災ポーチ作りから始まる防災教育」の研修を通して、白神先生から、防災ポーチという具体的なアイテム作りと職員間の紹介の場及びそれを発展させた防災授業のアイデアをいただき、楽しみながら授業に取り組む良いきっかけになった。
- 避難マニュアルに沿って、実際に二次避難所に移動する模擬訓練を行い、課題が改めて明らかになった。
- △模擬訓練で明らかになった医療的ケア児童生徒の持ち出し品のリスト作成・準備と移動方法を再確認し、マニュアルを改善していく。
- △今年度、PTAのご協力により、非常時飲料水を確保することができたので、非常食について各個人で非常持ち出しを考える中で用意していきたい。
- △水害時避難場所である城南中と連絡を取り、よりスムーズな移動・避難ができるようにしていく。

（文責 教諭 安全防災係 渋谷清信）

諏訪養護学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

～学校防災アドバイザーの視察及び指導・助言を通して～

長野県諏訪養護学校

1 はじめに

諏訪養護学校は、諏訪地域の東側、諏訪郡富士見町に位置し、諏訪圏域6市町村の児童生徒186名が在籍している。登下校は、小、中学部の児童生徒の大半がスクールバスを活用し、高等部生は、スクールバスや電車等で通学している。そのため、自然災害が発生し、道路の通行止めや公共交通機関の運行停止等の場合、ほとんどの児童生徒が帰宅困難になる可能性がある。大雨や大雪、地震等による自然災害時の学校体制について、本事業を活用しながら整備を進めていきたいと考えた。

2 諏訪養護学校の防災体制・訓練について（概要）

本校では、災害時の基本対応については、「防災マニュアル」により示されており、毎年、学校防災アドバイザーの先生から助言をいただき、防災マニュアルの見直しを行い、学校の防災体制を整えている。

今年度は、前回の視察時に学校防災アドバイザーの先生からいただいた助言を基にして、防災管理や訓練等を通じた防災教育を実施した。

第1回（4月）	目的：避難経路の確認	想定：緊急地震速報システム作動 （児童生徒への日時予告）
	全学級：避難経路の確認、避難時の並び方の確認等 避難学級：小・中・高の新1年生の学級 教室の場所が大きく変わった学級 ※コロナ感染警戒レベルの上昇により、避難学級を縮小して実施	
第2回（7月） ショート訓練	目的：地震発生時の初期動作の確認	想定：緊急地震速報システム作動 （児童生徒への時間の予告なし。職員へは周知）
	全学級：初期動作の確認（避難なし） 地震に関する資料掲示	
第3回（9月）	目的：初期動作から避難誘導 二次避難から引き渡し	想定：緊急地震速報システム作動 （児童生徒への日時予告） 校舎の一部が損壊のため保護者への引き渡し

	全学級：初期動作から避難誘導し、部ごと二次避難場所に移動後、保護者が迎えに来るまで待機し、的確に保護者に引き渡しを実施。前回からの改善点：看板による誘導の確立。保護者札の携帯。部ごと看板の色（小→赤 中→緑 高→青）を保護者へ事前通達。 【学校防災アドバイザー視察、事前・事後指導】	
第4回（10月） 医療アラートが 医療警報に引き 上がり中止	目的：火災発生時の避難行動	想定：火災想定 (児童生徒への日時予告)
	全学級：火災発生場所に近づかない避難経路で、迅速に避難する。コロナの感染警戒レベルに沿って、避難学級を指定。	
第5回（12月） ショート訓練	目的：地震発生時の初期動作 の確認	想定：地震想定（予告なし）
	全学級：初期動作の確認（避難なし） 地震に関する資料掲示	
第6回（2月） ショート訓練	目的：地震発生時の初期動作 の確認	想定：地震想定（予告なし）
	全学級：初期動作の確認（避難なし） 地震に関する資料掲示	

3 学校防災アドバイザーの関わり

学校防災アドバイザー（信州大学 廣内 大助 先生、立正大学 白神 晃子 先生）

(1) 事前打ち合わせ（8月29日 オンライン） ※助言内容

① 引き渡し訓練について

- ・リストにない方が迎えに来たときの対応
- ・引き渡す方の自筆のサインを必ずもらう
- ・引き渡さないでほしい人や来られないだろうという人、連絡後どのくらいの時間で迎えに来ることができるか、保護者が記載できる欄を設ける
- ・保護者への引き渡しが進み、児童生徒の人数が少なくなってきた時の想定
- ・予告なしで引き渡し訓練（実際にはオクレンジャー発信、受信のみ）を行い、保護者が連絡を受けた場所から何分で来校できるか返信してもらい、実際に残る想定人数の把握

② 福祉避難所について

- ・富士見町の福祉避難所としての協定は結ばれているが、町からの物資は、避難してきた人たちのものとして考え、児童生徒の分は、学校で用意しておくのがよい

③ 個別の避難計画

- ・市町村と連携し、学校も積極的に関わっていけるとよい

(2) 引き渡し訓練当日（9月16日）

① 改善点

ア 看板による誘導の確立

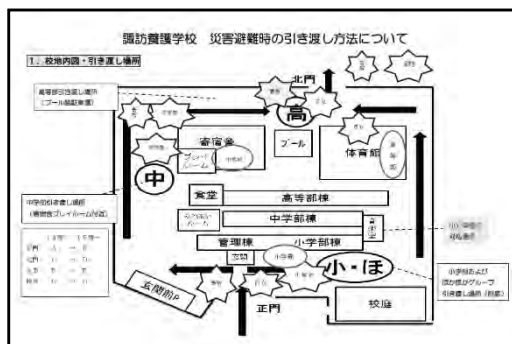
→事前に案内看板の色が部ごと違うことを保護者に伝え、当日は、案内看板の色（小学部→赤色 中学部→緑色 高等部→青色）に着目し、引き渡し場所に誘導

イ 保護者札(名札)の携帯の徹底

→来校時、常に保護者札を携帯していただくことを年度当初から周知し、引き渡し時も保護者札がある方に引き渡しを実施



② 学校防災アドバイザーの助言内容



- ・本部にホワイトボードを用意し、各部の状況（けが人）や通行止め箇所の記入
- ・職員のヘルメット着用の徹底
- ・児童生徒や職員のヘルメット着用が望ましいが、ないなら帽子でも可
- ・車の出口ははっきり、わかりやすく

- ・保護者のネームプレートの色によるスムーズな案内により、誘導の人員の削減
- ・人数が減った時の対応。学級の合体等
- ・大雨の時の想定
- ・例として、中学部の引き渡し場所が使用できない時の対応
- ・本部との連絡手段として、各部に1つ連絡用トランシーバーの購入
- ・余震を想定した教室での過ごし方
- ・防災バッグは、子どもたちと一緒に考えてもよい

(3) 校内外の安全点検等の指導、助言内容

① 教室内について

- ・職員も一緒に隠れる練習をする
- ・窓ガラスフィルムを貼っておくとよい

② 各部室について

- ・部室内の危険箇所の気づきが、自身の担当教室に結び付き、改善につながる
- ・ロッカーの上の重いものは下へ

③ その他

- ・案内掲示は防水紙を使用

4 事業の成果及び今後の課題

(1) 事業の成果

学校防災アドバイザーの先生方の視察や指導・助言により、安全・防災係や各部の部長を中心に「防災マニュアル」の見直しを定期的に行った。また、引き渡し訓練時においても、「緊急事態時の対応である」ということを職員が意識し、事前準備（コーンを並べて車線レーンにする、道路に矢印を引く等）をなくして実施をした。特に保護者札(名札)を事前に部ごと色分けをし、当日の誘導案内の表示も同色で統一したことにより、保護者には、分かりやすく、スムーズな誘導へとつながった。

また、学校備蓄品や防災バッグの準備の必要性についても助言をいただき、今まで購入してあった備蓄品（カレーやハヤシライス、飲料水）にプラスして、防寒シートやゼリー等以外に、非常持出袋（懐中電灯、軍手、ホイッスル、ヘルメット）を学級数分購入し、いざという時のために最低限整えつつある。

(2) 今後の課題

① 引き渡し訓練について

自然災害時における保護者への引き渡しについて、大雨の時の想定や一つの部の引き渡し場所が使用できない時の対応等、学校防災アドバイザーの先生方からの助言を基にいくつかの想定に対する対応を決め出したい。また、本部としての役割についても職員で共有し、的確な指示、伝達が行えるよう訓練を通して高めていきたい。

② 福祉避難所としての役割について

富士見町の福祉避難所として、協定は結ばれているが、実際に学校職員の動きや物資等の動きについて町と具体的な話を進めていく必要性を感じた。児童生徒、職員の備蓄についても1日分の食料確保を進めて、さらに、医療的ケアの必要な児童生徒に対しての環境も整えていきたい。

③ 個別の避難計画について

諏訪圏域6市町村との懇談会を毎年定期的に行っている。自然災害等が発生した場合、児童生徒の個別の避難計画についても行政の力を借り、推進していきたい。

④ 地域との連携について

コロナ禍、地域の方に協力していただいていた避難訓練が実施できずに今年度も終えようとしている。夜間の災害時等に対して、寄宿舍にいる生徒、職員の安全な避難に対しては、地域の方の協力も必要となる。今後、今まで培ってきた学校と地域の連携についても絶やさぬよう深めていきたい。

(文責 教頭 傳田 浩章)

安曇養護学校における防災体制の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野県安曇養護学校

1 はじめに

長野県安曇養護学校は、北安曇郡池田町会染内鎌に位置しており、令和4年度は小学部・中学部・高等部・高等部あづみ野分教室・訪問教育部に205名が在籍している（令和4年4月現在）。児童生徒は、北は小谷村、南は塩尻市の広域からスクールバスや送迎、自力通学で登校してきている。また、寄宿舎も設置されており、現在は23名の児童生徒が利用している。

学校の東側にある山の斜面には、クラフトパークや美術館、西側には有明山が聳え、雄大な北アルプスの山々が連なっている。学校西側には一級河川の高瀬川が北から南へと流れ、河川敷にはマレットゴルフ場や公園広場がある。穏やかな日には子どもたちが散歩を楽しむ姿が見られるが、学校付近や上流には霞堤防があり、高瀬川氾濫時にはそこから水を逃すような地形となっている。長野県を広域で見た場合には、北アルプス圏域から松本圏域までの非常に広範囲の地域であることから、北と南では気象条件もまったく異なることもある。本校は、池田町のハザードマップによると、高瀬川の1000年に1度の想定最大規模降雨（48時間で741mm）では50cmから3mの浸水想定区域となっている。

2 長野県安曇養護学校の防災体制について（概要）

本校では、「学校防災計画」「危機管理マニュアル」「避難確保計画」によって災害時に備えている。防災組織として、本部・通報連絡・避難誘導・消火・救護・搬出・警備・査察の8つの係を編成し、全職員で組織している。防災教育としては、例年教室と寄宿舎で年間4回ずつ（火災3回、地震1回）避難訓練を実施している。引き渡し訓練では、昨年度新たに浸水害を想定したタイムラインを保護者に配布し、早い段階での引き渡しを想定した訓練を実施している。

3 学校防災アドバイザーの関わり

昨年度の学校防災アドバイザーとの懇談の中では、これまでの防災体制の状況確認と点検を行い、その後の改善点についてアドバイスをいただいた。改善状況に本校で制作したタイムラインや避難確保計画の内容については、本校の実情や様々な観点から修正や見直しなどは継続して行っていく必要があることを再確認した。また、地震等の災害については、危険個所の認識や環境整備について一層の安全対策を講じていくことを確認した。

昨年度の課題としてあった浸水害を想定した2次避難場所については、候補地を選定し、その視察と災害時の避難について確認を進めていくことにした。

(1) 昨年度に学校防災アドバイザーから受けたアドバイスとその後の対応

① タイムライン・避難計画について

- ・昨年度作成したタイムラインについては、安全防災係内で内容を点検し、保護者に配布して災害時の具体的な動き方について周知した。

② 教室・作業室の環境について

- ・ロッカーや棚の上に荷物を置かないことや重い荷物などは床に近い場所に置くようにするなど職員へ注意を促した。また、防災対策用品などの不備や不足が無いかを各室責任者から調査を行い、荷物が滑り落ちないように必要な分の滑り止めシートを各教室に配布し対策をとった。
- ・大型テレビやキャスター付きの棚などは使用しやすいように取り外しが可能なロープや金具を使い固定をした。



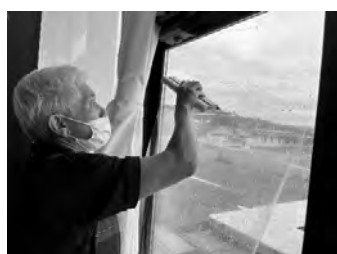
③ 防災頭巾やヘルメットについて

- ・ヘルメットの購入を進め、いざという時のために各教室の状況に合わせ、手が届くロッカーの上や屋外への出入り口付近に掛け、すぐに取り出せる所に置いた。



④ その他の環境について

- ・地震や強風によりガラスなどは破損の可能性が高いため、教室から屋外へ行き来できる非常口には、ガラス飛散防止フィルムを貼った。



⑤ 避難訓練について

- ・火災や地震を想定した避難訓練、予告なしの避難訓練を計画した。新型コロナウイルス感染警戒レベルが高くなり、延期、見合わせになったことで密を避けるために全校一斉に出来なかったり、中止になってしまった。しかし、各学年や学級対応で、一斉

に集まらない形で実施した。コロナ禍における避難訓練についての方法を具体的に計画することが必要である。

⑥ 備蓄品

- ・学校には食事や水分、その他の防災備品があるが、児童生徒の個人備蓄（安心グッズ、着替え、好きな缶詰など）は、保管場所や保管方法などを検討していく。

⑦ 研修と理解

- ・インターネットでは防災関連のビデオや児童生徒向けの映像などが多数閲覧できるため、ここ数年でも利用する学年や学級が増えてきている。折に触れて、教材として利用して、理解を深めていきたい。

⑧ その他

- ・これまで寄宿舎の避難訓練は地域の消防団にも参加いただき、協力してきてもらっているが、コロナ禍で訓練を実施していないため、協力体制の再確認を図る必要がある。
- ・寄宿舎の洪水のタイムラインも学校とは別に作成してあるが、夜間の危険度が高いことや周辺の浸水の状況によっては、児童生徒を保護者へ引き渡すより寄宿舎に待機をした方がよいとの見方もある。

(2) 2次避難場所への移動についてのアドバイス

① 最寄りの会染小学校への協力依頼

- ・会染小学校の防災対策を教頭から説明を受け、災害時の具体的な受け入れ方法などについて確認する。理科室やつどの部屋などは机や椅子が異動させることができるため、避難した人数に応じてスペースを確保できる。

② 地域にある大型商業施設や多目的センターの駐車場の利用

- ・大型商業施設では、地域貢献という目的もあり災害時には学校だけでなく、地域、一般の方など特定せずに駐車場を利用できる。ただし、実際には災害時は現場の混乱が予想されることから、学校職員が交通整理などに協力していく必要がある。
- ・多目的センターの利用については、池田町で定めている避難対象に学校が含まれないこともあり、学校から近い場所であっても優先的に利用することは困難である。

③ スクールバスの利用にかかわって

- ・2次避難場所へスクールバスを利用することは、一度に多くの人数を移動させるにはよい手段ではあるが、常時学校にドライバーがいらないため実際には困難である。現実的には、災害状況を確認したうえで学校職員の車を使用することも考えられる。

④ 避難場所での備蓄品について

- ・もし2次避難場所へ移動した場合には、そこに留まる可能性があることを想定しておくことが必要である。
- ・2次避難場所へは、児童生徒だけでなく一般の方も避難することになると物資の不足が想定される。周囲が水没し、その場所に留まる状況があり得るため、移動せざるを得ない状況の場合には、学校にある備蓄品の移動も含めて準備をしておくことを検討

していく。

⑤ 避難所の見学

- ・学校周辺は民家や農耕作地となっているため、水没した場合には避難所までの道路などが分からなくなる可能性もある。周辺の建物などの目標物を頼りに避難所までたどり着けるようにできるだけ安全に移動できるような広い道路を予め決めておく必要がある。
- ・会染小学校校舎内で避難場所として使用できる教室までの通路やトイレなどを確認した。
- ・避難が長期間になる場合、障がい者ということで福祉避難所的な対応も相談していく必要がある。

4 事業の成果及び今後の課題

- ・学校防災アドバイザーからの助言により、学校の教室環境などの具体的な改善点や教職員の防災に対する意識が向上している。
- ・2次避難所への移動については、可能性のある施設と連絡をして、災害時の動きなどを想定しながら準備をすることが出来た。
- ・年間を通して避難訓練を計画してきたが、新型コロナウイルス感染警戒レベルが高く密を避けるために分散しての実施または中止せざるを得ない状況もあった。しかし、感染警戒レベルが高い状況であっても必要な訓練の機会を確保することやどのような方法で安全確保ができるのかを模索していく必要がある。
- ・町内にある小中学校や各諸団体の施設管理者を対象とした防災関係の会議が開催されたが、本校は県立学校ということもあり対象外で案内はなかった。学校のある町内の各施設等とは災害時には協力体制を作ることが想定されることから、このような場にも参加をしていく必要があると思われる。
- ・校舎や備品の老朽化などに対応できるよう遊具点検や計画的な検査など予算化していく必要がある。
- ・予定している校舎建築では、家具の固定や構造、耐震対策を考え、安心して過ごせる環境を考えた。

5 まとめ

安全防災係を中心に防災体制の構築を進めてきているが、タイムラインや避難確保計画などを備えながらも、具体的な防災に向けた対策が目に見えることで児童生徒や職員の意識も以前よりも高まっている。また、防災訓練の直前に行う事前指導はもちろん、事後指導でも訓練を振り返り、安全を確保するために必要なことは何か、児童生徒や教職員自らも訓練を通して気づいたことを出し合ったり、新たな安全対策を考えたりすることが学校全体の防災意識を高めていくことに繋がっていく。

(文責 教頭 漆戸隆司)

洪水土砂災害発生を想定した 保護者引き渡し訓練の実施

— 防災アドバイザーとの連携による訓練計画の立案 —

長野県小諸養護学校

1 はじめに

小諸養護学校は、長野県小諸市にあり佐久圏域の児童生徒を対象とした知的障がい特別支援学校である。小諸市にある本校のほか、小中学部の分教室（ゆめゆりの丘分教室）が佐久穂町にある佐久穂小中学校内に設置されている。また、高等部分教室（うすだ分教室）が佐久平総合技術高等学校臼田キャンパス内に設置されている。更に、小諸高原病院内には訪問教室が設置されている。

本校は、浅間山麓に位置していることから、長年にわたり浅間山の噴火への対応を課題としてきた。しかし、2019年10月の大雨による千曲川の氾濫によって、通学区内では深刻な被害を受けた地域もあり、改めて多方面の自然災害について再見する必要性が出てきた。学校の所在地は、様々なハザードマップからは外れているものの、幹線道路と一本道でつながっているのみであることから、そこが封鎖された場合孤立してしまう恐れもある。

2 本年度の計画

昨年度、浅間山の噴火時の対応について、現存のマニュアルと想定される災害について見返しをおこなった。その中で、噴石、降灰などの噴火直後の避難誘導を想定したものにとどめるのではなく、噴火が落ち着いてきた後に想定される訓練の必要性が認められた。

また、大雨による千曲川の氾濫での経験から、災害発生後の引き渡しについては、各家庭からの迎えにはどのくらいの時間を要するかなどの緊急連絡網を活用した実態把握を行った。引き渡し訓練を喫緊の課題とした上で、学校がどう判断し、どのように保護者への連絡を取るのかを具体的な形にしておく必要性が確認された。

そこで本年度は、昨年度からの継続で防災アドバイザーにご協力いただき、洪水土砂災害時のタイムラインの作成と、引き渡し訓練の実施を目指す計画とした。

3 本年度の実践

(1) タイムラインの作成

【令和4年6月】

千曲川が氾濫した場合に備えて、対応を決定していく指針となるタイムラインの作成に着手した。地方気象台からの発信される気象情報や警報、地域の河川の水位を情報源とし判断していくことにした。各警戒レベルに応じて、学校(教室)や寄宿舎の動き、下校後の家庭での動きを一覧にしたタイムライン(試案)を6月に作成した。防災アドバイザーの助言を参考に加除修正しタイムラインを完成させる(※資料Iを参照)

(2) タイムライン(試案)と引き渡し訓練実施計画案の中間報告

【令和4年8月】

防災アドバイザー(立正大学白神先生、県危機管理防災課 小原様)にご来校いただき、

立地条件や建物の状況等の学校環境を見ていただくとともに、校内で作成したタイムライン（試案）を見ていただいた。また、初めての実施となる引き渡し訓練の計画について説明を行い、加除修正が必要な点や運用に向けてのご助言をいただいた。

(3) 引き渡し訓練の実施

【令和4年10月】

本校においては初めてとなる引き渡し訓練を実施した。まずは実施してみることに重点を置き、実施後の振り返りを今後に活かしていきたいと考え、専門家にご来校いただくことにした。防災アドバイザー（白神様、小原様）、県危機管理防災課（馬場様）、県保健厚生課（藤村様）に訓練の参観を依頼し、訓練終了後、反省会にてご助言をいただいた。訓練は、以下の点に配慮しながら実施した。（※略案は資料Ⅱを参照）

○ 部ごとに時差を設けての実施

実際の想定とは異なってしまいが、本校の立地条件（幹線道路から1本道であることや毎日の下校の際でもかなりの混雑が生じていること）を考慮し、渋滞による公道の混乱をできるだけ回避しながらも実態や課題をつかみたいと考え、部ごとに若干の時差をつけて実施することとした。

○ 引き渡し場所と引き渡し方法の工夫

学校敷地内での渋滞や事故を防ぐために、部ごとに引き渡し場所を分散して設定し、ドライブスルー方式の引き渡し方法で実施した。また、学校敷地内への車両出入口が1箇所しかいないため、正門での確認とアナウンスの方法を工夫した。



引き渡し訓練の様子（令和4年10月28日）

4 本年度の成果と課題

本年度の計画であったタイムラインの作成と引き渡し訓練の実施ができたことは成果であった。作成段階や計画段階において、専門家から助言を受けながら立案できたことにより、多角的な検討にもつながった。特に引き渡し訓練ではドライブスルー方式の導入や、「緊急時引き渡し保護者ナンバーカード」について中間報告での助言を取り入れた部分があり、初めての引き渡し訓練でありながら大きな混乱もなく実施できたことにつなが

ったと考えられる。

来年度以降の課題として、校内でのよりスムーズな誘導や、緊急時用の車両出口の増設など具体的な改善点が明らかになった。

また、災害の状況によっては、必ずしも引き渡しが最善の策とはならない場合もあり、学校にとどまる可能性が出てくることも想定しておく必要があることが分かってきた。その場合、引き渡しにかかわる対応の他にも、物資搬入に向けた外部との連携や、学校での待機場所を開設するための準備にあたる職員の動きも必要となってくることが予想される。そのため、今回以上に役割分担が必要となってくる。物資の調達や医薬品の対応など、地域との連携や提携についても協議し、準備を進めていく必要がある。

また、防災アドバイザーからは、大雨や洪水土砂災害に備えるとともに、あらゆる災害をイメージした訓練を重ねる必要があるとの助言をいただいた。

来年度は校舎増築工事が予定されており、本年度の引き渡し訓練をそのまま実施することは不可能である。しかし、災害はいつ起こるか分からないため、本年度の実践を基に来年度（増築工事期間中）のマニュアルを作成しておくことが必要となる。緊急時用の車両出口の増設も実施されることが決まり、新たな計画案には組み込んでいけることとなった。

この2年間、災害発生時に児童生徒の安全をどう守っていくのかという、学校職員の立場からの防災に向き合う形で事業を活用させていただいてきた。外部や地域との連携について備えていく必要があることが分かってきた。また、今後は児童生徒が自らどう行動することが「安全を守る」ことにつながっていくのかを知り、実生活につなげていけるような防災学習の充実を目指していく必要があると考えている。

5 今後の予定

年度	事業計画
令和5年度	<input type="checkbox"/> タイムライン（洪水土砂災害関連）運用・見返し <input type="checkbox"/> 引き渡し訓練の計画・実施（校舎増築工事中） ○緊急時連絡網を用いた部ごとに時差を設けた引き渡し訓練 ・保護者からの受信から各係への情報伝達 ・保護者到着時刻から引き渡しの動き ・引き渡し不可能な児童生徒の学校滞在を想定した動きの確認 <input type="checkbox"/> 浅間山噴火を想定した避難訓練 ○タイムライン（浅間山噴火時）の作成 <input type="checkbox"/> 防災安全教育の授業の実施
令和6年度	<input type="checkbox"/> 引き渡し訓練の実施（新校舎増築後） <input type="checkbox"/> 学校滞在時の環境整備 <input type="checkbox"/> 防災安全教育の授業の実施
令和7年度	<input type="checkbox"/> 引き渡し訓練の実施（地域との連携） <input type="checkbox"/> 学校滞在時の環境整備 <input type="checkbox"/> 防災安全教育の授業の実施 <input type="checkbox"/> 学校安全総合支援事業のまとめ

6 資料

〔資料Ⅰ〕洪水・土砂災害に関するタイムライン（学校関係の抜粋）

警戒レベル	佐久地域の 大雨情報 (情報源) 気象庁 HP	河川の水位 (情報源) 河川砂防情報 ステーション <観測地点> 千曲川 塩名田 千曲川 下越	小諸養護学校 教室 (登校時)	小諸養護学校 寄宿舍 (下校後)
レベル 1	早期注意情報 台風情報 気象情報発表	ライブカメラ 確認	<通常日課> <input type="checkbox"/> タイムラインの確認 <input type="checkbox"/> 臨時休校、自宅待機、 引き渡し検討 <input type="checkbox"/> 注意喚起など、保護者連絡 ー斉配信メール・お便り	<通常日課> <input type="checkbox"/> タイムラインの確認 <input type="checkbox"/> 引き渡し検討
レベル 2	雨雲レーダー 降水状況確認 大雨・洪水 注意報 氾濫注意情報	ライブカメラ 確認	<通常日課> <input type="checkbox"/> 今後の天候の情報収集 <input type="checkbox"/> 河川水位の確認	<input type="checkbox"/> 電話連絡 「引き渡しの可能性あり」
レベル 3-1	大雨・洪水警報 暴風警報 記録的短時間 大雨注意報	2地点の 水位上昇 氾濫注意水位 に近づく	<通常日課> ⇒ 早めの下校、自宅待機 SB運行、送迎受入、 単通生引率 など <input type="checkbox"/> 今後の天候の情報収集 <input type="checkbox"/> 河川水位の確認 <input type="checkbox"/> 道路状況、交通機関運行 状況の確認 ・一斉メール配信、電話連絡 「早めの下校、または、引き渡 し、自宅待機、または、臨時 休業の可能性があり」	<input type="checkbox"/> 17:00 までに電話連絡 「お迎えに来てください」 <input type="checkbox"/> ※連絡後、引渡開始 ・連絡がつかない、 1時間以上迎えなし家庭に 電話連絡 (舎担当) <input type="checkbox"/> 電話で帰宅確認 <input type="checkbox"/> 帰宅確認報告
レベル 3-2	記録的短時間 大雨情報 土砂災害 危険度分布 「警戒(赤)」 大雨洪水警報 が出され、 15時間後まで 警報の継続が 予想される	2地点の水位 氾濫注意水位 超 水位上昇傾向 避難判断水位 に近づく	<授業切り上げ> 引き渡し ・一斉配信メール配信 「お迎え来て下さい」 ※送信後引き渡し開始 ※単通生も迎えを依頼 <input type="checkbox"/> 学校HPIに掲載 <input type="checkbox"/> メール未読家庭に電話 <input type="checkbox"/> SB会社移動の連絡 <input type="checkbox"/> 引き渡し準備 <input type="checkbox"/> 放ディ等事業所に連絡 <input type="checkbox"/> 防災バック準備 <input type="checkbox"/> 各部 引渡と生徒掌握 <input type="checkbox"/> 引渡、未実施家庭に連絡 (引渡開始後50分をめぐり) 避難完了 ○安否確認、避難先の確認 → 特別支援教育課報告	・寄宿舍 避難完了
<div style="border: 2px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; display: inline-block;"> <p>避難の段階</p> </div>				
レベル 4	危険度分布 (紫)		避難完了 臨時休業	閉舎
レベル 5	大雨特別警報		避難完了 臨時休業	閉舎

〔資料Ⅱ〕令和4年度 引き渡し訓練実施計画略案

- 1 日時 10月28日(金) 13:30~16:30 (雨天決行)
- 2 ねらい
台風や水害、火山噴火等の緊急時に備え、保護者への連絡訓練・引き渡し訓練を実施し、児童生徒を保護者に確実に引き渡すための方法や手順を確認する。
- 3 想定
安全計画X1-3マニュアル「在校時の緊急対応」のレベル3
台風接近に伴い佐久地方に大雨洪水警報・暴風警報が発令され、千曲川の水位が上昇し、行政からも避難の必要性があるという情報が入った。そのため、緊急の運営委員会(含:副部長、防災安全係長)を開き、小諸養護学校タイムライン(学校防災行動計画)に従い、児童・生徒の引き渡しを行う。
- 4 留意点
 - ・初めての実施であることを考慮し、焦らず安全第一で行う。
 - ・一方通行の進行方向や各部の引き渡し場所について事前に各家庭にプリント配布する。
- 5 ながれ(抜粋)

時刻	内容	備考
12:30	オクレンジャー第1報(引き渡し可能性あり)	オクレンジャー
13:10	本部設置(引き渡し児生一覧表配布)	児生一覧表
13:20	オクレンジャー第2報(引き渡し実施・回答あり)	
13:30	引き渡し訓練開始	トランシーバー 誘導棒 カラーコーン

【手順】

- ①校門ナンバーカード確認
→無線で本部へ(連絡係)
- ②校内放送(番号2回繰り返す)
- ③児童生徒を引き渡し場所へ(各担任)
- ④引き渡し・名簿チェック(各担任)
- ⑤引き渡しが終了した学級
学級担任→部長に報告
- ⑥終了した部 部長→教頭に報告

※乗り降りに時間がかかる児童生徒については、近くの駐車場で引き渡しを行う。

※児生の乗車は保護者が主で行う。
シートベルトの確認は保護者。
担任は必要に応じてサポート。

※兄弟関係で一緒に引き渡す場合は、それぞれの担任と部長間で連絡を取って場所を決めておく。

【各部の待機場所】

- 小学部 → 教室・プレイルーム・玄関ホール
- わかば → 教室・プレイルーム・玄関ホール
- 中学部 → 図書室・食堂
- 高等部 → 体育館と音楽室
- 分教室 → 各教室

【設定時間】

- ①小学部 14:00 ~ 14:30
- ②中学部 14:30 ~ 15:00
- ③高等部 15:00 ~ 15:30
- ④わかば学級 14:00 ~ 15:00
※医ケアの児生 13:20 ~ 可
- ⑤訪問教育 今回実施なし
- ⑥ゆめゆりの丘分教室 14:00 ~ 15:00
- ⑦うすだ分教室 14:30 ~ 16:30

※上記の時間は、一応の目安
各家庭の事情等での変更も可
(最終は16:30まで)

【引き渡し場所】

- 小学部・わかば学級 → 正面玄関
- 中学部 → 食堂南側
- 高等部 → 体育館東側
- 分教室 → 各玄関付近

16:30 | 終了予定

(文責 教頭 柳澤 徹)

長野養護学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 2年次 —

長野県長野養護学校

1 はじめに

長野県長野養護学校は長野県で最初に設置された知的障がい特別支援学校で創立 60 年を越える。長野養護学校本校（長野市徳間宮東）の他に、長野ろう学校に併置の小学部三輪教室（長野市三輪）、長野盲学校に併置の高等部朝陽教室（長野市北尾張部）、旧須坂創成高校須商キャンパス校舎の高等部すぎか分教室（須坂市須坂）の 3 つの分教室がある。

令和 4 年度は、本校（小学部・中学部・高等部）・小学部三輪教室・高等部朝陽教室・高等部すぎか分教室に児童生徒 232 名が学んでいる。通学範囲は長野市や上水内郡をはじめ、須坂市・上高井郡、中野市・下高井郡、飯山市・下水内郡と広域にわたり、自力通学（徒歩、自転車、路線バス、電車）や付添通学、スクールバスによる通学（スクールバス 5 台）をしている。また、本校には寄宿舎もあり令和 4 年度は 35 名の生徒が利用している。

本校は長野市の上野ヶ丘の中腹斜面に立地し、長野市古里や豊野方面が一望できる。令和元年度に起こった台風 19 号災害では、校舎に被害はなかったものの、周辺の被害状況に愕然とした。被災した家庭も少なからずあった。また近年の天候不順、特に予測不可能なゲリラ豪雨等への対応から何度か一斉下校や家庭の迎え（引き渡し）による下校も検討した。これらのことから、あらためて防災について日頃から考え実践していく児童生徒を育てていきたいと考えている。

2 長野県長野養護学校の防災体制について（概要）

長野養護学校では、これまで年度当初に避難経路や基本的な避難方法を確認する訓練、秋に地震を想定した訓練を毎年度実施してきた。また、寄宿舎でも同様に 2 回の訓練を実施してきた。昨年度は初めて引き渡し訓練（密を避けるために、小中学部と高等部を別にし、2 回実施）をし、保護者にも災害に対する意識をもってもらえたことができた。

今年度は、全校一斉に保護者に引き渡す訓練や避難時の生徒搜索訓練、防火扉が閉まった時の対応等よりいっそう実際の災害を想定した訓練を行ってきた。寄宿舎では職員が少ない中でも保護者へ安全に引き渡す訓練（保護者への連絡訓練・職



員が保護者と生徒役となり引き渡し訓練)を行った。また、昨年度アドバイザーの先生に教えていただいた「防災ポーチ作り」や「安心グッズ」の準備など児童生徒が主体的に防災を考える授業も行ってきた。

(1) 避難訓練について

①第1回避難訓練：避難経路及び基本的な避難方法確認

<火災発生想定> 4月26日(火)：全校(小・中・高別)

②第2回避難訓練：地震による避難および引き渡し訓練

<地震発生想定>

7月1日(金)：全校



③第3回避難訓練：避難時の生徒捜索訓練を含む <火災発生想定>

10月20日(木)：全校

- ・教室以外の場所からの避難(小中学部は自由時間中、高等部は清掃中)
- ・学級に関係なく近くにいる職員が避難誘導
- ・防火扉が閉まる
- ・生徒1名避難時に行方不明のため職員係活動で捜索する

④寄宿舎第1回避難訓練：避難経路及び基本的な避難方法確認 <火災発生想定>

4月25日(月)：月曜日泊の生徒(感染予防のため、ブロックごとに実施)

⑤寄宿舎引き渡し訓練(連絡および模擬引き渡し訓練)

9月30日(金)

<地震発生想定>



⑥寄宿舎防災安全教育・ショート訓練 <火災発生想定>

1月10日(火)～18日(水)：防災安全教育週間

- ・火災が起きたときの行動の確認
- ・防寒具の掛ける位置の確認

1月24日(火)：ショート訓練

- ・1階機械室からの出火を想定し、第2避難経路の確認



(2) 防災教育

①地震の発生における危険性について

- ・各避難訓練に合わせて、部・学年・学級・寄宿舎ブロックなど、児童生徒の生活に合わせて学ぶ機会を設けた。

学習カード例

「緊急地震速報がなったらどうする？」

②引き渡し訓練で保護者を待つときのアイテムについて

- 引き渡し訓練で、保護者を待つときに、「自分は何があれば長い時間待てるか」を考える時間を設けた。
- 例「お家の人がかかるのを待つとき何があればよいか？」
- 必要なものをバックに入れる。
- 先生と一緒に安心グッズをそろえる。
- 防災ポーチを準備する。

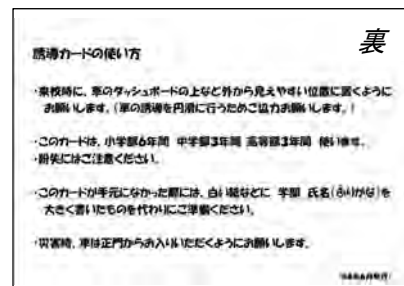
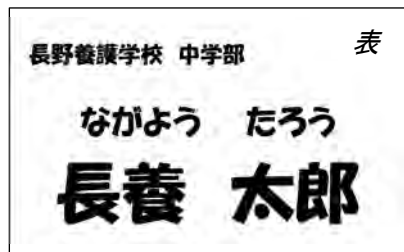


3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 信州大学 廣内大助先生より

昨年度に引き続き、今年度も7月1日の引き渡し訓練を実際に見ていただき、本校災害時危機対応委員および防災・安全係にご助言をいただいた。本番だったらどうなのだろうと考える、何が足りないか、何を準備しておけばいいかを考えておくことの重要性を教えていただいた。児童生徒の出席状況や職員の勤務状況を把握しておくこと、長時間待つことになるので児童生徒が不安を減らし待てる方法を事前に考え準備しておくこと、誘導用看板として矢印をたくさんラミネートしておくこと、また普段使いしておくことなどのご助言をいただいた。昨年度の反省をもとに実施した「部ごとの色別の誘導カード」についてはよい方法であるとお褒めをいただき、心強い思いをもつことができた。

今後の課題として、帰宅困難者もいることや緊急時に学校へはどのくらいの時間で迎えに来られるか等を事前に把握しておくこと、季節によってどのように対応するかの想定もしておく等のご指摘をいただいた。今後、考えていきたい。



[小中高色別誘導カード]↑

(2) 立正大学 白神晃子先生より

白神先生には、8月4日にリモートによる係指導、12月15日に来校して職員研修「非常時を想像して日常を創造しよう」を行っていただいた。8月の係指導では本校の現状をふまえ、今後どのように計画を進めていくかに



ついて多角的に相談にのっていただくとともに、特別支援学校での防災教育について他校の例を教えていただいた。12月の係指導では1年間の本校での活動を振り返りながら、来年度への課題把握をすることができた。その中で、「先生たちの防災意識が高まっている」点について評価していただいた。昨年までと比べ、訓練についての批判的な意見がなくなり、「こういう場合はどうすればよいのか」「こうしたらよいのではないか」等建設的な意見が増えてきていることを実感している。このことが、「防災への意識の高まり」であると捉える。昨年度は「まずやってみよう」というご指導をいただき、我々もそれを合言葉にやってきたが、やればやるほど課題が見えてくる。児童生徒の待機場所、暑さ・寒さ対策、保護者の車の駐車スペース・ルート、保護者の待機の仕方、トイレ、食事（備蓄品）、待機児童生徒がでた場合の対応等々、訓練の想定を検討する中でも、様々な点に気づく目が職員に育ってきたように思う。また、12月の研修では、実際の災害を想定し「こんな時はどう行動するか」「どんな情報が必要か」「どんなものが必要か」等、先生の問いかけに「自分ならどう行動するか」「自分ならどう考えるか」について考える機会を与えていただき、職員一人一人が自分事として考える研修となった。

4 事業の成果及び今後の課題

今年度は学校安全総合支援事業を実施して、2年目であるため、『「試してみよう」「振り返りをしよう」「振り返りを元に計画を改善しよう」「またやってみよう』という考えをもって、防災管理・教育をすすめてきた。やればやるほど課題も見えてくることで、次は「どのような想定で訓練をしよう」「何を準備しておけばよいか」等を考えながら、計画してきた。休憩時間中の訓練、停電になってしまった場合の訓練、防火扉が閉まってしまった場合の訓練など今まで踏み込めずにいた場面を想定して訓練できたことは大きな成果であると考えている。また、本校の立地条件・校舎設備等に合わせた防災マニュアルの見直しを継続的に行っていることも成果としてあげられる。ただし、様々な事項についてすべてのマニュアルをつくることは不可能である。基本の形を理解した上で、臨機応変な対応ができるようにしておきたい。日頃より教職員同士で、不安を語り、そんなときどう対応すればよいか、何を準備しておけばよいかを考えておくことが、いざという時の臨機応変な行動に活きるのではないかと考える。

課題としては、あげれば数限りなくあるが、2次避難場所や地域との連携について、停電や携帯電話が使用できない場合の保護者や職員への連絡方法、天候や季節による待機場所の判断等は今後も引き続き考えていかななくてはならないと考えている。



5 まとめ

本事業に参加したことが契機となり、これまで課題としながら手つかずであった点について取り組み始めることができた。学校防災アドバイザーにより、取り組んでいく上での視点を明確にさせていただいたり、他校の実践例を紹介させていただいたりしたことにより、より取り組みやすくなった。今年度取り組み始めたことにより、本校職員の危機管理意識も高まっていることを感じるので、来年度も全職員で防災意識を共有して取組をさらに進めていきたい。また、来年度は「防災教育」という視点を大切に考えていきたいと考えている。児童生徒の実態に合わせた防災教育（授業）が部や学級によって差があることは否めない。昨年度、ご指導いただいた「防災ポーチ」もすべての学級では取り組めていないことも事実である。来年度はすべての学級で防災教育が実施できるよう「防災週間」等を設定し、児童生徒が防災を集中的に考える授業に取り組んだり、防災弁当日を設定したりすることも考えたい。そして、継続的に防災教育に取り組む風土を構築していければと思う。

災害はいつ起こるかわからない。だからこそ、防災グッズの整備や防災倉庫の設置、児童生徒・職員・保護者・地域の方等の危機管理意識の向上と備え・連携、「こんなときどうする？」を常に考えながらの訓練等、児童生徒・職員の命を守る取組を学校として継続して取り組んでいきたいと強く思う。また、保護者の方にも学校だよりや全校保護者懇談会等で防災研修をした内容や成果等を伝え、共有していきたい。

（文責 教頭 丸山 勝己）

長野盲学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

— 命を守る避難訓練・防災安全教育 —

長野県長野盲学校

1 はじめに

長野盲学校は、東北信地区の視覚障がいのある幼児児童生徒を対象とした特別支援学校である。明治33年（1900年）4月、「長野盲人教育所」として開所し、今年度122年目を迎えた県内の特別支援学校の中でも最も歴史の長い学校でもある。昭和35年（1960年）以来、この地（長野市北尾張部）に位置している。本校は長野市の洪水ハザードマップで3mの浸水想定地区に指定されており、長野市の福祉避難所にも指定されている。



幼児児童生徒は30名が在籍しており、そのうち12名が寄宿舎を利用している。本校の特徴としては、0歳児から成人まで幅広い年齢層の幼児児童生徒が通学していること、国家資格（あんま・指圧・マッサージ師、鍼師、灸師）をめざす理療科があること、視覚障がいのある教職員が数名いることなどがあげられる。見え方や見えにくさは一人一人異なり、全盲の幼児児童生徒は2割で残り8割は弱視である。また、知的障がいや肢体不自由等の多様な障がいを併せ有する児童生徒が理療科を除いて半数以上在籍しており、多様な対応が求められている。また、在籍幼児児童生徒の他に早期支援教室、早期教育相談、通級指導教室、東信教育事務所眼の相談室には地域在住の子どもたち約30名が定期的に通っている。

本校の幼児児童生徒が防災について見通しをもち、自分ごととして判断、行動できるよう、防災教育の充実に向け、取り組んでいる。

2 長野県長野盲学校の防災体制について（概要）

(1) 学校での避難訓練

- | | |
|---------------------|----------------|
| ①第1回避難訓練（火災避難経路の確認） | 4月13日（水）10:50～ |
| ②浸水時対応避難訓練（水害 垂直避難） | 5月17日（火）10:50～ |
| ③第2回避難訓練（地震） | 9月1日（木）10:50～ |
| ④第3回避難訓練（火災 予告なし） | 11月4日（金）13:35～ |

【理療科 職員・生徒 避難の様子】9/1
手すりを伝いながら慎重に階段を下りて避難。



(2) 寄宿舍での避難訓練

- ①第1回避難訓練（火災 避難経路の確認） 4月11日（月）17:30～
- ②第2回避難訓練（地震 地域の方との合同訓練） 6月28日（火）17:30～
- ③第3回避難訓練（火災 くぐり戸を通る避難） 10月20日（木）17:30～



【地域の方との合同訓練】6/11

直前の打ち合わせ時に手引き歩行を地域の方に示し、実際の避難につなげた。

(3) 寄宿舍の防災学習

- ①昨年度の振り返り 5月10日
見直しをもつ
- ②暗い中での避難体験 5月24日（火）
浸水3m体験、暗い中での避難、手引き歩行
- ③地震体験 6月22日（水）
マグニチュード音体験、ダンゴムシのポーズ
- ④トイレ体験 7月20日（水）
仮設トイレ体験
- ⑤サバイバル飯炊き体験 10月26日（水）
100円均一で購入した炊飯袋を使って
お米を炊く
- ⑥泊り体験 12月6日（火）
段ボールベッド、車中泊を体験



【トイレ体験】7/20

福祉避難所の簡易トイレを組み立て、座ってみた（長野市の許可あり）。

3 学校防災アドバイザーの関わり（学校防災アドバイザー白神晃子先生）

(1) 校内危険個所の確認と防災体制について 7月28日（木）

- ①校内を回り、危険個所についてご指導をいただいた。
 - ・重い物は下の棚へ移動する
 - ・棚のガラス戸に飛散防止フィルムを貼る
 - ・揺れで物が飛び出ないように滑り止めシートを敷く
 - ・断捨離、整頓、配置換えで安全の確保をする等



ドアをふさぐような棚の置き方、棚の上に物を積み上げた置き方についてご指摘いただいた。（調理室）

②避難全般について

- ・盲学校では耳からの情報が大切。必要なことは伝える。また、待っているときの状況についても伝えるといい。
- ・パニックになってしまう生徒がいるようなら落ち着けるものを用意しておく。防災ポーチづくりをまず職員でやってみるのもいい。
- ・引き渡し訓練は通学範囲が広いので、タイムラインを作成していく（地域の方、全盲の先生方にも入ってもらい一緒に作成することが大切）。

(2) 寄宿舍 泊り体験授業参観 12月6日（火）

〈授業概要〉

段ボールベッドは床からの高さがあることで防寒、防ウィルスに効果的であることを体験し、車中泊体験を行った。エコノミー症候群を防ぐためにも足を伸ばして寝ることの大切さ、心地よさを体験から学んだ。

〈白神先生より〉

はじめは楽しいと思うことから体験していくことがいい。一度体験していることは実際場面で役立つ。寄宿舍ならではの体験的な学習をこれからも積み重ねてほしい。



【車中泊体験】12/6

助手席に座っているより、ずっと楽！

4 事業の成果（○）及び今後の課題（△）

○校内の危険箇所を確認し、安全について意識を高めることができた。すぐできるところは改善し始めた。

△本校は長野市の福祉避難所にも指定されている。長野市の担当の方と受け入れ場所や支援の必要性など打ち合わせをする機会を早めにもちたい。

△洪水時のタイムラインについて、地域の方、全盲の職員等多くの意見をいただきながら、作成していく（来年度の評議員会に合わせてタイムラインを作成予定）。

△引き渡し訓練について実際に行くかどうかは状況によるが、迎えに来るまでどのくらい時間がかかるかの調査はしておく。

△防災ポーチづくりなどを通して防災に対する意識を高めていく（職員、PTA から）。



バケツリレーでトイレに水を流す体験（寄宿舍）



長野市福祉避難所の備蓄品を見学（寄宿舍）

（文責 教頭 丸山 妙子）

令和4年度 学校安全総合支援事業

実践報告集

発行年月 令和5年2月

発行者 長野県教育委員会

